

崔君は是等老幼婦女子が、負傷に、飢えに、渴に、苦しんでゐるのを見て、所持金の中から金貳圓餘りを出し、ラムネ其の他を買ひ求め、彼等に飲ませた。崔君の主人の大野儀一は病身であるから無事に避難して呉れたらうか。又主人の妻と母と妻の母の三人は三越に買物に出たまゝであるが、どうしたらうと心配にたへかねて、彼は忽ち、猛火あがり旋風渦巻き火の粉は雨と降る中へ主人を探しに出かけた。幸ひに主家の三婦人を堤の上で迎へ喜々として先きの場所に引かへした。恐ろしい夜をこゝで明かして二日の朝、三婦人を伴れて主人を探しながら南葛飾郡本田村立石尋常小學校前の豫ねて主人の知合の家まで来た。

喜ぶ主人に婦人等を渡し、崔君は寺島へ歸つた。老人女子供十一人組の保護者が十二時二十分頃に来たから引き渡した。崔君はやゝ安心したが本所區太平町に、實兄及友人がゐるので彼等を尋ねようと思つて見たが、全く不明であるために、空しく寺島へ歸つた。花井初子の一組を四ツ木の潰れた寺の庭に尋ねたが、負傷の手當さへ出来ないで、親も子も飢渴と疲勞の極に達してゐた。君は所持金悉く(五圓餘)で多少のものを買ひ求めて與へた。崔君は彼等を此のまゝにすれば、死ぬであらう。引出したからには、何とかして救助しなければならぬと、決心し持つて来た帯一本。ゆかた二枚を彼等に與へ午後六時頃本田村の主人の元へ金を借りに出た。

午後七時頃主人と面會して花井等を最後まで救助したいから金を二三十圓貸して下さいと懇願した主人は今晚は兎に角もうおそいからと言つてとめたので、其處に宿つた。

此の夜、津波だ!! との流言に屋根の上にあがる用意をした、が青年團から津波は來ないと通知されて蚊帳の中に入つて休んだ。暫くして鮮人騒ぎとなり、主人儀一と共に田の中にかくれた。やがて主人と崔君は出て来たが崔君は學校前の青年團に保護を求むる積りで、その中に入つた。

されど遂に青年團の手に捕へられ、暗い／＼所につれて行かれた。『貴様は何所か。』『朝鮮です。』『四ツ木で亂暴して來たらう。』『貴様も殺してやる。』崔君の全身は血みどろに染つた。

『何故殺すんです、其の理由を聞かせて下さい。』

『早く殺せ。』『やつつけろ。』と集まるもの、日本刀ビストル竹槍など手にした人、六七十人、崔君は溝の岸に伴はれた。君は遁れる由もなく、溝岸に立たせられ、頭を前に屈げさせられた。君の身命は風前の燈となつた。

『私に、今一度學校前に居る、主人儀一に尋ねさせて下さい。どうか善人か悪人かを調べてから殺して下さい。』

「そんなことをさく必要はない。」

一刀がキラリとひらめいた。此の時生命かぎりには、主人儀一の名を呼んだ。間髪を入れぬ其の時、天祐か主人の名を知る者があつて一度調べてやれと、交番に伴はれた。時は午後十一時頃であつた。彼は七八人と共に寺島警察署に送られた。十一日には千葉習志野へ、十月二十四日青山へ、十一月二十六日日本所區二葉バラックへ轉じて來た。今、彼は其處に鮮人で旅費もなく、歸國も出來ない三十人を勞はりながらそれ等の人の勞役口を探して働かせ、彼自身も大いに働らいてゐる。其後燒跡に主人を尋ねたがあへなかつた。

花井初子はその後訪れて呉れたので皆無事に助かつた事が知れ、その他の人々も無事に名古屋方面に居ると聞いて、崔君は非常に喜んだ。

崔君はまことに同胞相愛の眞義を體得した。有爲の青年である。危機に臨んで冷靜沈着、克く主人の一族を救ひ、又身に持てる一切を、隣人及び未知の人々のために投じた。而かも贖ひ得たものは瀕死の危難であつた。我等は之を悲しむ。しかしかゝる危難に遭遇しても君は帝都を去ることなく愈々益々その眞骨頭を發揮するに至つては感嘆の外はない。

本籍地 朝鮮成南北營郡下車書面上新兵里
住所當時 本所區向島小梅一七八番地大野備一方

崔 然 在君 (二十二年)

● 一 つ の 挿 話

崔陽天と金宗辰は人蔘行商をして苦學して居た青年であつた。

九月一日の夕、戸塚射撃場の土手で煙と焰とに覆はれた東京の空をながめて、うめくやうな嘆聲を漏してゐた。二人にとつては東京は第二の故郷であつた。二人は頭をたれて土手を下りた。

「うん……歸らう……恐しいなあ」

金の顔にも寂しさが動いてゐる。

曲り曲つた暗がり路を二人は黙々として歩み續けてゐた。

「鮮人！ 鮮人だ。」

「つかまへろ、……追っかける」

「ソレツ……」

ワア／＼した殺氣立つた喧騒の聲が彼等の後に起つた。亂舞する人影——亂調な聲音……

「鮮人!」……さつきの耳を掠めていつた言葉が二人の心に頭を擡げた……と不安な氣がサツト流

れた。たゞ事ではないと直感した彼等は、

「逃げる!!」と呼び合つた。本能的に危険を感じた二人は放たれた矢のやうに無意識に駆け出した。彼等の飛び込んだ家は彼等の寓居だつた。戸塚町諏訪鈴木萬次郎君の蕭洒とした居宅なのだ。萬次郎翁は七十歳——古稀の齡を保つて矍鑠病を知らぬ方である。老妻うめ子と餘震を庭に避けて静かに天災の恐しさを語り合つてゐた。……と門扉を碎けよと打ち開いて黒い二つの影が飛び込んで来た。

「こゝだ。——こゝだ」

「この家だ」……逃げこんだ……鮮人だ……おさえろ……轟しめきあつて十四五人の人々が二人を追うて屋内に迫つた。而し其の時、萬次郎翁とうめ子とは嚴然と行手を遮つてゐた。追手の一人は二人の前へ進み出た。そして今二人の鮮人が逃げ込んだことから、巷間に流布してゐる鮮人暴擧の風聞を話して一應檢べて見たいと申し込んだ。

「確かに二人は鮮人です。而し二人は善良な鮮人です。専念に學究の道にいそしんでゐる學生です。私等はまだ二年半といふ長い間お世話してゐるのです。彼等のよい人間であることは私共夫婦がよく識つてゐます。袖摺り合ふも他生の因縁があるからです。一樹の下に憩ふも、一河の流をくむのもみな宿縁があるからです。この際二人の心を安心させるのが、私共夫婦に與へられた天意だと思

ひます。私共を信じてお引取り下さい。」

萬次郎翁の條理ある言葉に不満足ではあつたが一應の謝辭を残して人々は歸り去つた。

「崔さん、金さん、大丈夫ですよ」

四疊半の隅に抱き合つて眞蒼になつてゐた二人は老夫婦の姿を見て安らかなうなづきを見せて立ち上つた。大きな手を擴げて二人は老夫婦の手に轟しとばかりに握りついた。

「……………」

感激に燃えてゐる彼等の唇はビク／＼痙攣するばかりで聲は出なかつた。——その蒼白い二人の頬を流れる泪ばかりが光つて見えた。手を握られたまゝ、老人夫婦も泣いた。沈黙せる四つの影が、いつまでもいつまでも動かなくなつた。

三日たつても四日すぎても混乱と動搖の大波はそのうねりを收めなかつた。

全市と其の郊外は糧食の窮乏停電断水の試練を享けねばならなかつた。其の渦巻の中に坐して人々は恐怖に充されて暮した。殊に鮮人には其の上に更に一つの脅威が加へられてあつた。

鈴木夫妻に救はれた崔陽天、金宗辰は安らかな日を送る事が出来た。金宗辰——彼は矢張り舒川郡の生れであつた。或日の事であつた。朝まだきから降り出した雨が庭の植込みの樹々を鳴して降り續い

てゐた。

「崔さん、僕全くわからなくなつたよ。災禍の中から拾ひ上げられた僕達の生命はまた一つの死の淵に臨んでゐるではないか。自分の生命なのか、人のための生命なんだかさつぱりわからなくなつたよ……」

崔は黙想の眼をみひらいて唇をきつた。

「僕達は一つの生命を抱いて此の地上にある間生きることを許されてゐるのさ。而も僕達の持つ一つ一つの生命だつて決して多くの人のもつ生命と切り離した物ではないね。自分のもつ一生が生命の全部だと考へたら、僕は寂しくつてやりきれないね。早い話がさ。僕達の生命は鈴木夫妻の生命のうちにも救はれて生てゐるではないか。僕には孤立した生命の幸福……それはとても考へられないね……」

「人類の愛に生きる世界……」寂しさを眉の間に刻んで金は唇を閉ぢた。

「その世界、それは決して空想の世界ではない、人間に尤も近い現實の世界だよ。鈴木夫妻の救ひのもとに生きてゐる僕達の現在……僕達は今、明らかに人間の愛による世界に生きてゐるのだ。僕は幸福を感じてゐる……」崔は輝いた瞳を天井に向けて何ものかの聲を聴かうとしてゐるやうだ。

二人の間にもよつと沈黙がつゞいた時玄關のベルが鳴つた。

「をばさんだ……」

鈴木うめ子は彼等のために配給米の重い袋を肩にして歸つて來たのであつた。金は飛んで行つて袋を下してやつた。びしょ濡れになつた其の姿、泥はねをあげてゐる其の姿——を見た時崔は、

「僕達のために……」と云ふ感激の情に充されて、無言のまゝ、米の袋を勝手元へ運んだ。

十月二十一日、崔陽天、金宗辰の二人は故國の風物に心ひかれて芝浦の港から歸つて行つた。幾日かたつた。二人から長い便りがあつた。

「秋漸く深くなりまさつて行く韓山の落日に遠く嘶きかはす驛馬の聲をきく時、あなた方を遠く思ひ出します……と金の便りに書かれてあつた。

「清朗な月に雁金が鳴いて渡る夜です。お二人を思ふ心にたえきれず筆をとりました……と崔の手紙は書き出されてあつた。

「あなた方を一生忘れません……と二人のたよりは不思議にも同じ言葉で結ばれてあつた。

「淋しいなあ……」萬次郎翁の唇から洩れた言葉は弱々しかつた。

「どうしてることやら……」うめ子もうなだれた。

秋晴れの空を遙るくと渡つて来た小鳥の聲が庭の植込みの葉陰からチイ／＼聴えて来る。

二人の膝には頻りに泪がはふり落ちた。人生七十年、嶮難な浮世と闘つて来た老境の身うちに尊くも抱かれてゐる二つの『愛の珠』玉は濁世の穢れの中におかれてゐながら、なほかつ其の淨らかに澄める光を靜かに放つてゐるのである。

東京府豊多摩郡戸塚町諏訪一五三 鈴木萬次郎君 (六十四年)

●醫師と女教師の美しい心

芝御田高等小學校に田所富美(三二)といふ女の訓導がある。震災の當日學校を退いて自宅に歸つて見ると、家屋は全部倒壊してゐたので、やむなく學校へ引き返して来た。不安の中に一日の夜も過ぎ、九月二日となつた。學校には大した被害もなかつたので直ちに校舎を開放して一般避難民の收容所に充てた。午前十時には早や二十八名の罹災者が避難して来た。越えて九月五日には五十七名田所富美子はこれ等頼りない罹災者を見て非常に同情し、その間殆ど不眠不休で避難者のために何くれとなく世話をした。その避難者五十七名中に淺見トミ(五〇)といふ病人の女があつた。彼女は震災すつと

以前は有樂町の「タマキ屋」といふ家に奉公してゐたが、奉公中胃腸を害して、新橋の實費診療所に入院中を焼け出されたのであつた。一日の日夜中徒歩にて、品川方面から桐ヶ谷方面をさまよつてゐたが、朝鮮人事件で再び逆もどりして三田方面へ逃げ歸つて来たところを、どこかの生徒に案内されて御田高等小學校に避難して来たのである。それが九月四日のことであつた。ところが芝區三田四國町三田醫院の院長奥山伸君は住宅が、學校のすぐ近所の通新町にあつた關係でもあらう。何人の依頼も受けず、三日から來校して避難者中の病人を朝夕見舞つて親切に診察した。四日には彼女も亦田所君の好意によつて奥山君の診察を受け、更に無代で服藥治療することが出来た。九月六日には金杉濱町から高木ヤス(四六)といふ女が避難して来たが、これも亦腸胃を害してゐたので奥山君や田所君の世話になつた。奥山君は三日から朝夕診察に來てゐる間に、親身も及ばぬ程親切に避難者を世話してゐる田所君の行爲に感動し、且つ不眠不休の結果健康を害してはならぬと葡萄酒一本を田所君に贈つたがこの貴重な葡萄酒を「自分で飲むのはもつたない。」と悉くそれ等の病人に分けて飲ませてしまつた。ところが九月八日には今年十一歳になる宮口精次といふ男の子が父の周市君に伴はれてやつて來た。精次少年は恐ろしい肺結核の患者であつたが震災當日は火のために六時間も水の中に浸つて避難してゐたので身心共極度に疲勞してゐた。肺核結であるといふので少し隔離して收容し奥山君の治

療を受けてゐたが、食事やたんの處理は皆田所君の深切な手に煩はされたのであつた。殊に痰は一々紙にとつてそれを處理したのである。九月十四日には前に述べた高木ヤス子の使用人である森義雄、同阿久津安吉の兩君が耳下腺炎に罹つたので、之亦奥山君の親切な治療を受けた。其の後避難して來た者に吉野福太郎(六五)同リン(六二)の夫婦者があつた。この人達は來た時から泣いてゐて田所君もこれにはよはつたといふことである。そこで色々と慰めて朝夕例の葡萄酒を一杯づゝ飲ませてやつた食物等與へる時には拜んでゐたといふことである。かうして軽い病人は大抵は二三日で全快したが、(肺結核の宮口少年は九月十三日巢鳴の親類へ移された。)やさしい田所君を思ふことは日に深くなつた。小使などが、「今日、田所先生はお家へお歸りになつたよ。」等といふと、眼の色を變へてその眞否を尋ねるといふやうな有様であつた。そこで田所君も自分の家へ歸らなければならぬとは知りつゝも、とう／＼九月二十六日まで學校に滞在してしまつた。その間一般避難者の世話と言ふに及ばず殊に病人や年寄の爲めに非常に手厚い世話をした。かくして一般避難民は九月二十三日に全部南海小學校へ移されたのであるが、その中田所君が一番初めから世話をしてゐた淺見トミ女は、田所君に別れるのを非常に惜しんで「自分は南海へ行けば、やがてバラックに移される。バラックに移さればきつと死んでしまふでせう。」と落膽してゐた。心のやさしい田所君は「いゝえ、心配することはあり

ません。私がまた及ばずながら御世話してあげますから。」と言つて、とう／＼淺見トミ女を上大崎十番地飯島方の自宅へひきとつてやつた。同女は埼玉縣の秩父に親類があるといふ以外頼るべき者が全くないところの獨身者である。その上焼出されて蒲團もないので、田所君の好意で區役所から毛布を配給してもらつた。目下同女はリウマチスに罹り、これも田所君の好意で芝二本板の大木といふ鍼術醫に通つて治療を受けてゐる。色々田所君に慰められるので今では非常に元氣づいて日曜等には教會に通つて説教を聽いてゐることである。

長い間心身を過勞せしめたのであらう。その後田所君は腎臟を害して二週間ばかり學校を缺勤し今でも服藥されてゐるといふことである。奥山醫師といひ田所訓導といひ、何れも人に頼まれたわけではなく、自ら進んでこれ等避難者のために親身も及ばぬ親切と努力とを盡されたのであつた。

現住所 芝區通新町十三番地

芝區三田四國町三田醫院院長

奥山 伸君

現住所 府下荏原郡上大崎町十一番地飯島方

芝御田高等小學校訓導

田所 富美子 (三十一年)

●美はしき隣人の情

グラ／＼とあの恐ろしい強震が見舞ふと一たまりもなく二階家が潰れた。この凄惨な物音、續いて起る悲鳴の聲！ この家の二階にはお産をしてまだ日のたぬ母親と赤子と三男吉次（四つ）とがゐたが、幸にも屋根が拜みかゝつてゐたので人命には別條はなかつた。

この物音に驚きその惨状を見た隣の人大河原かね子と娘のつな子は二階傳ひに潰家の二階に行つて親子三人を救ひ出し我が家に連れて來た。助けたものゝ根が氣弱な女のことなれば一時も安心が出来ず、かね女は風呂敷包一つを手にし、つな女には吉次を負はせ隣人と共に急いで玉姫神社の境内へ逃れた。つぶれ家の主人布田仁吉君は次男八郎（八歳）の手をひいて逸早く玉姫神社へ逃げのびてゐたが急卒の場合唯驚き呆れて叩頭するばかり：「この通り子供が多いものですから、誠にすみませんが吉坊はよろしくお願ひいたします」と頼むのみであつた。續いて來る二震三震は一層人々を極度の不安へ導いた。立上る黒煙、のろひの焔は早この一角を舐めはじめた。吉次君の親兄弟は神社の石倉にはいつて唯荒れ狂ふ猛火に慄へてゐたのであつた。氣弱なかね女は居たまらず娘つなと手をとつて神社の垣根を越え、聖天様から河岸傳ひに電車路へ出で、人波の中にわけ入つて、やつとの思ひで夕方上野の山へ逃げのびた。つな女の背にはいとしの吉次が空腹を告げて泣いてゐる、その聲を耳にする度かね女親子は、たとへ自分等は餓ゑ死するとも此子だけには食を與へたいと思つた。一心になつて

右往左往し、心ある人の袖にすがつてはお握りを貰つて子供の餓を支へたのであつた。

不安と狂亂とは刻々につのり花の都は焦熱の地獄と化しつゝある。斯うした中にも遠くまで足を運んで或はパンを購ひ或は菓子求めて只管に吉次の機嫌をとつて三晩を上野に過したのであつた。三日の晩にはもう火も大分鎮つて居たので、四日早朝上野を立つて親子は廢墟の我家を訪れたが見るかげもなき我家、隣家、さては玉姫様の境内親子の者は涙ながらに子供の親を尋ねた。ふと石倉の中には無慘にも黒焼けになつた隣人親子の死體が並んでゐるではないか、かね女親子はあつとばかりに驚き泣きくづれた、吉次は聲を限りに父母の名を呼んだがこの子の親はもうこの世のものではなかつたのだ。両親を失つた孤兒かね女等はいかと思ふと一層不憫を覺え、丁度この日此處で落ち合つた夫と焼板を集めて唯々雨露を凌ぐ體のバラツクを建て此處に腰を下して、ひたすらに幼兒をいたはつた。その中子供は腸を病み下痢を始めた、彼等親子の驚きは一通りでない。遠方まで行つて藥を求め、慈養物を購つて終日看病をした。又親子の骨を拾つて佛壇に祀り香花をたむけて、もの成佛をと祈つた。そして又布田の親戚なる横須賀仙臺へは夫々打電してこの急變を報じた。月の中頃には親戚の者も來て遺骨を携へ遺兒も伴はれて歸つたが、たつた四才のいたいけな童にも別れを惜しむ心があつてか「此處にゐる、此處にゐる」と言つて一同を一層涙ぐませたとの事である。

それから後四十九日にもなるとかね女は隣人の爲にと佛前に團子を供へ亡き靈を祀つてせめてもの手向けにその冥福を禱つたのであつた。

東京市浅草區玉姬町一四二番地

龜重妻

大河原かね子

(五十六年)

同次女

つな子 (十七年)

● 猛火の裡より亡夫の寫眞を取出す

附 女中の忠實及救護員の篤志

浅草區柳北尋常小學校に白石ヌヒ子(三九)と言ふ訓導がをる。白石訓導が初めて同校に奉職したのは明治四十年で、以來今日まで十七年間一日の様に教育に身を捧げ來つたのであるが、不幸にも昨年夫に分れて後は、遺つた一男二女は己れの細腕一つで養育しつゝ尙ほ職務大事と力めてゐられたのであつた。

彼女の家は本所區の入江町にある。震災と同時に本所方面は猛火に包まれたと言ふ話をきいて、たま／＼勤務中の彼女は校長の許可を得て取るものも取り敢えず自宅へ馳せ歸へつた。幸に家はまだ火

の襲ふ所とはならなかつたが危急は一刻の猶豫も出來ぬ。もう焰は目前に迫つて來て居るのである。彼女は自ら長男を背負ひ長女(六)の手をひき、今年三歳になる次女の充子を女中に負はせた。かうして一旦は家を出たがふと思ひついたのは、佛間に飾つてあつた亡夫の寫眞のことであつたほかの荷物は惜しむに足らぬが、子供達が成人の後「父は」と聞かれたとき、もしあの寫眞を失つては何を指して答へようか。彼女はかう考へると、長女を女中の手に渡し、この時既に火の粉と煙とが一面にふりかゝつて來た家の中へ敢然として取つて返したのである。辛じて亡夫の寫眞を取り出して外へ出た時は、もう街上には人影もなく女中も、女中に託した二人の子も、どこへ行つたか影も形も見えぬ。彼女は氣も狂はんばかりであつたが、刻々に迫る猛火に如何ともせん術もなく、長男を負つたまゝ火に追はれつゝ子を尋ねて精根を盡して駆けまはつた。

かうして彼女は、猛火の勢がまだ衰へ切らぬ、二日の晩圖らず隣家の人々と共に避難してゐた長女を探し出す事が出來た。然し女中と女中に負はした次女充子との行衛は判らなかつた。隣家の人の話によると、途中までは姿を見かけたが、どこで見失なつたかその後の事は判らぬと言ふ。彼女はそれから身命を賭して次女の搜索につとめた。晝となく夜となく焼跡をさまよい歩き全市の避難所收容所をそれからそれへと尋ねまはつた。かうして空しく奔走を續けること實に三七日、その二十一日目に

龜戸保育所を訪ふて、そこに掲げてあつた收容兒の寫眞を見た時、彼女は夢かとはばかり狂喜したのであつた。

聞けば次女の充子は秋田縣救護班の一員として出張してゐた、同縣防疫官吏永井昌一君に引取られ同君の郷里で養育されてゐると言ふ事が判つた。偶然にもまたその秋田縣は彼女の出身地であるのでますますその奇遇を感じ直ちに歸郷して、この奇蹟のやうな親子對面を遂げることが出来た。

さて次女の充子か龜戸福田會保育所に收容されるに至つた経路についても、特に忠實な女中の行動を記さなければならぬ。女中は白石トク(一五)と言ふ少女である。次女を背負ひ長女の手を引き最初は隣家に避難してゐたが、主人の安否を待つ間もなく、火は益々迫つて来て、隣家の人々も我勝ちにと逃れ初めたので、彼女も人波にもまれ、錦糸堀停車場まで逃げて行つた。まもなくそこも猛火に包まれ右往左往の混亂の最中いつの間にか彼の少女は隣家の人々と長女とを見失つた。この上若し次女の身に過ちあつてはと咄嗟の間に思ひ定め焼けつゝある鐵道枕木を飛び越へ、龜戸を指して逃げ延びた。その途で彼の少女は遂に手足に大火傷を負ふたのであつたが、その昏倒の際にも身を以て次女をかばひ、遂に擦過傷一つ負はせなかつた。かくして次女は龜戸署の保安課長某君に救はれて福田會龜戸保育所に收容され、昏倒中の彼の女は津田沼鐵道聯隊の手に救はれて同聯隊内に收容された

間もなく彼の少女は郷里茨城縣の助川に送り届けられ、そこで療養を加へることゝなつた。

さきに次女の充子を引取つた永井昌一君はその後極力この可憐なる幼兒の一家の消息を探らうと力めたが更に手が、りを得なかつた。その中に秋田縣救護班の一行は歸國することゝなつたので、君は遂にこの幼兒の一家は全部焼死したものとあきらめ、保育所主事山内勇仙君の諒解を得て充子を貰ひ受けて郷里につれ歸へつた。その當時充子は營養不良の爲め衰へ果てゝゐたが、永井君は醫師に託して療養を加へ我が子のやうにいたはり、懇切をきはめて愛撫してゐたと言ふ事である。

白石訓導といひ女中のトクといひ又この永井昌一君といひ揃へも揃つた善行者と言ふべきである。

東京市柳北尋常小學校訓導 白石 ヌ ヒ子 (三十九年)

● 十二の兒に助けられた迷兒

北千住の町はづれ、新らしく出来た荒川放水路の土堤の上には、餘震と火災と津浪を怖れて家を逃出した無数の避難者が居た。九月二日の午後のことである。

編目も見えぬ程泥によごれた着物、身體にも似合はぬ大きな風呂敷包を斜に背負ひ、片手には女穿

の下駄を大事に下げて重い長靴を曳きづるやうにしたハッばかりと見える男の子が一人、充血した眼を不安に輝かせながら疲れ切つてよろ／＼と歩いて来る。誰が眼にもきのふの激震と大火とに市内で罹災した不幸な家族の連にはぐれた迷兒であることは明瞭であつた。しかしまだ混亂の最中である。下谷一帯は燃盛つて、避難者の群は郊外の通路といふ通路を雪崩れて通つて居る最中である。氣のつくものもなかつたか、誰も進んで保護してやらうといふものは無かつた。

恰度このとき通りかゝつたは南千住町第三瑞光尋常小學校訓導中村利助君の長男雅夫君であつた。雅夫君は前夜から病身な母や家族の人達と一緒に堤の上に避難して居たが母の身體の冷えるのを氣遣つて蒲團をとりにかへる處であつた。多感な雅夫君は眼早くそれを見つけると、もう黙つては見過せなかつた近よつて話をしかけたが返事をしようともせぬ。ともすればよろ／＼と倒れさうになる。これはどうしても助けてやらねばならぬと考へた。物は言はぬが子供同志の遠慮はない、黙つて背を向けると負ぶさるのを小さい身體に我慢して、或は下ろして手を曳いたり、辛うじて兩親の避難場所まで連れて來た。お父さんは學校の先生であるだけに喜んで迎へてくれた。

何を訊いても黙つて居るが、もう大分安心したらしい、水を飲ませ、飴やお菓子や罐詰など、有合せのものを與えると貪るやうに喰べる、喰べ終つたかと思ふと背負つて來た風呂敷包を枕にして他愛

もなく眠つてしまつた。昨日からの混雜に父母とは別れる、御飯はたべず徹宵歩き通した疲勞を加へて、氣力が盡きて居たのであつた。安心した堤の上に熟睡した子供の寝顔を覗いたとき雅夫君の眼にも再親の眼にも熱い同情の涙が光つた。

覺めてから徐かに訊質すと淺草田中町の時計商泰多三郎君の一人息子で泰一郎といふ待乳山小學校の一年生、年も八つといふことがわかつた。中村君夫婦も親の身許が知れたので安心したが雅夫君は自分のことの様に喜んで弟の着物をお母さんに頼んで一枚貰ひ泰一郎君の汚れた着物と取更へるやら、心を盡して慰めるその優しい真心は子供心にも通じたと見えて全く安心して何でも話すやうになつた。聞けばきのふの大震に泰坊のうちは半潰となつた。お母さんに風呂敷包と下駄を持たされて「失くすのじやないよ。確かりもつて」と言ひつかつたのが頭にしみて居た。兩親と手をつないで遁出す處をすぐ側から火事が出た、揉みに揉まるゝ人波に妨げられて、あつといふ間に兩親とは離れて仕舞ふ。それから後は何處をどう通つたのやら、夜に入つても歩き、夜が明けても歩いた。唯ウロ／＼と人の後について歩いた。千住大橋を渡つて荒川土堤に來た頃にはもう目が眩んで倒れやうとする處であつたのだ、夫れでも「確つかり持つてね」と言はれた言葉は忘れず、大事なものだと言ひ許りに一生懸命に包と下駄とは離さなかつた。救はれて後でも眠るときには必らず其の二つを枕もとに置かねば

安心しなかつた。

雅夫君はお父さんに頼んで田中町の方を探してやらうと意氣込んだが、まだ燃えて居ると留められて果さなかつた。四日になつてお父さんが市内に見舞に出かけるのを幸に一緒に行つて貰つて焼跡を探した。田中町はわかつたが満目唯茫茫、雅夫君は唯駭きの眼をみはるのみであつた。夫れでも折角来たことだからと豫て用意して来た白墨で其處らのかゝれる限りのものに

「泰一郎さんは北千住三丁目の中村方に無事に避難して居ります」

と大書した。「お父さんが生きて居られたら必らず一度は見に来られるだらう」と心頼みにうちにかへつた。

多三郎君は夫婦とも命を全うして上野に通延びたが氣も狂はんばかりに案せられるのは一人息子の泰一郎君の居なくなつたことであつた。上野の山は隅から隅まで遠く白鬚橋から寺島方面迄も手を盡して探かし廻つたが行衛が知れぬ、眞玉にも黄金にも替えられぬ愛の子寶、それを失つては生きて居る甲斐もないと心を碎いて案じ煩ふ折柄、ふと焼跡に白墨のしらせが書かれてあるのを發見した。天にも昇らむ悦びで五日の朝息を切つて駆込んで来た。親子相抱いた悦びの姿は叙する必要もあるまい見るものも涙なきを得なかつた。

雅夫君の心は屈いた。優しい雅夫君の働は酬いられた。雅夫君には「小さい救ひ」それ、をなし遂げ得たことが己に立派な報酬であつた。

東京府南足立郡北千住町三丁目三番地

中村雅夫君 (十二年)

◎これは校長先生の御寫眞だ

淺草區石濱小學校の五年生鈴木吉造君は性、快活、敏捷、事に當つて熱心で、いかにも生々した愛嬌のある良少年である。従つて學校でも、その篤實な、しかも温情の籠つた性格が常に衆望を引きつけて居た。

少年の家は同區玉姫町にあつて、父は大工で家計もあまり裕福の方ではなかつた。

今回の大震には、少年の家も半ば倒潰したので、危険を怖れて家財をまとめ、一家悉く石濱學校の校庭に避難した。處が校庭は早既に、同じ避難者を以て埋められ、身動きもならぬ有様であつた。同時に隣の橋場から火災が起つた。群集は只あれよ、あれよと逃げ狂ふばかりで何等施す術もなく、右往左往の混雜中、火は早や石濱學校の周圍を取巻き、危機一發の場合に瀕したので、又再び家財を

纏めて逃げ落ちなければならぬ破目に陥つた。その時まで彼は、五ヶ年の長い年月楽しく飛び廻つたこの運動場、友と共にいそしみあの教室、今日を限りと思へば去るにも去られず呆然として眺めてゐたが、纏て何事か思ひ當つたものと見え、奮然として跳り上り、校内深く進み入つた。蓋し幼心にも學校内の貴重品をせめて一品たりとも持ち出したいものだと思ひついては、矢も楯もたまらず、さては一散に校舎に駆けこんだものであらう。何か運び残したものはないか、自分の力で持出し得るものはないかと、校内隈なく探し歩いた。此時火は既に校舎の屋根に移つてゐる。少年は夢中で廊下を駆けめぐり、探しまはした末、眼についたのは、屋内體操場に掲げてある、前校長淺野先生、前々校長森先生の額面である。

少年は「これは大事な校長先生のお寫真だ。これこそ御眞影について貴いもの、この恩師のお姿を猛火の中に焼く事は出来ぬ、どんな難を冒しても取出さねばならぬ。」と咄嗟の間に思ひ定め、やをら身を挺して窓にとりつき、その小さな力を以て身に餘る大額面を取りはずさうと試みたが、それは不可能であつた。その額面は一丈も高く掲げられてあつたからである。少年は猶豫なく庭に駆け出し仔細を話して父に助力を乞うた。父は「そんな物を持つてはとて逃げられない」と言つて容易にきゝ入れぬ。もう猛火は二階全體にまはつて、窓口からは壯んに黒煙を吐き出してゐる。少年は泣き出し

さうになつて二度三度父に云つたが、「そんな場合でない。」と頑として聞き入れぬ。そこで彼は狂氣の如く再び取つて返し幼なき腕に必死の力をこめて、又もや之を取りおろさうと試みた。その健氣な努力を見ては、さすがの父も動かざるを得なかつた。かくてやうやく父の力を借りて、その大額面を取りおろし、かくて二枚の額面はやがて少年の背に負はれたが、それは大人でも尙もちきれぬ程の重さであつた。それを背負ふたまゝ、倒潰した我家を流所に見つゝ、幾度か猛火の下をくゞりぬけ、やうやく向島の白鬚橋まで逃げ延びた。父は途々幾度となくその額面の重さを氣づかつて、捨てる事を勧めたが、彼はどうしてもこれを聞入れなかつた。

その後混亂の中に九歳になる二男を見失つて、白鬚橋に二日間露營をせねばならなく餘義なくされた。父はその間に二男の行衛を探して歩いたが、どうしても知れなかつた。餘焰はまだ去らぬ。飢と疲れとはいやが上にも募るばかり、而も少年が肌身離さずその額面を護り續けて居る様は、いぢらし

いばかりであつた。
とかくする間に火もやゝ鎮まつて來たので、一家のものは疲れた足を引きづりながら、燒跡に歸つて來て、恰もよし交番に保護されてをつた二男を探し當てた。

その後慘憺たる燒跡に驚かされつゝ、淺草橋、日本橋、日比谷、赤坂見附、青山一丁目と途中幾度

となく自警團員に誰何され乍ら、三日の午後十一時頃、遠縁に當る穩田一四一市村俊治氏宅に、やうやく落ちつく事になった。

少年は、かうして救ひ得た二つの額面を再びもとの學校へ返さうと、自らこれを背負ひ出やうとするのを認めて、父は、「もう學校は焼け失せた。それに距離も遠い。」と強いて止め、事情を話して間近の青南小學校へ、保管を依頼する事にした。青南學校の職員一同は、この話をきいて、只管感服し、且つ少年の勞をねぎらひ、「決して心配するに及ばぬ。必ず元の學校にお届けするから。」と誓つた。それを聞いて少年は、やつと安心し、二つの額面を渡して歸つた。間もなく石濱學校の職員は知らせを得て青南學校を尋ね、この幼ない者の美しい愛によつて、火を免れた二校長の額面を受取り厚く禮を述べて歸つた。

淺草區玉姬町六十五番地主造長男 鈴木吉藏君 (十三年)

●弟妹を救助し勞つて牛込 神樂坂署員を感動せしめたる少女

「お姉様、怖い……」

「大丈夫よ、泣いてはいやよ」

「お母さんは何せこないの……」

「お母さんは……」

「しつかりつかまりなさいしつかり……」

大波のやうに火の海を逃れた群集は、親兄弟もあらばこそ、須田町方面より奔めき合ひ押し合ひ突き倒し、全く無我夢中で、九段の坂上へ、九段の坂上へと避難して行く、こんな騒亂と叫喚と熱火の巷に僅か十一歳を出るか出ない小女は、黒髪もおどろに振り亂して三歳ばかりの妹と五歳ばかりの弟をかひ抱きながら、人波に揉まれ／＼揉み倒されやうとしてゐる。そして子供等の間に以上のやうな對話が交はされたのである。此の子供等は、神田區裏神保町に住む陸軍參謀本部翻譯官清宮氏の令嬢令息等である。小女は安子さん(一)男兒は宗友君(五)女兒は花子(四)さんである。その日父君は丁度公用で旅行中であつたが、家族は以上の子供等の外夫人と書生一人がゐた。第一震と共に危険を感じた夫人は、安子さんに二人の弟妹を委ねて神保町電車停留場へやつた。直ぐ行くからと約束したが遂に親子は別れ／＼になつてしまつた。人間の一心ほど恐ろしいものはない。屈強な大の男ですら容赦

なく踏み殺される此の騒ぎに、僅か十一歳の小女安子さんは、花子さんと宗友君を抱いて飯田橋附近に辿り着いた。もう何萬と云ふ避難者で、當りは一面人間と荷物のすし詰めであつた。程なくこの兄弟は勇敢にしてしかも機敏な親切な巡査の手に救はれて、神樂坂署に收容された。眞心こめた同署員のもてなしで安子さんはホツとしたが、宗友君と花子さんは何うしても安心は出来なかつた。

「お母さんは……」

「もう御迎へに入らつしやる、もうじきに……」

思ひ出しては母戀しと呼ぶ宗友君と花子さんを、眞實のお母さんにも出来な様な、いじらしきであつた。泣き止むと兩人とも姉の膝頭に抱かれて無心に眠るのであつた。母戀し母戀しの念は安子さんとても決して――弟妹等に劣るのではない。彼等の眠りに着くのをまつてやはりさめくと泣くのであつた。父母を思ひ、自分たちの行末を考へて、眠れる弟妹にはうづりするいたけな少女をそつと窺つた署員始め、彼等を圍繞する數多の避難者たちは、もらい泣きせずにはゐられなかつた。分けて子を持つ女親たちは塔りかね聲を立て、泣くのであつた。かうした日が、四五日續く内署員の親切が家庭に知れて六日の夕方家族に引取られて行つた。

東京市神田區森神保町 清宮 安子 (十一歳)

●健氣な少年たばこを賣つて生計を助く

下谷區西黒門町二二番地に煙草店を營んでゐた飯塚榮三郎君の家も、此度の大地震に續いて起つた火の爲めにとうとう焼けてしまつた。榮三郎君の家には、十三になる可愛い銀三郎君といふ男の子があつた。

銀三郎君は眞面目な子で學校の成績も立派なもので、いつも級の模範生であつた。親思ひの銀三郎君は、毎日常家へかへると、三つになる妹のお守や、色々のお使や、お手傳などをよろこんでしてゐたところがあの災難で、家の生計向も思ふやうにならなくなつたので、親孝行な銀三郎君は、どうかして兩親の手助をしてやりたいと、幼い心をいためた末、少し許り持ち出した『たばこ』のあるのに氣がついて、父さんと、お母さんにねだつて、やつとお許が出て、毎日避難してゐたところから、直ぐ近くの神明町の大通へ行つて、地べたの上に小さな蕪を敷き、其の上に坐つて、色々のたばこを並べて賣つてゐた。

下谷區黒門小學校の安西校長が、子供達のために、一日中はたらいで、家へかへる仕度始めた頃

は、天幕學校に寒さうな夕日がさしてゐた。

焼け跡と言つても、晝間は道を歩く人も多く、自動車や馬車が走つて賑かだが、夕方になると急に淋しくなる。

先生はいそぎ足で、廣小路から電車に乗つた。やがて、『神明町、神明町』と呼ぶ車掌の聲にびつくりして降りると、あたりはもう眞暗で、道行く人も急ぎ足であつた。先生が外套の襟を立て、我が家へ足を向けると、丁度此處の曲り角で、十二位の男の子が、地べたに坐つて、寒い北風にさらされながら、暗いらうそくの光をたよりに『たばこ』を賣つてゐた。そのそばに母らしい人が、『もう店をしまつておかへりなさい。あんまり遅くなつて風邪でもひくといけないからね。』とやさしくいふと、少年は『いえこれから澤山賣れるのですから、もう少し。』となか／＼聞かない。『そんなにお前が心配してくれらるとお母様が悲しくなつてしまひます。』と二人が言ひ争つてゐた。よく見ると、少年の帽子には、黒門小學校の徽章がついてゐるので、校長はびつくりして、その顔を見ると、間違もなく、自分の學校の六年生の飯塚銀三郎少年であつたのだ。

『飯塚か』あつ先生』君は毎日此處でたばこを賣つてゐるのか。』と訊くと、飯塚君のお母様が代つて答へた。『銀三郎が何か少しでも家の手助になるやうにと言つて、學校からかへると、煙草賣をやつ

てくれるのです。暗くなると、私が迎へに来るのですが、いつもこれから賣れるとか、まだ早いとか言つて、寒いのも苦にせず働いてくれますので……。』と。

お母様の眼はうるんでゐた。これを聞いた先生も、その健氣な少年の努力に涙ぐみ、翌日學校の生徒一同を集めて一段高いところへ飯塚君を立たせて、校長は懇ろに昨日のお話をした上、みんなもとへ煙草は賣らなくても、心掛だけは此の銀三郎さんのやうに。』と少年の意氣込を教へた。とのことである。

下谷區四黒門町三三 飯塚銀三郎君 (十三年)

● 叔母の子供を背負つて逃れた勇敢な少女

麻布區市兵衛町一丁目一番地の迷子收容所に岩淵まさ子と云ふ十五歳の少女が收容されてゐた。落着いた如何にも利發らしい様子をした子供であつたが、收容されるまでの事情を聞いて實にいちぢりくも感心な彼の女の心根に涙を催さずにはゐられなかつた。

まさ子は本所區龜澤町の長谷川よしの姪に當り家事見習のため同家に厄介になつてゐた。地震につ

いで火事となつた時、まさ子は叔母の子供とよ(五)を背負つて被服廠へ逃れた。やがて此處も火に包まれて混亂の状態となつて來た。彼の女は此處に留ることの安全でないと言ふ事を感じたので矢庭に側の垣を乗越えて外に出で、必死となつて大川端に走り出た。之まで逃れ出たものゝ何方を見ても一面の火の海で進むことも退くことも出来ない。一方は大川だが舟とても見えぬ。今は絶望の淵に唯茫然と死を待つのみであつた。自分は死んでも仕方がない。けれども此の子供だけは助けたい。世話になつてゐる叔母様の子だ。可愛盛りの幼児だ。どうして殺してなるものか。彼の女の心にはとよちやんを救ひたい外には何物もなかつたのだ。

時に溢るゝばかりに人を載せた一艘の舟が岸近く漕ぎ寄せられた。救の神の來り給へるかと思つた女は悦んだ。聲を限りに舟を呼び、便乗を願つたが、何しろ鼠一匹載せる餘地さへ無い位満員の舟だ、子供とは云へ二人をどうして載せられやう。舟の人も陸に居た人も口を揃へて「駄目だ、駄目だ」と云ふばかりであつた。此の舟に乗れなければとよちやんは助けることが出来ないのだ。とよちやんを救ひたいの一念に狂氣の如くなつた彼の女は我が身も忘れて彈丸のやうに舟の中へ飛びこんだ。

向岸に上陸した彼の女は不思議にも危うき命を全うし、叔母の子供を上野の山に連れ行くことが出來た。然し此處も安んじて居るべき地ではない。小石川の方へ足に任せてさまよひ歩いた揚句、富坂

警察署で握飯を貰ひ餓を凌ぐことの出來たのは早や二日の日も傾く時分であつた。火の粉の中をくゞりぬけ、餓えた腹を充たしもせず、自分の疲れを忘れて只管怖しさに泣き止まぬ幼児をいたはりながら、幾度か危うき淵をのがれのがれた彼の女の勇氣と、利發とは實に見上げたものと云ふべきである。

九月十五日同警察署から此の收容所に移された。まさ子は叔母を尋ねて朝から夕まで子供を背負ひ歩いた。自分の郷里も分つてゐる。父や母も生きてゐる。けれども自分の責任を盡さない中は岩手縣の郷里へも歸らない。両親にも會ひたくない。無事に助けたとよちやんを叔母に渡したいと一圖に思ひこんだ彼女は毎日尋ね歩いては疲れた體を收容所へ運んで歸るのであつた。

叔母のよし子も無事に難を免れて習志野なる騎兵第十三聯隊の收容所に避難してゐた。まさ子とよ女の上を案じてゐた所、迷子收容所に無事であると知れて引取りに來た。二旬に亘つて心を碎いた一念が叶つて叔母に其の愛兒を捧げた時のまさ子の満足は如何ばかりであつたらう。

本所區龜澤町長谷川よし方 岩 淵 ま さ 子 (十五年)

○美しい六少年の謝恩と理科主任の手柄

小石川區明化小學校に詩のやうな、美しい話がある。同校の西谷（いち子）訓導は、神田區三崎町に住つてゐたがこの度の火災に全焼の厄にあつた。

今から丁度四年前に同先生から董陶を受けて今六年生になつてゐる男兒山縣孝、戸塚正宏、根本殊修、藤田主計、濱野久夫、末永孝二、の六名は先生がお氣の毒な目にお會ひになつたと聞いて、何とかして先生をお慰め申さうといろ／＼と思案した末、先生にも謀らず、父兄の助をも藉りずにふだんの小遣錢を節約して六人で一圓七十八錢を集め、受持の渡邊先生を介して西谷先生に贈つた。

西谷先生は今から四年前、しかも八つ九つの幼い頃、救へた子供たちがそれ程まで自分のことを考へて居てくれるかと思ふと、その謝恩の志が何より有難く、又尊く感ぜられて心の底から泣かされた。しかし子供たちが小遣を節しての贖金を受け取るのは心苦しい。もうその心だけで充分だからと辭退したが、校長中村靜三郎君が

「折角の生徒の美しい心のかたまりを無にしては」とすゝめられたので、遂にその尊い金を受けたとの事である。

此の美談のあつた明化小學校では震災と共に藥品から發火したが宿直井草園昌訓導と校長とで消し止めたので大事に至らなかつた。これについて、中村校長は、

「先に理科主任の鹽澤敬寛君が注意して藥品戸棚に硝子板を敷いておいて呉れたが、若しそれが無かつたら、この度は大事に到つたかも知れなかつた」とつけ加へられた。硝子板一枚の功德では無い。職務に忠實な心の功德は學校から火事を出すことを見事に豫防することが出来たのであつた。

東京市小石川區明化尋常小學校の兒童六人
同校訓導 鹽澤敬寛君

◎感心な少年蓮見武爾君

四谷見附に程近い尾張町二丁目に蓮見武爾といふ少年がある。今年十三歳、近くの四谷第三尋常小學校六學年に在學してゐる。東京の大半を灰燼にした一日の震災にも武爾君の身邊には幸ひ何事も起らなかつた。續々と入り込む下町方面の避難者の群や、一家全滅とか、親子生き別れとかの悲劇を目のあたり見たり聞いたりしては、愛に生く人は到底他人事として黙過することは出来ない。

武爾君の唇は堅く閉ざされ、眼は深く何物かを考へるやうであつたが、突如として其の母に繪葉書賣りの少年として立つ事を申し出た。眉宇の間に現はれた決心を讀んだ母は何事も問はず心から歓迎

した。

九月十五日武爾君は斯うして少年繪葉書賣りとして可憐の姿を四谷見附の十字街に現はした。道行く人々に此の様子は如何にうつた事であらう。雨來、雨の日も風の夕も武爾君の姿は此の十字街に見られた。少年とは云へ可弱い幼き者にとつて連日の呼び賣りは容易なことではなかつた。流石に咽喉の痛みに堪えかねることもあつたが、雄々しい武爾君は優しい母の激勵の言葉でよく之に打ち克つた。月が改まつて開校の運びになつた。十月一日武爾君は開校を期として賣り子を廢めた。可憐な少年の手に依つて五錢十錢と賣り積みられた金額は、實に五百五十圓の多額に達した。「塵も積れば山となる」といふ教室の格言を眞に味ひ得た武爾君は如何に喜んだであらう。斯うして得た五百五十圓の中純益百四十五圓は東京市少年團へ寄附された。

因に此の事業に對して學友富樫君と寫眞師吉野省三氏並に大山正夫君の賛同補助ありしを附記す)

東京市四谷第三尋常小學校第六學年 連 見 武 爾 君

●十四歳の少年の健氣な奮闘

西村君の父は中央新聞社に勤めてゐたが大正十一年三月に死んだので、母は菓子の小賣をしながら四人の子供を育てゝゐた。一家の生活がどんなに淋しいものであつたかは今更にいふまでもない。

九月一日の大地震に田町附近は、倒潰家屋が非常に多かつた。西村君の家も其の例に洩れず、丸潰れになつて親子五人は其の下敷となつてしまつた。母は倒れ掛つた茶箆筒に腰をしたゝか打たれて起き上ることも出来なかつた。俊三君は食事の仕度をしてゐたので臺所の方にゐた。座敷の方には二階があつたが、臺所は上が直ぐ屋根で引窓さへあつた。地震と共に駆け寄つて來た九つになる妹と、六つの弟と去年生れたばかりの女の子とは兄と共に怪我一つしなかつた。早速落ちて來た屋根の引窓から四人は助け合つて這出したのであつた。

母はと見れば出て來る様子もない。呼んで見ると幽かに應へる聲が聞える。俊三君が中にはいつて見ると腰を打たれて立てない始末である。驚いて母を援け出さうとするが年の割に體の小さい彼には到底力が足りない。妹を連れて來て力を合せ、やつとの事で屋根の上まで引出すことが出來た。母は水を飲ませてくれと頼んだ。彼は危険を冒して家根を降り向ひの渡邊と云ふ家の小母さんから水を買つて再び屋根に上り、母に飲ませた。母の苦しみは幾分薄らいだらしいが搖れ通しに餘震の來る折柄とて屋根の上に居る譯にはいかない。母を背負つて地上に下りようとしたけれども、彼の小軀にどう

してそれだけの力があろう。屋根から人を呼んで見たが他を顧みる餘裕のない人々は振向きさへしない。途方に暮れてゐると軍人が通り掛つたので、之幸と母を屋根から下して貰つた。俊三君は三人の弟妹を地上まで無事に運んだ。地上とは云ふものゝ倒潰した家屋などで土も見えない有様、寸時も此處には居られないのであつた。太田の徳さんと云ふ深切な人の力を借りて豊川稻荷の前にやうやうの事で避難することが出来た。

其の中に青年團員が来て母の重傷なのを見て、順天堂分院へ車で連れて行つてくれた。順天堂の手厚い治療を受けて四日まで親子五人は病院の世話になつてゐた。其の間俊三君は病める母を看病し泣く赤坊の子守をして殆ど眠らなかつた。そんな次第で家財何一つ出さないで、家は悉く焼かれてしまつた。金さへ一錢も持つてゐなかつた。母は體の自由も利かないのに親子の行末を思つては唯涙に咽ぶのみ、俊三君は慰めるにも言葉はなく共に涙にくれるばかりであつた。病院の方では本院が全焼したので其の患者を收容するためであつたらう。西村親子をいつまでも留め置くわけにはいかなかつた彼は近所の人に依頼して妹の通學してゐる赤坂尋常小學校の收容所へ入れて貰ふことになつた。

赤坂小學校は類焼を免れたので一日の夕刻から罹災者の爲に校舎校庭の全部を開放し、職員全部が不眠不休の活動を以て收容に、配給に、治療に奔走をしてゐた。西村親子は先生方の深き同情によつ

て不自由なく安んじて生活することが出来るやうになつた。母の體も日増しに快方に向つた。俊三君は相變らず母の世話弟妹の相手、炊事の用までまめ／＼しく働いて、孝行者よとの噂はそこ／＼に聞かれるのであつた。十月も末になつた頃親子五人は永く住み慣れた赤坂の地を後にして、南葛飾郡南綾瀬村字柳原百八十五番地の叔父の許へ引上げた。これからの永い生涯は俊三君の細腕によつて支へられねばならないであらう。彼は先生方に勵まされ、堅い決心を面に現はして行くのであつた。

赤坂區田町二丁目三番地赤坂區 高等小學校一年生 西村 俊三君 (十四年)

◎勇敢な少女

大震と共に家は倒れた。玉江さんと母親とは幸に逃れ出る事が出来たが、父をはじめ家族五人はその下敷になつてしまつた。殊に姉の靜江さん(一七)を助けるためには近所の人手まで借りなければならなかつた。

一家が漸く打揃つた時は猛火が既に南二丁ばかりの所まで追つてゐた。父は玉江さんとその三人の妹を程近い報徳寺の墓地に避難させ、決してこゝを離れるなと言ひ置いて家へ引返した。

兎角する中に火勢は益々盛んになり、風さへ加つて来た。父は母親に玉江さんの姉と兄とを連れて糧秣廠跡へ逃げさせて自分は報徳寺へ駆付けたが、その時はもう玉江さんは居なかつた。

これより先玉江さんは潮のやうに寄せて来る避難者の中に三人の妹を抱へて父の来るのを待ちわびて居たが風に巻かれた黒煙は此の墓所まで覆うてむせかへるばかりになつたので意を決して三歳の松江さんを背負つて五歳と八歳の妹の手を曳いて此の場を逃れ去つたのであつた。

僅か十三歳の女の子、而かも三人の妹さへつれて居るので次第に後に取残された。

玉江さんは泣き悲しむ妹を慰めながら、長崎橋から錦糸町へぬけ、停車場の裏にあるドツタの所まで来てそこに浮いて居た船の上に逃れた。しかしそこも安全ではなかつた。燃え上る火熱と飛びくる火の粉とに船までが火災を起してしまつた。玉江さんはそれにも屈せず、徒歩して少し離れて居る筏の上に移つたが、熱さに堪えかねて三歳と五歳の妹を筏の上に坐らせ、自分は八歳の妹と共に水中に入り、共に着物を脱いで水に浸し、之れで筏の上の二人を覆つた。しかし恐ろしい火は五六分でこの着物をカラ／＼にしてしまふ。

かくして眞裸のまま二時間あまり水中で働いてゐる中、火勢が漸く遠のいた。

決死の奮闘が止むと父や母や兄、姉の事が胸を衝いて来た。玉江さんは再び三歳の妹を脊負ひ、他

の二人の妹の手を引いて糧秣廠の倉庫に向つた。

「今夜はねえ、馬草を敷いて姉ちゃんを寝るんですよ。明日夜が明けたら、父さんや母さんを探しませうね」

と言ひ聞かせた。

一方両親の方では狂氣のやうになつて四人の子供の行衛を探し廻つて居たが、ハタと倉庫の脇で引返して来た玉江さんたちに會つた。一時は抱き合つて物も言へなかつた。その二十分後にはこの倉庫も焼けたが一家は無事に助つて今は元の番地にバラックを建て、古着屋をやつてゐる。

東京市本所區大平町六十五番地 武田 玉江子 (十三年)

● 迷兒をめぐる愛と愛

一、奇しき再會

十一月下旬の東京朝日新聞に「迷子の娘と父が奇しき再會」といふ見出して次のやうな記事が載つてゐた。

麻布區市兵衛町一丁目一番地の迷子收容所に居る藤野杉子さん(十一)の両親が判つた。父親の豊吉さんは八十餘日目の二十七日に奇しき父子の再會をしたのである。豊吉さんは嬉し涙を拭ひ、次のやうに語つてゐた。

「杉子はもう死んだものと諦めてゐました。せめて心ばかりの葬式なりと營まうと思つて準備の買物に出かけた際のことです。ふと買物を包んだ新聞紙を見ると夢にも忘れない杉子の寫眞が出てゐるのでありました。私はもう立つても居てもをられません。買物をそこに打つちやつて其のまま、收容所へ駆けつけたのであります。若しも此の新聞を見なかつたら生きてゐる子供の葬式を出す所でありました」

二、收容所の經營

前記の收容所は日本基督教震災救護同盟兒童部が東京市社會課の依託を受けて經營してをるのである。食料や衣類等は東京市から配給を受けてをるが其の他の費用の大部分は教會が負擔するのであつて、全く教會の美しい慈善事業である。随つて本所に従事してをる役員諸君は殆んど献身的に無報酬で活動してをるのである。其の組織内容等の大體を次に載せる。

一、經營の中堅者 靈南坂教會 責任者 牧師 岩村清四郎君

二、役員其他

學事養護係 小川 義輝君
 事務係 新保 民八君
 庶務係 木下 ちの子 近藤 繁野君 白川 静子 長東 敏子
 炊事係 古澤 みつ子 外一名

三、目的 全市百八十餘ヶ所に散在せる震災收容所の迷子を一ヶ所に收容して搜索者の便宜を圖つたものである。

四、收容所 九月十四日から同月末まで 青山女學院 其の後十日間ばかり 靈南坂教會

十月以後 麻布市兵衛町一丁目一番地

五、收容迷兒數 累計百五十七名

十一月中旬の現在數 三十名

三、係員の苦心

係員諸君の溢るゝばかりの同情と熱烈な誠意の力は早くも感應を與へてどの子供も直ぐに懐いてしまふ。それ故晝の明るい間は元氣よく遊んで心配はないが、さて日が傾いてあたりが物靜かになりか

けると淋しさに打たれ、父や母が戀しくなつて、来てあちらにもこちらにもすゝり泣の聲が聞え初めるのである。いよゝ日が暮れてしまふと兄や弟の面影が浮んで来てもう堪らなくなると「とうちやん」「かあちゃん」と聲をからすまでに泣叫ぶのである。其の中に泣きつかれて眠つたかと思ふと、湿やかな空気はひし／＼と幼い彼等の胸に迫る。恐ろしかつた罹災當時の状態が夢となり幻影となつて現はれて来る。堪え切れない悲鳴の聲が引つきりなしに聞える。中にはね出し飛びおき狂ひまはるのも出来るのである。聞く所によると悲惨な此の境遇に立つてお世話をなさる嫁婦の諸君は大抵之と同じやうな境遇に置かれて之と似よつた悲しい體驗を嘗めた人ださうである。諸君の同情は又人一倍であらう。深い／＼同情が無くては一日も此の世話は出来ない。親を慕つて泣き叫ぶ赤んぼを懐にして赤んぼと共に一夜を泣きあかす人もあつたさうである。嗚呼尊い此の同情。

四、園児を失つた嫁婦の斷腸

麻布區市兵衛町の迷兒收容所で夜晝母の愛を捧げて迷兒の世話をしてゐる嫁婦が四人ある。其の中の近藤繁野さんは震災當日迄淺草今戸幼稚園に勤めてゐたのである。それが悲しいことや苦しいことや恐ろしいことが雑多に纏綿して繁野さんを今の境遇に導いたのであつた。

繁野さんは震災の當時園主の矢島保方君と共に勇ましく園児の保護に活動してゐた。其の中に猛火

が押寄せて来た。一刻も猶豫は出来ぬ。園児が二人「先生……」といつて袖にしがみ附いてゐる。一人は増田茂雄といつて年はまだ五つの男の子である。繁野さんは二人を兩脇に抱へ込んで夢中で飛出した。飛出したがさて活路をどの方面に求めようか……園で活動してゐる際に訪問して来た千葉縣八幡町同情園の園主が「淺草方面が危険と見たら早速八幡へ向けてお逃げなさい」と言ひ残して去つた其の言葉が耳の底に残つてゐた……おうさうだ……決心した……吹きまくる火焰をくゞり、山と積む荷物を飛びこえ、逃げまどふ群集を押しわけながら、やつと竹屋の渡しを通り越して其の夜は日本堤署の保護を受け、三日の午後二時頃臼髯橋を渡つて向島の堤を龜戸驛にまで落ちのびた。我が身一つさへ持餘す此の際、かよわい婦人の身を以て而も二人の幼兒を助けて此處まで逃げて来た。其の間の辛酸勞苦はどんなであつたであらう。無心の幼兒は右から又左から「かあちゃん　とうちやん」と泣き續けて繁野さんを泣かせたのであつた。

龜戸驛はごつた返しの大混雑、繁野さんは其の中を千葉行の汽車に乗らうとした。繁野さんが張りさけるやうに泣くので氣を紛らす心で傍にゐた人に抱いてもらつた。そこへ人波がどつと押寄せて来た。あはやといふ間もなく茂雄さんは波に浚はれて行つた。繁野さんは狂氣になつて呼び叫んだが如何とも仕方がない。涙をのみ血を押し静めて今一人の園児を同情園にまで送り届けた。其の足で再び

引きかへし七日まで夜の目も寝ずに血眼になつて尋ねまはつた。しかし茂雄さんはどうとう姿を見せなかつた。繁野さんの其の時の悲痛と落膽とは見るも氣の毒なものであつたに相違ない。力の無い脚を曳いて本郷丸山町の宣教師ワツコイ氏方に歸つて來た。そして茂雄さんのお母さん増田せき子にも會はせ憎い顔を會はせて泣いて始終を物語り、唯お詫をするばかりであつたが、ふと繁野さんの胸に迷兒收容所のことや浮んだので、此處に身を寄せて居たら或は失つた園兒に遇はれることもあらうかと、神の助けを念じながら此の收容所に勤めさせて貰うことになつたのである。

五、子を失つた親と親切な警官

淺草區五十軒町吉原大門の入口に關野屋といふ小料理屋があつた。女ばかりの世帯で、主人を増田せき(二四)といふ母親と長男武雄(八つ)次男茂雄(五つ)三男義一(二つ)と妹との六人暮し、夫が病死した跡を引ついで、せき女は女の細腕に家の暮しを立て、居たのであつた。

大震災の日次男の茂雄さんは、淺草今戸のキリスト教會經營の幼稚園に行つてゐた。せき女は、地震が起ると同時に、三男の義一を負うて外へとび出し幼稚園へ驅付けた。まだ火の手は遠かつたが町々は混亂を極めてゐる。せき女の顔を見ると、園主の矢島保方氏と、嫁母の近藤繁野さんは、お子様方は私達にあづけて下さい。きつと保護します。町へ出てはあぶないから、と口を揃へて言つてくれ

た。せき女は心は残りながらも、この際女手ばかりでどうしようといふ不安もあるので、そのまゝ家にと取つて返し、一家のものと一緒に家財をまとめて待乳山公園に避難した。すると間もなく火は四方から起つて見る／＼あたりは凄まじい焰の海と化してしまつた。

せき女は我子のことを思ふと氣も狂ふばかりだつた。教會のあるあたりも一面の火につままれてゐる。彼女一人ならその中に飛びこみかねまじき思ひだつたが、彼女の腕にすがる二人の幼兒を見ると涙を吞んで茂雄の無事に逃出しゐてくれるやうと、神に念じながらやうやくの思ひで上野公園へ避難し、そこで一年もたつたかと思はれる長い不安の五日間を過した。もう火が鎮まつたと見えて、幼稚園の焼け跡へ尋ねて行くと、本郷丸山町の宣教師ワツコイ氏方に立退いたとある。せき女は、直ちに一家のものごとへ尋ねて行つた。聞くと、茂雄は、嫁母の近藤先生につれられて逃げたといふばかりで、その後の消息はわからなかつた。七日の夕刻に眞つ青になつて一人歸つて來た近藤さんから涙ながらの其の後の様子を聞いて見るともう全く頼みの綱も切れたと泣かざるを得なかつた。併し命のあることだけは確かなのだからと警察にも願ひ神や佛にも祈願を籠めつゝ夜も碌々眠らないで愛兒を捜すことに熱中した。廻り廻つて府下吾嬭町請地まで行つて、その二十二番地の四軒長屋を借りて暫く足を止めることにした。土地の巡查が戸別調査に來た。それは中村求馬君であつた。せき子さん

のあはれな話を聞いて非常に同情を寄せて非番の日は疲れた身をも厭はず自ら方々尋ね廻つてくれたが一向に手がよりはなかつた。かゝる間に園主の矢島氏は體の疲れや園兒を失つた心配が元になつて病の床についたが氣の毒にも九月十五日遂に亡くなられた。

六、同情深き運送店の主人と會社員

繁野さんの誠意や巡查の親切は無にはならなかつた。酬いられる時が來た。その緒は十一月二十四日の東京日々新聞の記事で開かれた。

「三月たつてもかへらぬ坊や」

の記事によつて茂雄さんが迷子になつた徑路を詳細に世間に訴へた。其の晩の十一時半頃強雨を衝いて同新聞社を訪れたものかあつた。そしてだしぬけに、

「茂ちゃんは無事です、安心して下さい」

と叫んだ。それは總武線平井驛前の丸平運送店の主人飯島時太郎君であつた。君は更に語をついで茂雄さんを助けた始終の事情を次のやうに物語つた。

「私は一日の午後二時頃東京方面から線路傳ひで續々避難者が押寄せて來ますので、二十名の店員を指揮して倉庫や馬力小屋まで開放し食料等の手配も調べて約三百名位の避難者を收容いたしましたし

た。夜になつて五つばかりの可愛い男の子が驛の附近で泣いてゐます。あたりに誰も面倒を見てやる様子の者もありません。これは全くの迷子であると思ひましたので早速自宅へ救ひとりました。初め二日ほどは唯泣いてゐるばかりでありますから、所は勿論名前一つも判りません。私は全く困つてしまひました。丁度驛前に櫻井親治といつて東洋モスリン會社に勤めてゐる方があります。奥さんと二人の静かな暮しで三人共に至つて子煩悩であります。ふと氣が付いて「どうか此の子の面倒を」と頼みますと、櫻井夫婦は快く引受けて下さいました。それが又不思議なことには櫻井君の宅へ参りますとバツタリ泣止んでしまつたのです。夫婦も喜んで着物を造つたり玩具を買つたりして我が子のやうに可愛がつて下さる。子供も亦親身の親のやうに懐きまして、一週間程経つと「茂ちゃん」といつたのでそれでやつと名前も知れました。「先生」と呼んだり兄の名も話したりするやうになりました。私はこれ等の片言を目あてに親を尋ねてゐたのでありますが、全く雲を掴むやうな譯で途方にくれてゐたのです。ところへ今日あなたの新聞に迷子の記事が載つてゐたでせう。私は茂雄さんの親が知れたことが嬉しくて『てつきり之だ』と思はず飛上りました。もうちつとして居られません。雨も鎗も構ふものですか、よる夜中をかうして飛んで來たのです。」

飯島君は語り終つて滿悦の色を湛えてゐた。

日々新聞の記者も飯島君の報告を聞いて大いに喜んだ。社の自動車は早速記者と飯島君とを乗せて吾孀町なる増田せき女の家へと飛んで行つた。彼の女は餘りの嬉しさに着物を着代へる暇もあらばこそ寝巻のまま、で自動車にかけ込んだ。自動車は更にまっしぐらに宙を飛んだ。夜も更けた午前二時の頃飯島君の宅に着いた。みよ子さん（櫻井君の奥さん）は温い情の手に茂雄さんを抱きしめて飛んで出て来た。

「さあお渡しします早くだつこをしてお上げなさい」

けれども茂雄さんは暫しみよ子さんの膝にすがつて離れなかつた。

「よく生きてをつてくれた」

と言つたきり言葉も出ない。夢かとはばかり茂雄さんの顔を見つめて涙も出なかつた。三月ぶりに再び母なる愛の膝に返つた茂雄さんも小さい目に涙を一ぱい湛えて母の顔を眺めて瞬きもしなかつた。やがてせき子さんは氣を押ししづめて、

「此の子の命は皆様に拾つていたゞいたのでございます。皆様は命の親でございます。御恩はきつと此の子に返させます。」

と言つて茂雄さんをヒシと抱きしめた。

「幼稚園の近藤先生も懸命に茂雄を捜して下さつてをることせう。早く此の悦びをお知らせしなければなりません。あの親切なおまわりさんにも……あ、矢島先生は取返しの附かぬことになりました。何とも申譯がありません……」

やがて一同は別を告げようとするが飯田君は記者に向つて、

「甚だお手数でございますが宜しく御社でお取次を願ひます」

といつて差出したのは金一封（十圓）故矢島園主に對する香料であつた。どこまで親切な義侠な飯島君であるであらう。

八、健氣な炊事係

この收容所に炊事係として働いて居る古澤みつ女、十八歳の若い娘盛りにも似ぬ献身的な働きぶりは自然に外來者の眼にも感激の心を起させる程に優れて映じたが、聞けば彼の女にも纏はる哀話があるのであつた。

みつ子さんは福島縣の出身、産婆を志して上京の後本所江東病院に看護婦をつとめてゐた。一日のあの地震の折には他の看護婦と共に患者を背負つて被服廠あとへ逃込むだが副院長から大事な忘物を

とつて来るやうにといふ命をうけて引きかへし、無事に品物を取り出して再び被服廠へ驅付けたときはもう幾萬の避難者に廣場の全部を充たされて足を踏み入るゝ隙間もなかつた。追る火と人の波とに追はれ揉まれてそれを届けることも出来ず、途方に暮ながらも遂に向島方面に逃げ延びたのが命を拾ふ因となつたのであつた。川堤に不安な夜を明かして、やゝ火の鎮まるのを幸ひに一刻も早く院長や同僚や患者を見舞はねばと危険を冒して又被服廠へかへつたとき、其處は全くの此世の地獄であつた前代未聞の死人の山。目も當てられぬ惨状は逆も形容の出来るものでない。弱い女のさらでだに轉倒せんばかりの胸を押へ魂を消す心の戦きも無理にも勇氣づけて、若しや生きては居られないかと屍體を乗り越えて昨日の場所に行つて見ると、傷はしや院長を始め同僚も患者も皆黒焦となつて無惨の最後を遂げて居るではないか。

其の瞬間、みつかさんは心の底に深いあるものを刻みつけられた。一度遁場を失つた自分が不思議にもこの通り……大丈夫と思つた先生方は一人も残らず……あゝ希望の綱とたよつた恩師の君よ……大恩受けた副院長の君よ……友情深く契つた我が同僚よ……生を求めて入院してゐた不幸の患者よ……

被服廠全滅：江東病院全滅：の飛報は全國を驚かした。みつ子さんの郷里では全く惨死と諦めて葬

式まで済ました。一ヶ月の後に無事な消息がやつと届いた。慶びの手紙と共に歸國を促し旅費さへ送つて来たが、併しみつ子さんのある決心は動かない。再三再四の勸告にも應じないで今も満足の色を湛えて炊事の業を甲斐／＼しくやつて居る。

麻布市兵衛町一丁目一番地 迷子收容所

●迷兒の親

藤井さんは毎日愛國婦人會の職業紹介所に通ふ小使さんで年の頃四十六七、東京の人である。今度の震災で親を失ひ、兄弟に離れた子供が幾人あつたかわからない。其の内東京市社會局から愛國婦人會へ托されたのが三四十名あつた。そして其の迷子は藤井さんの勤める婦人會の小使室の隣りの室に毎日寝起するやうになつた。子供の好きな藤井さんは、子供たちからも慕はれておぢさん／＼と言はれるやうになつた。

此の迷子の多くは本所方面の者で、朝起きるから父母をさがすいちらしさを藤井さんは見るに忍びなかつた。藤井さんはどうかして此の子供たちの親を見附けてやらうと決心した。仕事のひまには子

供たちを集めていろ／＼な話をして子供たちの御機嫌を取つてやる傍搜索の糸口を見附けようとした然し子供たちはただ、

「あたいんち、ね、本所」

とだけしか答へ得ない。何丁目とか何番地とかいふ詳しい事は全く知らない。藤井さんはお父さんの商賣など一々聞いてみたが殆んど知らなかつた。

多くの迷子の中に福田トシ子といふ八つになる女の子があつた。此の子はとりわけ賢しいので藤井さんの言ふことがよくわかつた。藤井さんもどうかして此のトシ子さんの両親をさがしてやろうと思つた。

「トシ子さんのお家、何處？」

「あたいのうち？ 横綱よ」

「お父さん、何してるの？」

「ね、お父さん、毎日お人形に顔書いてるの」

「ふん、お人形？ こんなのかい」

といつて藤井さんは側にあつた人形を出す。

「ちがふの、ね、羽子板のお人形」

藤井さんはしめたとと思つた。羽子板の似顔を書いてゐるんだなと思つたので大變に喜んだ。といふのは羽子板の似顔を書く商賣なんてそんなにあるものぢやなし横綱といふ限られた所で其の商賣をしてゐるのだから行つて探せばわからない事はないと思つたからだ。

藤井さんは幸ひ日露戦争當時横綱で薬屋をやつてゐた事があつたので其處には二三懇意な家などがあつたあくる日藤井さんは婦人會の方の用が終ると早速自轉車に乗つて出かけた。野原のやうになつた焼跡を探してやつと羽子板の隣物問屋を見つけ出した。福西さんといふ似顔繪を畫く職人は此の近くにゐなかつたかと聞くと、居たと言ふ。其の場所までわかつたが暗くなつて來たので残念ではあつたが歸つて來た。

二度目に行つた時には福西さんの焼跡と思はれる所に札が立ててあつた。藤井さんは小躍りして喜んだ。立札には、

「小石川竹早町五四、小松風次郎方へ立退く」

と書いてあつた。トシ子さんの親がだん／＼わかつていくので藤井さんは喜び勇み翌日竹早町へ出かけて小松氏を訪ねると内から年とつた女の人が出て來た。トシ子さんといふ女の子を御存知ありません

んかと聞くと、私の姪ですといふ。いつしよに背負つて出たには出たんですが途中のあの混雑で夢中になつてしまつたのでせう。背中が軽いと氣のついた時はもうトシ子は背中にゐなかつたのです。おんぶした紐は先が切れてぶらりとさがつてゐました。可愛そうな事をしたと思つて泣き悲しんで探しに戻らうと思つたが通つた所は火の海でせう。探しようもないのです。トシ子はもうあの時死んだせう。と、其の時出て来た十四五の女の子をふりかへつた。女の子も眼に一杯涙をためて、私はトシ子さんを殺したやうな者です。私の不始末からで何とも申し譯けありません。私は毎日々々トシ子さんを思ひ出しては泣いてゐますと言ふ。藤井さんが其のトシ子さんは私の所におあづかりしてありますとだん／＼今までの事を話した。二人は夢かとはかり喜んだ。二人はすぐ社會局を通してトシ子さんをひきとりに婦人會にやつて来た。トシ子さんはをばさんと姉さんとに連れられて喜んで婦人會の門を出た。

これに力を得た藤井さんは、探せば見附かると思つたので極力迷子の両親を見附けることに盡した。同じ迷子の中に白井たけ子といふ女の子があつた。此の子も前のトシ子さんと同じやうに自分の名だけしかわからない。だん／＼聞くうちにやつと家は横網であるといふことがわかつた。藤井さんは根ほり葉ほりいろ／＼と聞き出した。お父さんは何商賣と聞いても何にも覚えては居ない。可愛さう

にあの火や煙の中を逃げ恐ろしい思をした時に、何から何まで忘れてしまつたのだ。藤井さんは商賣だけは探す手裏にもいろいろ聞いた。鉋を見せて、あなたのお父さんはこんな物は使つてゐなかつた。と聞いて見た。そんなのは使つてゐないといふ。鋸を見せて聞くと、鋸なんぞ使つてはゐなかつたと言ふ。大工さんの使ふ様な物をいろ／＼と出して見せたが、子供は一々それを否定した。何かのはすみに、お父さんは印半纏を着ると言つた。藤井さんは喜んで、小使室の壁を指して「お父さん壁をかうやつて塗るの。」と手真似をしながら聞いて見た。子供は「うん、ぬる」と言ふ。藤井さん益々喜んでつさり左官屋に違ひないと、お父さん「こて」を持つてゐるかと言ふと「ゐる」と言ふもう左官であることは確かめられたので、其の日藤井さんは本所横網へ自轉車を走らせた。

焼あとをあつちこつちと尋ねた揚句左官職人は此の横網に一人しかないといふ事がわかつた。そしてそのたつた一人の左官の家の焼跡も判つた。焼跡には瓦が一面に落ちてゐるばかり立退先を書いた立札もない。聞くにも聞かれず落ちて居た瀬戸物を一つ持つて歸つた。小使室でその瀬戸物をたけ子さんに見せるとそんなものは見た事がないといつた。藤井さんはいたく失望したが翌日又横網に行つた。近所の人に聞くと其の左官屋さんなら五六月頃から煩つてゐたと言ふ話。地震があつてすぐ火事が襲つて来た時其のおかみさん（たけ子さんのお母さん）は病人をおいては行けないし、と言つて擔

いで行つたつて途中で焼け死んで了ふから私は此處でいつしよに死ぬ。しかし子供まで一緒に死なせたくはないから隣のおかみさんに宜敷頼んだと言ふ話。其の外に親戚なんかなかつたのかと藤井さんは聞いてみた。「左官やさんには弟さんがおあんなすつて其の人はやつぱし左官やさんでしたよ」と答に力を得て尙其の弟の方の左官やさんは何處ですかと聞くと「吉田町の近くで其のおかみさんは水菓子屋をやつてゐると言ふ事ですよ」と言ふ。それを聞いた藤井さんはすぐ其の吉田町の水菓子屋をさがしに向つた。水菓子屋なら表通りだらうと考へて、吉田町の表通りを探し廻つた。だんく捜すうちに其の水菓子屋が判つた。然し其處ももうすつかり焼けてしまつて何處の處だかわからない。瀬戸物やか金物屋ならちらばつてゐるものから其の焼跡を見附けられるのだが、水菓子屋の焼跡には何にも残るものがない。それも大きな水菓子屋ならサイダーの瓶かコップのかけらか罐詰のからも落ちてゐやう。しかしさがし當てた水菓子屋は九尺間口ではあつたし、隣が自轉車屋なので全く見るかげもない。

茫然自失してしまつた藤井さんは自轉車片手に暫く其の焼跡を見つめて居た。所へ隣の自轉車屋の主人がやつて來た。幸とばかり藤井さんは水菓子屋の行先を聞くと、「左官屋さんなら京成電車の終點金町の近くに小向と言ふ所がある。其處へ行つて雀焼屋の金さんとおたづねなさい。其の人がお友達

だから多分左官屋さんは其處へ避難してゐるにちがひありません」との話。藤井さんは一縷の光明を得ただけで其の日はおそく家へ歸つた。たけ子さんのいぢらしい姿を見ると藤井さんは居ても立つても堪らなくなつたので翌日は朝から暇を貰つて金町まで出かけて行つた。

雀焼屋の金さんは直きに判つたが當の左官屋さんは其處には居なかつた。金さんの娘さんに連れられて藤井さんは埼玉縣北葛飾郡八本郷村字小向の酒井棟三郎といふ紺屋を訪れた。

水菓子屋をやつてゐたといふおばさんは猛火をくぐつて逃げる際大火傷をして未だ臥床中であつた藤井さんの話にたけ子さんの生き存らへてゐるのを知るや一家は奇異の思をなして喜こんだ。叔父さんにあたる左官屋さんは翌日婦人會に來てたけ子さんをひきとつた。

苦心に苦心をして兎に角たけ子さんの引取人を捜しあてたので藤井さんは大へん喜こんだ。然したけ子さんは其のお父さんとお母さんに逢ふ事は永久に出來ないだらう。人の話によると、お母さんは病人のお父さんの枕頭に座してあの猛火の中に泰然として逝つたと言ふ事だ。

藤井さんの室には未だ多勢の迷子があつた。一人二人と藤井さんの爲に捜された事引取られて行くのをそれとなく知つた外の子供たちは藤井さんの半纏に縋つて、

「今度はあたいの番ね、おちさん」

「ちがはい、今度は僕だね、おちさん」
競争になつた。

藤井さんが何で是をその儘に出来やうか。又藤井さんは一人の迷子について其の引取人を捜し初めた。

女の子で、迷子の中でも一番可愛さうに見えた「おとたけさん」だ。「おとたけ」とは姓であるか名であるかそれさへ判らない。

「あたいは『おとたけ』つての」

「お父さんは、大工のおさきさん」

「猿江町裏にわたんだけど、水が出るので越したの」

おとたけさんの言ふことは此の三つだけだ。何おとたけか。おとたけ何といふのか、大工のおさきさんとは男のやうな女のやうな、水が出るので越したといふが何處へ越したのか、さつぱり判らない。

其處で藤井さんは、獨特の質問を此のおとたけさんに試みた。

「おとたけさん！ おまへさんは活動や縁日つて知つてる？」

「活動は知つてるけど、縁日つて何に」

「縁日つてのはね。ほら、あめやさんだの、本やさんだの、玩具やさんだの、いろんなお店が夜電氣をつけて道の兩側に並んで、ね、おまへさんも行つた事があるだらう。お父さんやお母さんにつれられて。」

藤井さんの説明でおとたけさんに縁日がわかつた。

「縁日へ行つた時、お寺や、お宮へお詣りしなかつたかい」

「したわよ」

「した！ 何ての」

「お薬師様よ」

「其のお薬師様はおとたけさんの家から遠かつたかい近かつたかい」

「直きよ」

「橋を渡つて行くのか」

「え、おちさんよく知つてるわね」

「其の橋は何ての」

「その橋？」

「うん」

「おーこく橋つての」

なんでも此の子の家はおーこく橋といふ橋の近くで薬師様の近くだと思つたが藤井さんにはまだ見當がつかぬ。藤井さんは尙おとたけさんと問答を續けた。

「おとたけさん、おまへ活動見に行つたかい」

「ええ」

「なんて活動」

「大きな活動よ」

藤井さんは、マツチ箱を疊に並べて、此處がお薬師さん此れが橋とおとたけさんをいろ／＼に考へさせた。

翌日藤井さんは其の子を社會局から借り受けて、自轉車を飛ばして高橋方面指して出かけた。藤井さんの背中に十文字に縛られたおとたけさんは走り行く自轉車の上から變り果てた東京の町々をおどろきの眼を見張つて眺めただらう。

すゐとん屋、ゆであづき屋、大福屋が至る所に軒を並べてゐるものだからおとたけさんは時々脊中

の上から、おちさんあの大福買つて、ゆであづきをたべさせてとせがんで藤井さんを泣かせた。

高橋についてから近くにある薬師堂の焼あとにおとたけさんを連れて行つてこれが緑日のあつたお薬師さんだといふとおとたけさんはこんな所ぢやないちがふと言つて如何しても聞かない。鳩もゐない。お手洗もなくなつた本堂も焼け落ちてただ残るのは石ころと瓦だ。何でこれをおとたけさんはお薬師さまと思ふものか。藤井さんも、無理もないと思つて人知れず石に腰かけて泣いた。

然しだん／＼とわかつて來たと見えて、そろ／＼うなづいて來た。またおとたけさんと藤井さんは問答を始めた。おとたけさんの言ふままに指さすままに、二人は薬師様の境内を出た曲ると其處に小さな溝があつて間もなく二三間もあらうかと言ふ橋があつた。おとたけさんは是がおーこく橋だと言ふ。橋は焼け墜ちて自轉車持つては渡れない。廻り道をして橋の向側へ出て見るともうおとたけさんにはわからなくなつた。

近所にはバラックが二十軒程建つてゐる。藤井さんはほと／＼困り果てたがよし此の近所の人々に此の子を見せて聞いてやれと、大聲を出して、此の子供を知つてゐる人はゐませんかと怒鳴り歩いた誰も知つてゐる者がゐないと見えてただ藤井さんをながめてゐるばかりだ。越して來たばかりでは無理もない、まだ知合がないのだと思つたが藤井さんはこれまで捜して歸るのも残念と暫らくおとたけ

さんをお負つてプラ／＼してゐた。一人の子がやつて来た、デーツと見つめてゐる。

「おまへさん、此の子は何處の子だか知つてるかい」

「これ、あの、川すみつこの八百屋の子だよ」

しめたとばかり藤井さんは其の八百屋に行きごめん下さいと言はふとすると中から年頃四十許のでつぷりしたお婆さんが、

「やつ！ おとたけや！」

とどなつてはだして飛び出して来た。藤井さんびつくりした二三歩あとへすすつた。これがおとたけさんのお婆さんだつたのである。

おとたけさんが大工のおさきさんと言つたのは大工のおさきさんでなく此のお婆さんのことであつたおとたけさんのお婆さんの名がおさきさんだつたのだ。おとたけさんのお母さんはサクといつてわけあつて日本橋の藝妓でゐるといふ。おさきさんは藤井さんから一部始終を聞いて涙を流して喜こんだ。

當時おさきさんは赤ン坊がお腹にあつて、その前に六つになる女の子とこのおとたけさんとを連れて三人猛火に追はれ煙になやまされ人に押されて岩崎の邸へ逃げて行つた。途中薬師堂の手前まで來

ると川へ突き墜された。周りは一面の火であるし、熱いので水をかぶつたり水にからだを浸したりしてゐた。其の中風向が變つたので川から夢中で這出した。そして奔つて行くと、お腹が大變痛むので側の電信柱につかまつてちつとしてゐる中にお腹の痛むのも止つたので岩崎の邸へ逃げ込んだ。不思議にもおさきさんは御亭主の奥太郎さんにばつたり出會つた。そして又六つになる女の子とも會つたおとたけだけは其後行方不明になつた。翌日おとたけのゐないのに氣がついて昨日の川へ行くと八つ程屍體が浮いてゐた。しかしおとたけらしいのではない。何處かにまだ生きてゐるやうな氣がした。けれどもそれから毎日心配してゐたが今日會へると思へなかつたと言つて不思議がつた。涙をいつばい眼にためておさきさんは物語つた。おとたけさんの兄さんは洋食やのコックをしてゐたが焼死したといふし、姉さんも焼死したと言ふ。何處を如何誰に助けられたのか、おとたけさんは藤井さんの世話になつたのだ。

まだおとたけさんは社會局の預り物なので、藤井さんはそのわけをおさきさんにはなして牛ヶ淵へ連れ歸つた。翌日深川から迎が來ておとたけさんはつれて行かれた。

藤井さんはこんなにしてまだ二三人の迷子について其の引取人を捜してやつてゐる。藤井さんのやつたのは皆職務の餘暇である。なか／＼出來ない事である。藤井さん自身すでに幼少父に死別れたの

で親のない子供に同情の涙を注いだのも無理もない。

愛國婦人會東京支部長宇佐美徳子君は感謝狀に金十圓をそへて氏を表彰した。

金 十 圓 藤 井 錠 藏 君

大正十二年九月一日震災のため依怙を離れたる負傷病兒の治療方東京市より受託保護をせる際其の迷兒の親族縁故を搜索し遂に其の四名を夫々引渡すことを得たるは誠に其の熟誠に依るものにして感謝に堪えず、仍て謝意を表するため右贈與す。

大正十二年九月二十八日

愛國婦人會東京支部長

宇 佐 美 徳 子 印

愛國婦人會東京支部使丁 藤 井 錠 藏 君

●トタンの下の三十人

大震災火災の暴虐の手に追はれて、雲霞の如き江東一帯の避難者の群れが、深川越中島方面に集つた

中に、深川の明治小學校の先生たちを中心とした一團があつた。それは大約三十人ほどの人々で、中には明治第二、幼稚園、深川などの職員で明治小學校附近に住んでゐた人々に、七八人の同窓會員も交つてゐた。

明治小學校の御眞影は、鈴木英吉訓導三二が奉持してゐた。最初地震に續いて火災の生じたとき、それ等の人々は校庭に集り、續いて御眞影並に重要書類を搬出して、途中の苦難を冒して越中島に避難したのである。一團の中には婦人も可なりに混つてゐたので、それ等を無事に引連れて行くには、男子は一方ならぬ苦心をした火焰のために追はれ、此の人たちが最後に辿りついた、ところは越中島水産講習所前グラウンドの一隅であつた。

一日の夜はたゞ苦しさ怖さの中に明けた。男の人たちは焼トタンや木材などを拾ひ集めて、其處に不完全なバラックを作り、其の中に約三十人の大家族を收容した。けれども、これ丈けの人の飢餓を救ふことは決して一樣のことでは出来ない。

三十人の大家族は、飢餓と疲勞に困惑して、僅かに川の水などを口にして當座を凌ぐ有様である。それを見兼ねて立つたのは明治第二小學校の佐久間孝夫訓導(三四)であつた。氏は郷里浦和町に歸つて、出来るだけの食糧を持歸らうとしたのである。明治小學校の兵頭勳訓導(二八)も、然らば行を共

にしようといふので、二日の午後四時には、二人は大決心を以て越中島のバラックを後にした。兩氏は未だ餘燼の盛んな町々を過ぎ、焼け落ちて渡れさうもない橋々を、危く這ひ渡つて上野へ出た。松坂屋附近に至ると先づ第一に自警團の手に誰何をくつた。それから王子に出で赤羽を過ぎる頃には、九時を過ぎてゐた。漸くのことゝ浦和に着いたのは夜の十二時半ごろであつた。兩氏は極度の疲勞にぐつすり寝込んだが、越中島のことを想ふと一刻も猶豫はして居られない。三日の日には一日かゝつて物資の購入やら整理をした。それにはお握りから油紙・半紙・ビスケット・ドロップ・マッチ・藥品に至るまで、凡そ必要を感じるものは悉く之を集めたのであつた。

九月四日の午前十一時になつて、二氏は救助材料を二つに分けて背にし、浦和町を後にして歸京の途についた。汽車が田端まで通じてゐたけれども、それからの途が容易でない。龜澤町へ来たのは午後九時であつた。それから殆んど無人の涯を行くやうな心持で越中島まで歩いたが、其の間の物凄かつたこと、變り果てたる闇の都に物々しい警護の人々に幾度駭かされたことであらう。漸くのことゝ越中島まで来たけれどもモウ其の時には三十人の大家族はたれ一人も残つてゐなかつた。折角苦心して持つて来た物資も何の益にもたゝない。探せど尋ねど一人の顔も見出さない、詮方なく五日になつて岩崎遊園に出て知つた子供などにそれを分けた。

兩氏が浦和に出立してからである。俄に例の鮮人騒ぎが起つて、折角火災と海嘯とを免れた越中島の原も、到底安全な場所ではなかつた。人々は俄にとよめいた。午は此の大家族も引拂はねばならないと、各々思ふ所に向つて落ちたのであつた。而も此の大家族が越中島を落るまでにはいくつかの美談が残された。

明川高等小學校の羽山とよ訓導が、老母を負つて此の中にあつたのだが、鮮人騒ぎに脅かされて、一路大森の知巳まで老いたる母を脊にして立退いたことは別に記した。それとは別に、深川の豪商小村徳兵衛氏の嫡孤孝一君(明治の尋常五年)が、一家四散した一人石井敏雄一家の船に逃れて助かつてゐた。ところが二日になつて石井氏は千葉市に避難するからといふので、孝一少年を越中島の大家族の一人に加へて貰つた。死線を彷徨して危く助かつた少年は、煙に殆んど失明してまるで盲目其儘に向合ふ人々が誰れだといふことさへ分らなかつた。可哀相な少年を、皆な寄つて懇ろに介抱してやつたけれども、三日になつては鮮人來の聲に脅されて弱り果てた。誰れか孝一少年を引受けて世話をしなければならなくなつた。そこで、明治小學校の安藤長太郎訓導(二七)が之を引取ることにした。安藤氏は少年を背にして岩崎遊園に立退いた。

少年はまだ目が見えなかつた。たゞ聲をたよりに命の親である先生を覺えてゐた。遊園内の物置小

屋に入れて置く間にも、先生の聲が聞えねば「安藤先生」と云つて呼び立てる聲が、本當にいちらしの域を越えて悲惨であつた。安藤氏は此處から再び少年を負ふつて赤阪の親戚へ出發し、日比谷の救護所で一度治療して貰ひ、赤阪へ行つて完全な治療を加へてやつた。その爲めに哀れな少年も元氣を恢復することが出来たのである。

かうして男の先生たちが或は食糧を求め、或は少年を助けてそれ／＼の方向に出た後には、鈴木英吉氏等の責任はいよ／＼重くなつた。老幼婦女子の多い此の大家族を、恙なく避難させるために一通の骨折りではなかつた。夫々が行く途の安全な方向を指し示し、勇氣をつけて落してやる。さうして自らは杳として行方の分らぬ校長を思ひ、身につけた御眞影を奉持してゐたのである。危難の間に出來た越中島の大家族それは何といふ美しい友愛の塊りであつたらう。

- 本籍 千葉縣夷隅郡吉町刈谷一五七 鈴木 英吉君 (三十二年)
- 現住 神田區仲樂町一四、千歳館
- 本籍 埼玉縣北足郡浦和町二八五六 佐久間 孝夫君 (三十四年)
- 現住 深川區松村町 永峰方
- 本籍 廣島市段原町六七二ノ一 兵 頭 勳君 (二十八年)
- 現住 深川區數矢町一六岩上方
- 本籍 深川區東元町一七 安藤長太郎君 (二十七年)
- 現住 同 冬木町六

救護篇

●植物園内の救護事業

(一) 準備

小石川の植物園は絶好の避難地であつた爲めに、一日午後二時三時頃から神田本郷方面の罹災者がひしひしとつめかけて來た。又園の方からも開放する旨が傳へられたので、野村君は附近の人と共に「植物園に避難せよ」と戸崎町柳町方面までふれ廻つた。

夕景までに園内に避難した群衆は數萬に達し、又他方では附近の博文館工場が破壊して救助を求めて來る、その混雜は一通りでなかつた。

此の混亂中、東部第五班の野原君が救護事務を起すなら各分會から應援者を出すことにしようと思込んで來たものがあつた。續いて交番からも焚出しを頼まれたが米がない。しかし其の儘避難者の窮状を坐視することが出來ないので米の蒐集に取掛つた。

午後七時頃には戸崎町六五番地川上常郎氏から白米三俵の寄贈があつた。しかしそれではまだどうすることも出來ない。丁度其の時野原君は戸崎町々會に氷川神社祭典の寄附金が集つてゐることに氣

付いたので町會田中耕造君及同顧問内田勝造君に圖り、米六俵分の支出を仰ぐことが出来、こゝで町會も在郷軍人會も共同して救済に取かゝる事になつた。

野村君は小石川在郷軍人會東部分會第一班の副班長であるが、班長松田官太郎君と謀り赤澤光吉君を警衛手長とし、諸の手筈を定めた。そこへ區會議員沖田瀧次郎氏が見えて區長から約二十俵を貰ふことにして來たと言はれた。こゝで區會との提携も整つた。一切の準備が出来たので自動車に伴つて區役所へ行き米十俵を要求したが區長は米ばかり持つて行つても釜があるまいと言つて渡されぬ。

「釜は必らず軍隊から借りて來ますから、是非々々」と追つたが區には三俵の米があつたばかりであつた。その三俵をも持ち歸つて直ちに焚出しを開始した。釜は沖田氏宅の昔染物に使つたものを利用した。しかしこれでは焼石に水、到底數萬の群衆を救ふことは出来ない。

そこで後は沖田氏と二班の人々とに託して野村君は博文館に交渉しトラック一臺を借受け、日本書籍の磯部運轉手を頼み同志五人と君が嘗て在營した世田ヶ谷の砲兵隊へ向つた。東の空がほのか白んでゐる頃である。牛込のやきもち坂から新宿の車庫裏に出たが行手が火の海、さすがに剛膽な磯部運轉手もビタリと車を止めて一步も進まぬ。自動車のタンクは火を引き易い。若しも火煙の中に包まれればタンクは爆發して乗組は悲惨な死を遂げねばならぬ。しかし揮發の缺乏から他を迂廻する事を許

さぬ。

「折角こゝまで來て火で通れぬからと引返したら、今までの苦心も水の泡だ。又あの數萬の人々の食料をどうする、君一つやつて呉れないか、死なば諸共だ。」

と野村君は磯部運轉手にいふ。一同もこれに和する。もとより義に勇む磯部君だ。

「よし君等が其の覺悟なら」

と驀地に火中に入れたが道に倒れかゝつた電車、電線の針金が纏はつて容易に進まぬ。一同は下車して一々これを取除かなければならなかつた。

漸くにして明治神宮裏を行くと途で輜重兵大隊の前に出た。野村君は急に

「こゝだ、こゝの方が炊事具が多い。それに一時も早く歸らねばならぬ」

と、つか／＼營門にはいつた。こゝでももう天幕を張り大隊幹部が詰めて居た。野村君は大隊副官に會つて、

「數萬の避難民が小石川植物園に詰めかけてゐます。米は用意しましたが釜がありません。どうぞ御貸與を願ひます」

と願ふと大隊長も直ぐ會つて呉れた。そして火袋（へつつい）三個と釜六つを貸して呉れた。此の一

つの釜は優に二斗は焚け、又一つの釜を下してむらす隙に他の一つの釜のが煮えるやうに出来てゐるのである。一同は喜んで植物園に引返して来た。時はもう七時過ぎで沖田君等の焚いた御飯が出来て山の上に運ばれて居る所であつた。

水道は来ない。しかし幸に附近に井戸が二つあつた。其の中の一つ沖田君宅の裏にあるのを歩哨を立て、専ら焚出用にあてた。

釜は備付けられた。二日三日などはどの位焚いたか殆んど見當が付かぬ。働いてゐる在郷軍人團も疲れ果て、一人減り二人減るといふ状態であつた。

之では駄目だと二日午前十一時には君は戸崎町九六番地の田中清吉君と東京堂の貨物自動車に乗つて近衛第二聯隊へ軍隊の助力を乞ひに行つたが管轄違ひであるからといふので陸軍省衛戍總督部へ行き、そこで證明を貰つて近衛の四聯隊へ行つた。すると植物園へは一時間ばかり前に五十名程派遣したからもう出せぬと断られた。しかし、

「私どもは警備ではなく炊事の手傳を頼みたいのです。數萬の避難民の命に關はりますから」と懇願すると十名程貸してくれ、尙ほ警備隊中からも手傳を出すやうに命令書を出して呉れた。それ等の軍人は四日朝の交代の時期まで手傳つてくれた。

(二) 焚出しの應援

三日の朝であつた。洋装小柄な一婦人が髪は束髪にキリツと巻いて救護事務所へやつて来て、「どうぞ私を何かの御用に使つて下さい」

と申出た。同婦人は本所高等女學校に體操と音楽を受け持つてゐる秋岡女史であつた。

同日一高學生伊吹幸隆君、帝大を本年卒業した榊爲基君も應援を申出て呉れた。

話は後に戻るが二日の日の夕方園内に朝鮮人の一團が居るとの噂が誰いふとなく擴まつて来た。何處に居るか尋ねて行くと松の木の方方に七名の女學生が居る。近寄つて調べて見たらそれは鮮人でもない本郷區東竹町渡邊裁縫女學校の生徒佐藤たい、同たか、時田よしの、島岡ちか、千葉くに子、大澤恭子、古川ひさ子の七人であつた。若い女學生の事だから握飯を貰ひに出るのか恥しいので今朝から飲まず食はずにその松の根本に居つたのだといふことがわかつた。

三日からはそれ等女學生も加つて在郷軍人と一團となつて炊事の手傳をして呉れた。其の後五名の女學生は引取られて行つたが伊吹君と二人の女學生は十二日まで手傳つて行つた。

其の後、班の各組から一人づつ出す事になり焚出しは二十一日まで繼續し區役所から出張した小林悦次君に一切を引渡したが其の後も手傳を續けた。全く之を打切つて軍隊に釜を返しに行つたのは十

月四日であつた。

此の間殆んど打通して働いた秋岡女史は世にも珍らしい婦人である。

秋岡さんのお父さん小山三己君は嘗て麴町憲兵分隊長をしたことのある人で、今は茨城縣古河町在郷軍人會長をしてゐる。災後各所からの送電は全く止まり且市中の蠟燭は全く盡きて避難者は夜は闇の中に居るより外はなかつた。女史は直ちに父の事を思ひ浮べて單身茨城縣に行く事にした。それは四日の夜である。しかし當時は各驛は歸國する避難者が殺到し、切符を買ふ列が一哩も二哩も續くといふ状態であつた。女史は乗らうとするが車内はもとより、列車の屋根上までも避難者で満ちて一寸の間隙もない。女史はそこで窓と窓の間の柱を兩脚に挟み、兩手でしつかり其の上部に抱付いた。かうして三時間経つた後漸く車内にはいる事が出来た。しかし車内にはいつでも足は殆んど床につかぬ。車内では氣を失ふ者が續々と出る、女史の傍の一人の男も青くなつてしまつた。女史はポケットを探つたが仁丹の袋に只一粒残りがあつた。是でどうか此の人を救ひたいと考へ、

「私は東京で救護に従事してゐる者で今茨城に蠟燭を買ひに行く途中でありますがもしもの事があつてはと役所から頂いた大切な薬が只一粒あります。これを飲めばどんな病氣でも忽ちに癒ります」と暗示を與へて之を飲ませて見事に救つた。男は女史が下車するまで元氣に遭難状況を語りつゞけた

女史が古河に着いたのは午後十一時半であつたが父の助力を得て一背負に餘る程の蠟燭を集めて即夜(午前四時)の列車で上京した。

女史は更に一回古河まで蠟燭を集めに行つた。此の時は在郷軍人、米田外次郎君が同行した。池袋から赤羽驛に到る夜道を駈続けたが米田君は息が切れて同行するに實に苦しかつたと語つて居た。女史は此の力は江間式身心鍛練法のお蔭であると確く信じて居る。

又、暗夜を女の身で走つたから途中數回誰何された。殊に赤羽近くで米田君が遅れ、女史一人となつた折、竹槍棍棒を携へた數十名の自警團員に圍まれた時などは實に物凄い程であつたが、女史は少しも懼せずと言ひ開いた。事情が解ると團員は同情して色々便宜を計つて呉れた。三回目には機關車に乗つて行つた。兩回を合せて約八十圓程買つて來たとの事である。

又食料受取に來る人の整理にも當つた。平生體操で鍛えた聲を張上げて巧に行列を作らせた。かうして焚出しを始めてから二三日すると玄米食の爲にお腹をこはし、下痢を起す者が續出した。のみならず園内に大切な握飯が捨てゝあるのさへ見るやうになつた。そこで女史は或る夜ひそかに「明日から二食にします」

と書いて配給所に張出した。その爲行列を作るのが日に二度ですみ、係も受ける者も大いに樂になり

且つ下痢患者も減り、握飯を捨てる者も全く無くなつた。

(三) 物資の運搬

植物園にはいつて来た避難者の数は一時は實に七八萬に及んだ。しかし三日の雨の後近所の人々及び知合のある人はそこを頼つて行き、又区内の各小學校へも分れて行つたので九月十日頃確實に調べた時は五千で、其後二千四百人に減じた。これ等の人々の飲食物の運搬慰問品の受取り等の激務を主となつてやつたのは米田外治郎君である。

區役所、市役所への往復は言ふまでもなく、朝日新聞社への數回、其他報知新聞愛國婦人會等物資の有るところには往かない所がない位である。殊に芝浦へ生魚を取りに行つた時などは、あの氷のほりつめた冷蔵庫の中から四時間も十六貫目入の魚の包を運び出した事もあつた。

又、避難民への支給が豊富でなく、野菜などばかりの時は肉を買ふ。卵を買ふ。かうして人知れず多額の私費をも投じたのであつた。

(四) バラック村長

此の救護の主腦となつて働いた人は小石川區會議員沖田君である。氏が全般に渡つて頭を勞した事は、誰彼となく認めて居る。救護事務が區役所に引移つた後になつてもまだ植物園に出入して避難民

のために働いて居るので誰いふとなく「バラック村長」と綽名するやうになつた。

氏は自らの爲した事に就いて殆んど口噤んで語らない。しかし避難者の自動車を借りて物資運搬の便に供したのも、同町の福音教會を病院とし警視廳救護班を招き、又避難者中に濱町長屋病院の看護婦數名あるを見出して同所に雇入れなどして植物園はいふまでもなく、区内各避難所の氣の毒な傷病者を救つたのも殆んど氏の力である。

氏の同情は單に内地避難民に及んだばかりでない。同町内に住んで居た朝鮮人十二名を引取つて十數日間の保護を加へ更に一部は社會局に職業の周旋を頼み他の人々をば滿州に行かれる氏の兄弟が朝鮮まで送り届けたといふ一家擧つての美談も残されて居る。

(五) 其の他の人々

植物園の救護はまことに大事業であつて、もとより以上擧げた十數氏の力に依つてのみ出来たものでない。附近の在郷軍人會、町會、青年團員等殆んどそれに關係しないものはない。特に左の諸氏の如きは前記の人々に劣らぬ殊勳者である。

市會議員 大崎 清作君

在郷軍人 秋元 二平君 淺見仙之助君 伊藤福太郎君 大川馬之助君

大濱 兼吉君 三林和四郎君 笈川捨次郎君 伊藤 龜八君
 田中 清吉君 笈川七五郎君 越後 惣吉君
 御殿町小學校訓導 柳澤 武雄君

小石川區戸崎町六三 野村 由 藏君 (三十九年) 外數名
 本籍 熊本縣下益城郡豐福村 秋 岡 貞 子 (三十四年)
 現住所 小石川區白山御殿町一〇七番地 米田 外治郎君 (三十七年)
 現住所 小石川區白山御殿町 沖田 瀧次郎君 (三十二年)
 現住所 小石川區戸崎町七十二番地

●避難者の感激と奉仕

九月二日、柳谷君(二七)は日本橋區轟殼町二ノ一に車夫を業として居たが焼出されて、車を轆いてあてもなく小石川區護國寺前まで來ると青柳小學校が避難者を收容してゐると聞いた。勞れと饑とに迫られて居た同君は車を轆いたまゝ、青柳小學校の門前に立つた。「さあ〜どなたでもよいおはいりなさい。おにぎりをおあがりなさい」

と先生方が呼込んで呉れた。同君は其の夜から青柳小學校の世話になつた。一夜あけると血氣盛りの柳谷君の事だからもう元氣が恢復して立派に仕事が出来る身となつた。しかも車さへ持つて居る。

「車を轆いて出れば一日二三十圓の収入があるさうだ、君はもう働きに出て焼かれた分を取り返すがよい」

と皆に勧められたが、

「いゝを僕は青柳小學校に救はれたのですから、青柳の仕事より外には何もしません。」

と云つて、そこを動かかなかつた。一方、學校では數百の避難民を收容したが、それらの人々は不眠不休の苦しみや、不馴れな玄米食のためや、避難の際に蒙つた傷が痛み出すやらして幾多の病人が出た。君は此の間にあつて大學病院分院や警視廳救護所や白山上の福音教會内の救護所などへ患者を送り迎へすることを一手に引受け、病者が全く跡を絶つ迄働き通した。そして二十日郷里に歸つて行つた。

二、便所の掃除までした洋服屋の主人

ルバシカ洋服の元祖中島竹次郎君は家族店員十二三名を引き連れて小石川礪川小學校に避難して來

たが、同校で避難者間に自治制が敷かれたのを機会に、自らは店員を率ゐて炊事一切を引き受けた。平均一日三百名、多い時には數百名にも上つた人々の食料——米、味噌、野菜等を區役所から運ぶ事から炊出しに至るまで殆んど人手を煩はさなかつた。殊に避難民中には夜の二時三時頃に仕事に出る者もあつたが、氏はこれ等の人々にも少しの不自由をまかけなかつた。従つて氏の睡眠する時間はほんの僅であつたにも関わらず、晝間暇さへあれば出來得る限り雜役にも服し、皆の忌み嫌ふ便所の掃除までした。そして多くの人々がバラックを建てに毎日出て行つても氏は専心避難者の世話に努め約十八日間一日も怠らなかつた。氏は其の後一人の番頭をつれて自家復興の準備に大阪に出かけたが、尙ほ店員を残して出來得る限りの奉仕を續けさせた。

日本橋區編製町二ノ一 柳谷田藏君 (二十七年)

神田區仲樂町二十番地 中島竹次郎君 (四十四年)

●罹災婦人に職を與へたバラックの救護係

明治神宮外苑西南バラック明治神宮の外苑には東京市で建設したバラックが五十三棟ある。十月下

旬の調査によると收容された世帯數が約一千八百五十、人數にして七千三百餘の罹災者が居るのである。此の多人數の中には住居を焼かれたばかりでない。生活の基礎となるべき業をさへ奪はれた者も少くはない。よし従前通り職は失はぬにしても自家の復興を圖るにはより以上の収入を得なければならぬ。家内擧つて働かねばならぬのだ。

女子學習院に近い部分を西南バラックと云ふ。其の三十號舎に事務所がある。救護主任の黒岩義嗣氏は早稻田大學の文科に通つてゐる青年であるが、事務員福田喜久治君等と相談して收容された婦人等に職を與へんため、西南バラック婦人會を組織した。何とかして収入の道を得たいとは願つてゐるが、其の手段や機會に就ては誰しも容易に得られる譯のものではない。乃ち團體の力によつて適當な手段を講じ良き機會を捉へようと試みたのであつた。

最初は會員を十二三名として十一月になつてから開始した。松屋呉服店から百五十枚の着物の仕立方を註文されたので先づ材料が手に入つた。同愛會の本部に交渉した所、同會の柳田伯爵はさう云ふ事ならと快く五十圓を與へて呉れた。此の金で裁縫用具を買求めた。段々やつてゐる中に華族達の組織した震災同情會からもシャツ數千反の材料を供給された。だから會員を増しても差支なくなつた。そこで希望者は誰彼の區別なく毎回シャツ五枚宛を提供することにした。續々會員は増加して今は數

百人に上つてゐる。一枚の仕立賃が十五錢、一人で一日少くも六枚、多きは十六枚も仕立てる。毎日會全體で百圓以上の收上がある。中には此の收入を以て一家の生活から、子弟の教育費までも支出してゐる家がある。

此のバラツクに居る山村房吉君は、もとより仕立職で松屋の仕事などをしてゐた平素信用もあつたので松屋との交渉には大變好都合であつた。其の上會員のために技術の指導をしてやつた。君の家族は非常の反對であつたが、君は衆人の利益のためになるのだからといつて其の反對も斥け、熱心に盡力した。其の結果多くの婦人等が否其の家族等までが、その日々の生活も安固にひたすら復興への道を辿りつゝ晴れやかな氣分の裡に働いてゐるのである。

明治神宮外苑西南バラツク

救護主任

黒岩 義嗣君

仕立職

山村 房吉君

● 筏からバラツクまで

深川區越中島八番地に貸舟業を營んでゐた小川貞助君は、本籍地である同區蛤町一の四に兩親を置

き、自身は相生橋際の住居に十一艘の小舟を持つて商賣をしてゐたが、持つて生れた俠氣から、これまでもよく人助けをしたことがあり、夫々賞與賞狀を持つてゐる。現在赤心團といふものゝ團員になつて、所謂兄弟と稱する同志が九人ばかりも同居して居る。

越中島町は陸軍糧秣廠の裏手に近い。さうして相生橋を渡つて月島に相對してゐた。九月一日の震災と共に、深川方面の火の手が盛んになつてくると、小川君は先づ蛤町に住む兩親を家財と共に舟に乗せ、相生橋下の川中まで漕ぎ出した。けれども津浪の襲來を慮つて十五尋ほどの綱をつけた錠を川中に投げ、十分の安全を期してから、自らは川中に躍り込み、越中島の我が家まで泳ぎ歸つて火に對する用意をした。

かゝる間にも、古石場牡丹町方面からの避難者が殺到し、其の舟の貸與を乞うたので、君は快く之を貸した。處が、其の爲めに七艘の舟は行衛不明になつてしまつた。丁度、君の住居の真下から川上に當つて多くの筏が泛んでゐた。君は押寄せてくる避難者を導いて筏の上に乗らしめた。けれども其の数は殆んど數千を以て數へるほどであつた。然るに愈々糧秣廠が焼け始めると、其の筏に積いた三艘のたるま船の荷に火がついたので、筏も甚だ危険になつた。けれども小川君等の必死の盡力で、やつと之を消し止めた。かくて糧秣廠は焼ける商船學校は焼ける。小川君の住家も次第に危険状態に陥つ

た。そこで小川君は家族を指揮して防火に努め、遂に自分の住家だけは火難の外に置くことが出来た。そのため筏の上の避難者をも完全に救助することが出来たのである。併しこれ等の人々は容易に其處を退散することが出来ない。其の中の七十一人は九月の七日までそこに止つてゐた。その爲め震災の翌日から、これ等の避難者はすぐ食糧に窮した。そこで、小川君等は百方苦心して此の人たちに食料の給與を圖つた。飲料水の如きはたゞ一艘のあみ舟で永代橋際まで汲みに行つたのである。やうやく五日ごろになつて洲崎署から十俵ほどの米を配給されたが、それまでの苦心は並大抵ではなかつた。

その當時、群集に追ひ詰められた鮮人が六人ばかり相生橋の袂にきた。小川君は其の鮮人が決して不逞なものでないといふことを知つたので、是れを保護しようと思つた。さうして、鮮人を追つてきた群集に向つて、「此の鮮人は決して不逞なものではない。此の鮮人に指一本でもさして見ろ、赤心團の小川が其儘にはして置かない」と威かして彼等の暴行を誡めた。小川君は其の鮮人を警察に保護して貰ふため洲崎署まで送つて行つた。其の途中でもかうした場合に幾度となく出會つた。

小川君は常に震災當時のみかゝる働をしたのではない。其の後も引續いて民衆のために多大の努力を吝まなかつた。地震の騒ぎが少し落つて、越中島にぼつ／＼バラツクの出来た頃、小川君は其の兄弟を使つて、配給から取締りから夜警まで一切のことを引受けて、殆んど献身的に立働いた。

東京市深川區越中島八番地 小川 貞 助君 (四十三年)

● 救護には科學の力

氷川神社祭典の件について富坂警察署に出頭した竹林君は署内であの大震にあつた。君が所有して居る白山御殿町の機械製造工場は建築も古く、建方も粗末であるから必らず壊れたであらう。それにしても怪我人が出なければよいがと心中に祈りながら竹早町まで來ると、壊れたらうと思つた工場が無事に立つてゐるのを望む事が出来た。そこで君は打喜んで「あゝ有難い、此の際は何か世の爲め働かねばならぬ」と思ひ立つた。

そこから久堅町に下りて來ると博文館の印刷工場が倒壊して多數の職工が其の下敷となり、大騒になつて居た。君も直ちに歸宅して、附近の人を集め救助隊を組織して同所に赴いた。間もなく赤羽の第一師團の工兵隊から十數名の兵が駆けつけた。しかし鐵筋コンクリートの建物なので作業は容易に進捗しなかつた。暫らくして近衛工兵隊が交代した。

君は其の指揮者に向つて、

「私は先刻からこゝで四時間働いて居るが、もういくら、つゝいても引張つても此の通り鐵筋で繼がつてゐるから科學的方法に依る外はない」と説き、指揮者もこれに従つた。

そこで君は自らの率ゐて來た隊員を四方に走らせて、久堅町の酸素工場から鐵筋を溶かすために酸素を取りよせ、又初音町の金子三吉君からキリンを取寄せなどして着々と障害物除去の作業を進めた金子君方から來た職人は極めて沈着で、「南無妙法蓮……よーいとまいた」といふやうな掛聲で作業を敏活に進めた。

そして漸く人がはいり得る穴があくと大工職佐藤龜吉君が真先に其の中に、むぐり込んだ君も引續いて此の中に入り梁に打たれて眼の飛び出た者や石塊に尻をひしかれた死體の間を縫つて一人の女工を救出した。其の女は何處にも負傷してゐなかつたが恐怖がひどかつた爲か夜の一時頃遂に死去した。以上は君の沈着なる性根を表はす一端であつて、其の外植物園入口に澤山の紙を用意して避難者や尋ね人の氏名の掲示にあてたり、蠟燭がなくなつた時白山内の蠟燭屋から機械を借りクレオン製造所から材料を得て之を製造するなど特記すべき事が多い。しかし君の活動はむしろ災後の配給事業にあつた。小石川白山御殿町の一帶は土地が低濕で貧しい人々の住む長屋が立並んで居る所なので統御に

極めて難澁であるが、君はこゝに十餘年前から住ひ、又久しい間方面委員として何くれとなく町内の世話をして居る、従つてこの家は家族が何人で暮し向はどういふ風であるといふ事までわかつて居る。かうして、事情に通じて居る君は町内の第一の急務は配米にあると感じたので立替米までして急速に救済を開始した。同町の御殿町小學校は罹災者の避難所にあてられて多數の氣の毒な人々が收容せられて居たが君は病身をも厭はず一日僅かに玄米の握り飯一つを食べてこれからの人々のために働いた。その避難者中の辻さよといふ女の子が母と共に神田の焼跡から父の遺骨を拾つて歸つた時、町内の金を七八圓支出し、同校々長横川祐市君と二人で葬儀委員となつてさゝやかな葬儀を出してやつたといふ涙ぐましい話も残つて居る。

小石川區白山御殿町七六番地

竹林正太郎君 (五十一年)

●身を罹災民の救護に捧げた鮮人

此度の大禍亂から生れた數ある美談の中に、茲に三鮮人が、内地人でもなか／＼及ばない程、眞心をこめて、救濟事業の手助けをしたといふ感心な話がある。

一時安全を傳へられた上野警察署も、九月二日の午後、とう／＼物凄く魔の手におそはれて遂に烏有に歸してしまつた。上野警察署では翌日直ちに公園内に在る美術協會を借りて假事務所を此處に設けた。そしてギシ／＼と詰掛けて来る數十萬の避難民の救護事業に、全署總動員で活動した。

家を焼き、家財を失ひ、あまつさへ家族までが散り散りになつて、命がけでやつと此處に、安心の胸を撫で下した人々の多くは、二日も三日も水も飲めず、飯も喰ふ事が出来なかつたために、身體は綿のやうに疲れ切つてゐた。

上野署では何よりも先づ食を與へることの急を知つて早速炊出を初めた。そして是等罹災民に、配給するやうに手配をした。

當時、鮮人暴動、鮮人襲來てふ無稽な流言が盛んに傳へられたので市中は上を下へのどよめきを呈した。そのため民衆は非常に恐れ戦いて居つた。

多數朝鮮人の中に晴天の霹靂のやうな大慘禍の爲めに、世間が混亂と不安に慄いてゐたのを幸ひとして過激な振舞をした者もないではなかつたかも知れぬ。しかし姜點植君、鄭拜鉉君、朴輔根君の三人は突然警察署に出頭して「どうか何でも働きますから使つて下さい。私共が内地人から受けた御恩を返す時が來ました、あの不憫な人々を助けて上げる爲めに、どうか骨折らせて下さい」と、眞心を

面に現はして熱心に申出た。

署長は彼等三人の赤心を喜んでうけた。「よしわかつた。それなら今炊事夫が手不足で困つてゐるところだから其の方に働いて貰はう。」と言下に使ふ事を申しさかせた。

三人は並外れてよく働いた。朝は四時頃から、夜は十一時過ぎまで、遠いところから水を汲んで來たり、米を磨いだり、飯を炊いたり、握飯を造つたりして、一寸の間も休まず、立ち續け身を粉に碎いてよく働いた。此の忠實勤勉を目撃した者は、其の元氣と精力に勵まされて、誰もがよく活躍したといふ。

上野署を訪ねて、當時の彼等の奮闘振を訊くと「ほんとうに眞面目に、日夜少しも疲れた様子を見せず彼等が炊事に身を捧げて努めたのには、皆驚異の眼を見張らないわけに行きませんでした。」と

朝鮮釜山府大新洞三〇九 姜 點 植君 (二十二年)

同 忠南天安郡笠陽四郡下里 鄭 拜 鉉君 (二十三年)

同 江原道推陽郡洞東面上九裏里 朴 輔 根君 (二十四年)

●奉仕的に挺身努力する人

京橋區岡崎町二丁目二十三番地に今年五十二歳になる間米長十郎といふ人が居る。先祖は既に十九代程も此岡崎町に永住して居つたといふ古い家柄である。震災少こし前迄酒仲買商を營んで居た。今は令息一人女中一人の三人暮しである。九月一日の大地震の際附近の長屋住ひの人、中川磯八君家族と國代某の家族を見舞つて電車通りへ避難した。

間米君はこんな危急な大地震の際には火事も起る、又水道鐵管が破裂するに違ひない。先づ水の用意が第一だと長屋の一主人瀧澤利兵衛君に極力水を汲ませて各自のたらひに漲らせたのであつた。續いて方々に火事が起つたのを聞いて長屋の人々に荷物を用意させた。その時令息君は間米君に荷物よりも命が大切だから早く安全地帯へ避難しようではありませんか。」といふので間米君もなる程と早速前記長屋の人々六人を率ゐて築地方面から芝公園として行つた。然るに既に芝公園も危険だといふので品川方面に赴いた。その時君は芝公園内で日本橋區鐵砲町の石川商店支店羅紗問屋の久田義男といふ小僧に逢つた。羅紗も澤山背負つてゐたが下町の方へ還るといふ。君はその危険を話してきかせ

たので遂に同行することになつた。間米君は芝區高輪南町二十八番地、毛利侯爵邸内、高木陸郎君に厚遇を受け、遂に一行六人の者もこゝに宿る手配をしたのであつた。ところが丁度二日から鮮人騒ぎだ。けれどもそんなことに頓着してゐられない。間米君は私財を投じてサイダーを買ふとか食料品を仕入れるとかして罹災者の救護につとめたのであつた。

バラツクが出来たといふので君は一行を連れて岡崎町に歸つた。家主と一行中の店子との間には早速借家問題が起つた。君は卒先してこれを解決してやつたのである。今なほ君は民間調停會の本部を自宅において、裁判官の手を借ることなく、借地借家問題等の解決に努力して居られる。救護といひ借家借地の爭議解決といひ、義侠的な寧ろ奉仕的な熱誠なくばよくなし得る所でない。君は更に全市火災保險請求實行員の理事に選舉されて、その方面の解決にも献身的犠牲的努力をされた。

京橋區岡崎町二丁目二十三番地 間米長十郎君

●熱血兒岡崎君

「學校の方に火が見えます」と一日の午後家を飛び出した岡崎君は二日経つても三日経つても歸つ

て来ない。母親は心配の餘り、君の母校小石川區礪川小學校へ出かけた。行つて見るとシャツ一枚にネヂ鉢巻で避難民の救済に夢中になつてゐた。此の地震と共に家をも身をも忘れた岡崎君の活動といつたら逆も筆紙には盡されぬ程である。

一日午後三時頃學校に駆付けて見ると火事は諏訪町で學校は無事だ。諏訪町には友達が居る岡崎君はそれと氣が付いて駆けつけると畫家の友人、秋元君はあまりの事に荷物にも手をかけず茫然としてゐた。

「君。何をしてゐるのだ。早く〜」と急ぎ立て、友の家財を無事に救つた。帝都が一面の火の海と化した一日の夜は君は本郷の恩人の家の附近で防火に一夜を明した。

二日の夜明に學校に引返すと、これは如何に下町方面からの避難民が殺到して其の數が五百にも及んだ。まだ後から〜とつめ掛けて来る。熱血溢るゝ君はこの氣の毒な、可哀さうな避難民を見ては、矢も楯も堪らず、遂に家に歸るのも忘れてしまつたのである。

二日のひる頃であつた。下谷方面が火災と聞くと君は直ちに附近から大八車を借り受けて一散に富坂を駆け下つて行つた。目指す處は新坂本町五番地の恩師堀川喜久恵君の宅である。火はもう間近に迫つて居た。

「先生來ました」

と君は恩師の家に駆込んで、貴重な家財道具は一切、しつかりと車に積み上げてしまつた。堀川先生のお宅は焼けた。しかし教へ兒の心盡しによつて家財はすべては無事に礪川小學校まで運ばれた。

三日には同校の山本ぬい訓導の兄、本所菊川小學校長橋本熊太郎君の生死が不明であると同女史が懇嘆に暮れて居るのを見兼ねて、岡崎君は朝から食料を背負つてあの愴愴の跡被服廠から龜井戸とそれからそれへと手蔓を手繰つて市川まで行つた。そこでは尋ね當てる事が出来なかつたが、引返して小松川で無事に何れへか避難してゐる事を橋本君の知人に確め得た。かうして山本訓導を安んずるまでの君の苦心は一通りではなかつた。君は此の間に於て幾多の悲惨事をも目撃し、又それらを救はうとして身も危険に迫られた事すらあつた。

それから後の君の活動は全く驚嘆の外はない。君は大正二年に礪川小學校を卒業し、當年二十五歳の青年であるが浮世の裏といふ裏を知りつくして居るので其の一舉一動、すべてが二十代の若者とは逆も思へぬ程であつた。

夜半校舎内の避難民の宿所を見めぐると、赤兒が聲を引絞つて泣く、其の泣聲があたりの者の耳に入つて寝つかれぬので、母はそれらの人の叱罵の聲を浴びてゐた。しかし母は乳が出ないのである。

それを見た岡崎君は直ちに乳兒の爲に牛乳を集め、母親には近所の醸造會社に談じて味噌を寄附して貰つて汁にして與へた。それから又君は附近の寄附を得てあの混亂の際に避難者の子供におやつまで與へる。病者があれば懇に看病する。そして手の空いた時は學校の屋根に登り、雨漏りのする處をつくろふと云ふ風であつた。

九月二日から同二十五日迄君は全く不眠不休、只一度家にすら歸つた事がない。其の間にあつても君は同窓生の慰問をも怠らなかつた。先づ幹部を説いて基本金から百圓の支出を得、更に之に資産家の寄附を仰ぎ慰問袋を數多作り、西川牛肉店から箱車を借り受けあまねく罹災者の住所を尋ね巡り慰問品を送つて懇に慰めた。

君の努力はまだそれで盡きぬ。避難者中に二歳から十五歳までの十五人の迷兒があつてその處置には係員もほと／＼困じ果てたが、君は或は迷兒札をたよりに、或は父母の職業氏名等をたよりにして本所、海川方面までも探し求めて、中四人は遂に身内の者に引渡した。其の他の兒も次第に引取り手があらはれて最後にどうする事も出来なくて青山の女子學習院へ送り届けたのは僅に三人であつた。又一般の避難者は大塚の養育院跡へ移つたが君は其の後も着物や食料などを持つて度々養育院を見舞ふが恩を受けた人々は常に手をついて君を迎へたとの事である。

君は無職で災後は仕事に行けば三四圓も取れる身であり乍ら、三週間餘を全く公に捧げ盡した。君は嘗ては不良少年團に投じメリケン團長と仇名までされ、父母の怒にふれて家をも勘動されたことすらあつたとの事であるが、三四年前、恩師堀先生を頼んで父母に詫入つた後は豁然悔悟、此の奉仕の人となつたと聞く。平生も礫川小學校の同窓會になくてならぬ一人となつて居た。

東京府北豊島郡西巢鴨町三四五〇番地 岡崎稻太郎君 (二十五歳)

●自動車を操縦して區役所に加勢した宣教師

九月一日の晩一人の白人が赤坂區役所を訪づれた。流暢な日本語で「救護事業の爲め随分御多忙でせう。定めし運輸機關に御不自由の事と思ひます。幸私の乗用自動車が一臺ありますから區役所へ提供致しませう。運轉は私自身が勤めす。」と申出た。

電流を断たれた電車は市の内外共に一切不通である。此の際最も能力を發揮したのは自動車であつた。随つて其の需要が遽かに高まり貸貸料金の騰貴したことは今更云ふまでもない。救護の大責任を持つた區役所は行動の最も機敏を要する時である。一臺の自動車が如何に貴重なものであつたかは想

像するに難くない。一日一臺七八十圓を支拂つて尙容易に手に入れられなかつたのが實際であつた。此の白人はコールマン君といつて、役所から程遠からぬ乃木坂の下に住んでゐた米國の宣教師で、日本へ來てから既に十年になる。教會の方よりは日曜學校の事に最も力を入れて居たらしい。

明くる二日の朝からコールマン君の操る自動車は赤坂區役所の門を出て西に東に飛び走つて寸時も休む時が無かつた。區長を乗せて走る。吏員が乗つて出る。診療班が載せられる。市役所へ走つて行く。諸官省へ行く。避難者の收容所へ向ふ。未明から夜は十一時、十二時の遅きに到るまで些か厭意の色も見せない。誠心誠意運轉に従事した。連日連夜の烈しき使用に日ならずして君の自動車は大破損を生じた。最も緊急を要する際に修繕してゐては用が足りぬ。君は直ちに友人の許から一臺の自動車を借り來つて尙ほも懸命の活動を續けた。二日から九日に及んで辭した。

コールマン君の厚き同情は之のみに止まらなかつた。青山學院に居た優秀なる外科醫で、殊にレントゲンには卓越の技倆を持つてゐると云ふ友人某君を伴ひ來つて二日の間區役所内診療所に奉仕的治療を施さしめた。

悲惨を極めた大震災に當り世界を舉げて多大の同情を寄せられた事は吾々國民の齊しく感謝して止まない所である。アメリカ合衆國が與へたる救援に至つては特に感銘の深いものがあつた。而かも我

が内地に居留しつゝあつた親しむべき米國人等は大使ウツツ氏を初めとして、自ら災厄を蒙りながら深甚なる同情を寄せ、あらゆる方面から我が罹災者の救護に盡瘁したのであつた。コールマン君及其の友人某君の如きも亦其の大なる同情者の一例と云ふべきである。其の後コールマン君は歐米漫遊の途に上つた。再び我が東京に足を入るゝのは半歳の後の事であらう。

赤城區檜町十番地

宣教師

エツチ、イー、コールマン君 (五十餘年)

H. E. Coleman

●三兒に金を持たせて

「たまえ、隆亮、すみえ、こちらへおいで。お父さんはな町の爲めに働かねばならぬ。火がこちらへ來るといつて皆あの通り荷物を運んで居る。お前たちが居ては心配で働けないから三人で肴町から電車線路を傳つて飛鳥山まで逃げて呉れ。困つたらお巡りさんに頼め。」

と九月一日の夜十二、十、六つの三人の兄弟を離れ離れにならぬ様に紐で繋ぎ、各の子供の腰に五圓づゝ金を結び付け、パンを背負はせて逃してやつた齋藤君は家財には目もくれず、流言蜚語の防壁に力を注ぎ、又自轉車に乗つて火事場に行きまだ形勢の切迫してゐない事を知らせ、電車路に避難して

ある女子供のために架線から綱を下し、それに蓆をしばり付けて屋根を作り夜露を防ぎ、酸漿提灯を買集めあかりを供しなどして町内の人々の安全を圖つた。其の夜君は自轉車に乗つて何回となく火事場に往復した。幸に火は遠くて止つてしまつた。

漸く夜が明けた頃、昨夜逃した三人の子供は歸つて來た。

「どうした」

と尋ねると、六つの女の兒は

「電車の中で寝たの」

と答へた。三人は父に教へられたやうに飛鳥山へ行かうとして白山坂上まで行くと火は未だ遠い。こゝまでは容易に來さうもない。三人は、

「家が焼けたら逃げませう。」

と暫らくこゝで火の手を見てゐたが、遂に火は止まつて家は安全であると知つたから附近の電車の中にはいて一夜を明かし、早朝に歸宅したのであつた。

「困つたらお巡りさんに頼め。」

と警官を信用して三人の愛兒を出してやつた齋藤君はもと自らも巡査であつた。

君は明治三十六年四月から大正六年十一月まで警視廳管下に居り部長まで勤めたが、其の後前記の所で寫眞館を開き平安な生活を送つて居るが、君が在勤中の慈善的行爲や勇敢な行爲は擧げて數へ切れない程あり、其のために受けた感謝狀ばかりも三十有餘通に及んで居る。

明治四十五年三月春まだ寒い頃であつた。夜一時頃向島堤を密行して居ると、一人の女が五つ位の子を連れ赤兒を背負つて立つてゐる。

「母ちゃん怖いからお家へ歸らう〜。」

と大きい兒が泣き出した。聲をかけて馳せ寄ると女は五つの兒をも胸に縛りつけ今しも投身しようとしてゐる所であつた。事情を尋ねると、夫はビール會社に勤めて居たが作業中釘を踏み、足部を負傷したがそれが因で骨肉が腐り出し立つことが出来なくなり一家は饑に迫り其の夜も知人の所へ金を借りに行つたか金は出来ず思案に暮れた末こゝに及んだとわかつた。齋藤君はこれを救けて先づ自らも此の女に米一斗と味噌とを贈り、向島署員も同情義捐した。此の事が新聞にあらはれ世間の同情が一時に集まり治療費さへ出来、遂に芽出度く全快した。

しばらく経つた或日の事である。近所の人から、

「齋藤さん、毎朝あなたの家の前を戸がしまつてゐても帽子を取つてお辭儀をして行く人があるが

一體あれはどういふ人です」

六七二

と尋ねられた君は不思議に思つて朝早く起きて見て居ると、先に救つた職工であつた。君は胸迫つて涙にかきくれたといふ。君の此の人格は始終一貫してゐる。

今度の震災に當つても先づ自宅を開放して避難者を收容し、又町會の事務所宛て、或は朝鮮人を保護するなど一身を忘れて働いた。しかしこれは町會役員として當然なすべき事をなしたのだからと多くを語らない。尙ほ聞く所に依れば災後君は自分の子供が世話になつて居る小石川指ヶ谷小學校へ所用があつて行つた時袴を着けない子供を見て直ちに避難した子供だと悟り袴屋に頼んで九十餘着を新調して同校及び君の知人の居る本郷高等小學校とに贈つたとのことである。

小石川區指ヶ谷町百十七番地 齋藤喜一郎君 (四十二年)

◎救護に全財産を捧げん決心

下河原金平君は、株式會社下河原鐵工場及び長岡演藝株式會社の取締として龜戸町の柳島に住居を有つ義侠な人であつた。

今次の大震災に幸に龜戸の大部分は火災から免れることが出来た。けれども地盤が脆弱な上に粗末な建物が多かつた爲め町家屋が倒潰した。君の家は幸に災禍を免れたが近隣の人々は非常に困難に陥つた。これを見た君は直ちに之等の人々を收容すべく自宅裏にある工場半ばの十戸の長屋及び二百坪ばかりの空地を開放した。かうして附近の罹災者四五百名をここに收容した。そして次に起る餘震を物ともせず自宅に取つて返し、危険を冒して白米や大釜を取り出し、建築材料をたゞきこはして薪に代へ、炊出しをして人々に與へた。一方人を方々に走らして白米八俵を買入れしめた。その時丁度本所病院が熾んに燃えつゝあつた。そしてさしも宏大な病院も忽ち灰燼に歸した。

その飛火の爲め日清紡績會社に延焼した。事態容易ならずと見て群集に向ひ、「今や火は日清紡績に及んだことも遠からず焼けるに相違ない。僕が安全な場所に案内するから後からついてくるやうに。」と言つて四五百の群集の先になつて小松川に避難した。ここに不安の一夜を明し、龜戸全町は焦土と化した事と思ひながら、歸宅して見れば、本所方面の罹災者の爲めに自宅及長屋全部が占領され立錫の餘地なき程であつた。君は且つ喜び且つ驚いた。そして動搖し戦慄してゐる避難民を目撃した咄嗟に、「家屋及び總ての家財は焼失すべき運命にあつたものが偶然に残つたのだ。あの時綺麗に焼けて居れば何等の煩悶も起らなかつたのであらう。神は彼等に與ふべく残されたのだと考へ、全財産を舉げ

六七三

てこの悲惨なる罹災者の爲めに盡さう」と心に誓つた。

見れば火に追はれた彼等の中には全身火傷したものの、又は負傷したものの、凡そ二百名を算したその時君の友人で本所區選出の市會議員で醫師の小俣政一君が家族と共に避難して居るのを發見した。これに力を得た君は直ちに小俣君と相談して第一に傷病者の治療を開始しようとした。然し治療すべき何等の材料もない。そこで隣町まで人を走らして繙帯、ガーゼ其他出来るだけの衛生材料を買ひ集めた。そして小俣君の家族及自分の家の女中二人まで臨時看護婦に仕立て一家總かゝりになつて治療にかゝつた。馴れない手付ながら小俣君の指揮によつて片つ端から治療した。然し患者の總てが煙の爲め殆んど失明してをうたのでどうにも始末が悪い。二日午後十時頃になつて一通りの治療がすんだ。その治療の困難は繙帯二十五反を要したのを見てもわかる。一方理性を失つた一般罹災者の救護も一通りの混雜ではない。當時は全く金融の道が杜絶し總てが現金賣買であつたから、食料品の蒐集には随分困難を感じた。君は窮餘の策として龜戸警察署長に談じ、署長の證明ある一種の手形を作り、急場の間に合せて食料品を買ひ集めた。又玄關前には慈善鍋と稱し、飲料水、握り飯、巻煙草等を多數に供へて道行く人に接待した。この活動は六日迄続けた。然し追々傷病者の數が増加してどうする事も出来ない。その中にふと附近に元料理店であつた二階建の空家を見出し、早速之れを開放して第二

下河原救護所を作り百名近くの傷病者を收容した。この間小俣君も亦下河原君を輔けて治療に従事する事凡そ十五日に及んだ。其後は醫師吉田秀彌君がこの難局に當ることになつた。かくて九月末日の收容延人員は實に五千四百六十九人の多きに及んだ。一方下河原君の妻君も亦君に劣らない温い心の持主であつた。夫を扶けて救護に従事すると同時に、あらゆる衣類を避難者に分與し、尙町々から古着の寄附を募りこれを全部の人に頒けて與へた。それで町の人々もこの健氣な志に同情し色々金品を寄贈してこの事業を助けた。本所區本横尋常小學校訓導安藤光顯君もその一人で、三度に亘つて火傷藥十四貫目程も寄贈した。憲兵隊や警察署員も下河原君の意氣に感じて種々なる便宜を與へたことはいふまでもない。

この事業は十二月になつても繼續したが、これ等避難者中には随分悲惨な者が多い。孤兒となつたもの一家不明になつた老婆、夫は焼死し自分は流産して收容されたもの等多種多様であつた。その中に清子といふ今年四歳になる可愛い女の子が在る。唯清チャンとばかりで他は何事も判明しない。君の妻女は我が子のやうに每晚抱きねをして可愛がつた。所が收容後四十九日目に計らずもその近所の人の言葉によつて、この子の祖父は千葉縣の某所に居る小川伊之吉君と言ふ事が判明した。大河原君は直ちに千葉縣に駆けつけ小川君に面會して種々な談合の上更に養女として貰ひ受ける事にした。又

六郷伯爵家の別家、府下吾嬭町請地の富豪六郷家の親戚に當る松浪きいせ(七九)と言ふ上品な老人も居た震災前までは相當な仕送りがあつたがその後杜絶したばかりでなく、今は病氣で身動きも出来な
い有様である。君はこの老人をも恰も親に對する如き態度で何くれとなく世話したのであつた。

君は救護事業に全力を注ぐと同時に非常に衛生に意を用ゐた。この下河原救護所から傳染病患者を出してはならぬとの周到な注意の結果一人の傳染病患者も出さなかつた。又如何に不眠不休で活動したかといふ事は、三百名以上の患者中死亡者が僅か七名に過ぎなかつた事を見てもわかる。同君は震災前までは政治に興味をもち、曩に町民會を組織し、推されて會長となつて自治の刷新を圖つたが今後の震災を動機に政治界より脱して終世社會的事業に活動すべくその第一歩として労働者宿泊所、託兒所を開設しようと目下計畫中である。

東京府南葛飾郡龜戸町柳島八番地 下河原 金平君 (四十三年)

● 溢るゝまごゝろ

鈴木りん子さんの夫松吉君は鐵道工事請負業だから自然不在がちである。で、りん子さんは豫て自

分の仕事として若干の貸家を管理して居た。そして其の家に住む人達の爲に、心からの同情となり、後援者となり、理解ある人生の道連となつた、夫れは全く他人業ではない。殆んど家族同様に其の不幸を憂ひ發展を悦ぶのであつた。家賃も決して一律でなく、住む人の収入と家業の盛衰を慮つて自由に加減することを忘れなかつた。困る人からは貰はうともせず、それを援助し激勵して困らぬ様にしむけることを楽しみにした。店子の人達から非常な信頼と敬意を拂はれて居たことはいふまでもない
震災が起つて空前の大混亂が始まると同時に、平素の豊かな同情心は燃えあがつた。即時に女中や附近の人を頼んである限りの米を炊いて握飯を拵へ、下町方面から遁げて來る氣の毒な人達に唯一つづゝでもと深切に配布を始めたけれども限りある米は直ぐに盡きて仕舞ひさうである。そこでりん子さんは人を埼玉に走らせて米を買はせた。「こんな場合であるから價を吝んではならぬ」と手一杯に買はせて土地の消防夫に運送して貰つた。炊出しをつゞけたばかりでなく、附近の困る人には譲りもした。平素心がけてあつた梅干や味噌漬類も全部取出して分配した。知人に無一物の焼出されも澤山あつたので、衣類は勿論勝手道具一切を取揃へて幾組かを贈つた。夜具蒲團の類も凡そ四十枚ばかり、網夜具の様なものを少しも惜まず終には自分が着のみ着のまゝとなるをも厭はなかつた。

市内には家が潰れて、水道がとまつた爲に風呂に困る人が多かつた。りん子さんはそれをも心配し

て自家用の風呂槽二つを庭前に持ち出させて井戸水を汲んでは毎日知ると知らぬを問はず入浴を勤めた。晝夜の勞苦はたゞ罹災者を援けるための仕事のみにあつた。

其のうちに自宅の家作にも夥しい損害があり、屋根の壞れた處も多いのを見て、萬一急雨の爲に家の中の人を濡らすやうなことがあつてはと、高い賃金を惜まず支拂つて屋根職人を雇入れ一ヶ月餘を費して何處よりも早く修理を終つた。この爲に鈴木家の家作に住んで雨漏に苦しめられたものは一人も無かつた。

家作に住む人々の間には會社やお店が潰れた爲に臨時に職業を失ひ、収入を減じたのも尠くなかつた。りん子さんは其の月十八日に書面で九十月の二ヶ月分の家賃は御見舞として差上げたいから。納めないでくれるやうにと叮嚀な慰問の言葉を添へた廻状を發した。借家人は全く恐縮してしまつた。そして一同申合せてお禮に若干の見舞金を添へ、尙破損した井戸の修理は全部借家人に任せてくれるやうにと頭を下げて承諾を求むるのであつた。

りん子さんは決して富豪ではない。伊豆の下田の白米商の家に生れ、夫の家に嫁してからも随分苦しい生活を續けて、具さに世の辛酸を嘗めた體驗の所有者である。常に身邊を飾らず、勤儉質素遊覽などに出ることもなく、暇あれば裁縫洗濯に餘念もない。そして借家の人々に力を添へることを何よ

りの慰安として、養子次郎君(早稻田高等學院在學中)と、稀に家に戻る夫と三人平靜な生活を樂しんで居る隠れた模範的の婦人である。

東京市本郷區駒込坂下町一四六番地 鈴木 りん子 (四十五年)

●私設バラツクに避難者七十餘名を救護す

芝區高輪町八十番地に榎本政吉といふ元氣な土木請負業者がある。九月一日の大地震が起るや、九月十日まで不眠不休の有様で罹災者の救護にあたつた。當時避難者は、高輪中學内に收容されてゐたが、九月廿五日には開校することになつた。で、これ等の人々は學校が始ればさしあたり行く所がない。それを非常に氣の毒に思つたのは榎本君である。しかし、自らは大きな邸宅もなく、大した資産もない。そこで日頃出入してゐる高輪町三十五番地の堀越家に至り、救護の必要を力説した。堀越家は當主を覺次郎君といひ、妻女をウメ子と言つて大地主である。榎本君の熱心に感動した主人夫妻は直ちに、その申出に賛成し、目下建築中の芝區伊皿子三十三番地の本邸に廣い庭のあるのを幸に、約六十坪ばかりのバラツクを急造して、九月の廿日から、住むに家なき罹災民を收容した。當時そのバ

ラックに收容された者は大人六十七名小供五名合計七十二名にも達した。これ等避難者のすべては寝具もなく、衣類もなく、ねまきもない有様である。そこで堀越君は罹災者の全部に對して、寝具を新調し、更に大人にはニコ／＼餅のねまき、小供にはニコ餅の羽織や袴を作つて配布した。警視廳から派遣された二人の看護婦には銘仙の羽織及び着物、メリンスの長襦袢、帯、足袋、下駄等に至るまで新調してその勞をねぎらひ、毎日堀越君又は夫人自らラックを尋ね、菓子等を與へて慰問された十月廿日芝離宮のラックが出来ると同時に避難者全部はその方にうつたが、その間一箇月は全くこれ等罹災者は堀越君のために安かに生活することが出来たのであつた。因みに、前後一切の費用は全部で四千圓を下らないことである。

東京市芝區伊豆子三番地

堀越覺次郎君 (二十九年)

東京市芝區高輪町八〇番地

榎本政吉君 (六十二年)

●多數の罹災者を救つた隠れたる篤志家

過般の大震災で最も罹災者が困難な状態に陥つたのは、九月三日四日頃であつた。殊に三日の午後

には急に夕立のやうなドシヤ降りが來たので、雨具の用意のない人達は、實にミジメな有様であつた。都から鄙へと遁延びて行く人は大概、日暮里か田端から汽車に乗つた。だから上野から日暮里驛への道路は非常な混雑をきたしてゐた。それが雨となつては一層の混雑となり、見るも氣の毒な有様の人々もなか／＼多かつた。ちやうどその道の傍に住んでゐた下谷區上根岸一二番地林時郎君(五二)は此の悲惨な人々を見て、惻隱の情の禁ず能はざるものがあつた。而し到底全部の人を救護することは出来ないせめては最も苦しい立場にある人だけでも助けてやりたいと思つて、家に呼び入れて助けた人の數は、實に六十餘人に及んだ。

君は是等の人々に、握飯やうどんなどを食べさせたり湯を立てに入れてやつたり、數日の間蒲團の上になる事の出来なかつた者には、安かに蚊帳の中に眠らせたりして、到底並大抵の人には出来ない程親切に世話した。

主人林君はそれのみでない。旅費に窮する者には旅費を與へ、跣足の者には足袋を、衣類のない者には着物をと、それは／＼出来得る限りの手當をして、苦しみと不運に泣く人々を慰めたのであつた。家族の者三人は僅かに二疊の間に、蚊帳もつらず、蒲團も敷かずのゝて避難民には出来得る限りの面倒を見てやつたから、それ等の人々も嬉し泣きに泣いてゐたとの事である。

更に林君は、迷子の犬を見つけては、我が家に連れ来つて、世話してやつたそして住所の明かなものには通知を發して、居所を知らせるなど、全く並大抵の事ではなかつた。其の數は全體で六頭であるが、其の中の一疋の如きは、地震の時腰のあたりを打たれたらしく、後足がブラリとして歩く事が出来ないので、後部に車を作らせて結ひつけて歩かせたとかいふ話であつた。其の中の他の一疋は幸ひにも持主が判明したので手紙で通知してやつたとのことである。其の犬の飼主から君に宛てゝきた手紙があるから左に擧げて此の稿ををへることにする。

拜啓

先日來べル儀種々御厚情を蒙り候段厚く御禮申上候早速乍ら頂戴に伺ふべき筈の處承知の通り大困亂を致し候て御伺ひ致しかね候處本日一寸手餘りに相成候間參上致すべく候御不禮の事平に御容赦被下度候 御貴殿の御厚志小生等犬好きには一しは嬉しく感せられ恰も同行の士を得たる氣分致し候愛犬仲間に語合ひ候て貴殿の徳を常に御禮申上候甚だ勝手がましく候へ共使の者には是非共御遣し被下度亂筆乍ら御願申上候

十月五日

杉尾時郎様

長沼康夫

下谷區上根岸二二三番地 東京府聯合商業會議所書記長 林時郎君 (五十二年)

同 市茶業組合書記

◎天道様への御奉公

氏が三百市民各位に告ぐと生活改善を旗幟として私設公衆食堂を開いたのは昨年十二月であつた。「此の食堂で一家十三人が天道様へ御奉公主義で働いてゐます。これは熱や光や空氣や水を天道様から、たゞで頂いてゐる謝恩の微衷でやつてゐるのです。そして少しでも御安く皆様へ差上げる事が出来るやうにと心掛けてゐます。」

とこの微衷は災後避難民救助に向けられた。

下町方面から續々と何のあてもなく避難して來る人々を眺めてゐた西川氏は意を決して自宅から程近い江戸川橋の袂に救護所を設け、殆んど全財産を傾注して九月三日から同十一日に至る九日間、茶めし、水とん、葛湯おもゆ等の焚出しを繼續した。

氏は若い時から慈善心に篤く明治三十年代某會社に奉職してゐた時熊本に出張したが、偶々ハンナ・リデル嬢が癩病患者收容の目的を以て回春堂醫院を建設すると聞き僅か二十五圓の月給から十圓を割

いて寄附した。又名古屋商業學校及び鹽見化學研究所等に贈つた金額を合すれば二千數百圓に及んでゐる。

バラックが出来た後は三萬枚のピラを刷つて、屋賃を日掛するつもりで、帝都復興のため、世界の惠み天道様の御恩に報いるために貯金して下さいと勧め廻り或夜の如きは動けなくなつて車で運ばれて來た事さへあつた。又新聞に廣告して、

- 一、絹布は一切着用せず、之を世界の市場に賣出すこと。
 - 二、家屋の改造及建築に當つては一人一疊若しくは二疊と定め、宏壯なる住宅を造らざること。
 - 三、食物は美食を避け、たるべく國立營養研究所の發表せる最安直の食事を取ること。
 - 四、冠婚葬祭は一切華美に流れず、其の費用を割きて世界平和のために慈善資金に供すること。
- かうすれば三十億の資金が得られると主張をした事もある。更に帝都復興に當つては、此の度の詔書に勝る教訓はないと、同時に下された。攝政宮殿下の御沙汰書とを合せて、知人、文學士松平圓次郎氏の謹解を得て近く之を出版し全日本數百萬の學童に無代で配布しやうと企ててゐる。
- 此の奉公主義を掲げて活動してゐる西川君は日清戦争前一ツ橋高等商業學校に福田徳三博士などと共に入學したが中途學を廢し、諸會社の重役などを經巡り今日の境遇に入つた人である。

(附記) 氏は情熱の人である。私は氏の慈善行爲を聞かうとして刺を通じたが、何の善行もありません。私はたゞ、御奉公にと思つて自分出来るだけの事をしたのみです。どうぞさういふお調べなら、何にもありませんからお歸り下さい」とはらゝ涙を流してゐた。氏の此の涙には如何なる心が籠つてゐるであらう。話の多くは氏の妻なる人から得たのである。又寄附金の件は氏が災後の活動に當つて山師であるとの疑を避けるため證明書代りに持ち歩いてゐるといふ禮狀や受取證を見て記したのである。

小石川區關口水道町四十六番地 西川彦太郎君 (五十五年)

● 一人で儲けてはならぬ

震災後内田君の製造にかゝる足袋は飛び行く様に賣れて多額の貯藏品まで殆んど空になつた。震火災を免れ、生命が安全であることさへ有難いのに多額の利益を私しては、社會に對して申譯がない。と指ヶ谷町實業會幹事山木、齋藤兩君にはかり九月四日から自宅及び工場を開放して、

「お宿にお困りの方はお泊り下さい。御飯が炊いてあります。」

と揭示した。避難民はぞろ／＼はいつて来るが肝腎な米がない。そこで取敢へず番頭に八百餘圓を持たせ、郷里志木町に遣はして米を集めて來させることにし、尙ほ郷黨の疑を防ぐため山本、齋藤兩氏の同行を乞ひ、又交通機關杜絶し馬力では急場の役に立たぬので、兩氏を介して區役所に自動車の貸與を願ひ出した。

區役所では快諾したばかりでなく、急を救ふために二俵の米さへ分與された。それから九月十九日植物園のバラックに總ての人を送り届けるまで家業を休み店員總掛りで平均一日二十八人を世話し沈み勝な人々の心を引立て、更に主人は四方を駆け廻つて職業を探し、罹災者の自活をはかり、又歸國者には相當の旅費小遣まで給してかへした。かうして氏の世話を受けた罹災者は、悉く皆夫婦連れの者のみであつた。此の救済の仕方は氏が半世に於てあらゆる世の辛酸を嘗めて來た一面を語つた。氏は今こそは多くの富の持主であるが明治二十八年に僅が三十圓の資本を以て現住所に程近い所に間口九尺の小店を開いたのであつた。今も氏の原町四一の住宅には一金八圓也といふ當時の雜作代の受取證が額にして掲げられてある。氏はこれに依つて開業の當時を偲び、又子孫を戒めたいと語つて居る。

植物園のバラックも完成したので九月十九日には残る十八人の避難者をそこに送り、家業を開始す

ることにした。其の時も各々の人に着物一枚を與へ、又バラックに對しては手みやげとして手拭五十本を贈つた。

本籍 埼玉縣志木町
現住所 小石川區指ヶ谷町百十一番地 内田重次郎君 (四十二年)

●二十餘名の迷子を世話した上

横死者の靈を吊つた篤志家

身の毛のよだつやうな、あのおろしい大地震のあつた日の午後四時頃、石井氏は直ぐ近くにある上野公園に行つて海嘯の如く押寄せた群集の慘狀混亂を目の前に凝視した。そして思はず老の眼に涙をうかべたのである。

其の中には、汗と埃と灰にまみれた襤褸々々の單衣にくるまり、髪の毛を風の梳るにまかせ、半狂亂の態で、混雜の爲めに見失つた可愛い我が子を、血眼になつて探し廻つてゐる婦人もあれば、いとしい兩親に離れて泣き叫ぶ幼い小供もあつた。

是等の悲劇を眼前に目撃した氏は、迷子の救済を思ひ立つた。そして其の足で谷中警察署に立ち

寄つて、署長に面會し「迷子があつたらお世話をいたしますから、どうか遠慮なく私におまかせ下さい。確かに責任を負つて、御迷惑を掛けるやうな事はありません。幸ひ私の家は廣う御座いますから何人でもよろしいです。」と申し入れた。すると署長も氏の人格を信じて、丁度迷子の處置に殆ど困り切つてゐたところであつたから、

「御親切誠に有難う存じます、署の方も實は手不足で非常に苦しいところですから、早速ですが御厚意に甘えて遠慮せず御依頼申しませう。」

と言つて、其時警察署に收容してゐた神田區同朋町の山川浩二(一〇)さんを初め、二十名といふ澤山の子供を引渡した。

氏は大變喜んで、二十餘人の子供の親となつて、家に連れて來た者：：其の中には乞食よりもひどい姿の者もあつた：：をお湯に入れて洗つてやつたり、着物を縫つて着せたり、お粥を煮て食べさせたりして、出来るだけの面倒を見てやつた。

時々親の事を思ひ出しては「母ちゃんの所へ行きたい。」と言つて泣く子もあれば、石井君一家の者の親切なことに感じて、有難がつて涙ぐむ子供もあつた。

どうかして一日も早く親元に送り届けて、親にも安心させ、子供にも悲しい思ひを永くさせたくな

い。と考へた石井君は、それ／＼住所等を聞き訊してまだ残りの火が、カッ／＼としてゐる三日、家族の者と手配をして、焼跡をあらゆるこちらと捜し廻つた。

熱風が用捨なく吹き荒む焼野に問ふ人もなく、尋ねる術もなくて途方に暮れたこともあれば、折角やつと捜し宛て、見れば立退先が不明だつたりして、其の苦心はとても並大抵ではなかつた。立札のないところには瓦や焼けたトタン板などに、子供の避難場所と、消息を書いて通信し、住所の知らせあつたものは、わざ／＼小供の手を引いて届けてやつたものだから、案外に早く處理がついて九月十一日には全部引き渡してしまつた。

「死んだものと思つて、あきらめてゐた可愛い我が子に會つて狂喜する親、再び此の世で見られけいと悲しんでゐた親の手にしつかり抱かれて泣く子。」

を見て、石井君も幾度か男泣きに泣いた。

全く廢墟となつた帝都には、死屍累々として、到る處に横り、實に生きながら地獄を見るやうな氣がした。而し是等、不幸にも災危の手にかゝつて、果敢ない最後を遂げた人々の靈を慰める人もないこれを泌々と心に感じた氏は、せめて供養なりとして、死者の靈を弔ふことが、生き残つた者のせねばならぬ手向だと思つて、豫てから相知つた河口慧海師の門を叩いて、其の慘狀を物語つて、自分の

意を告げ、供養を依頼した。同僧も氏の立派な心掛けに深く感動共鳴して、直ちに賛成した。五日、谷中墓地に捨てられた朝鮮人の死骸、二十餘を第一に、凄惨を極めた吉原の池や田中町の學校敷地跡を尋ねて、讀經して貰つた。翌六日には、向島枕橋附近から、被服廠跡を見舞つて、ねんごろに回向をした。

石井君を訪ねると、氏は『私の此度した事は唯單に人間としての義務を果たした許りで、お話しする程の事ではありませんから……』と。氏の如きを隠れたる眞の慈善家といふのであらう。

本籍 山梨縣北都留郡巖村四五番地 石炭販賣業 石井久太郎君 (五十八年)
住所 下谷區谷中天王寺町二三番地

●責任者こゝに在り

一條森吉君は神田三崎町株式會社金田銀行常務取締役支配人である。銀行は震災火災によつて全焼したが自宅は無事であつた。

九月二日銀行跡へ行き、更に松住町から本郷三丁目の方を廻つて歸つたが處々に水飲場がある避難者は一丁も列を作つてそれを飲んで居る。

これを眺めた氏は直ちに家に飛び歸つて大塚辻町の道路の分岐點に救護所を設けた。此の時氏の宅には四十七名の緣故者が避難して居たのでこれ等の人々を使つて仁丹、清心丹、薄荷等を買集めさせて第一に水の接待を始めた。接待所の背後には大文字に、

「責任者一條森吉」

と書いた。これは決して買名ではない。流言蜚語のために、もしや毒でもはいつては居まいかと乾き切つた咽喉をさへ濕らすに行く人もある。飲む人も恐る／＼飲むといふ有様を見て來た氏はかうして責任を明かにしたのである。

人手は有餘る程だ一方で仁丹清心丹などを出す、一人は水に薄荷を混ぜる。他方では柄杓に汲んでやるといふ風にして避難者を喜ばせた。

又一方では子供等が可愛さうだと菓子を買集め之を小袋に入れて、來る子供／＼にわけてやつた。自動車や車で行く子には其の中に投げ込んでやる。又三日には雨が來た。濡れ鼠になつて行く人を見て直ちに傘四十本を買集めて氣の毒な女子供に分けてやつた。

氏は此のやうな救助を二日から開始したが諸種の物資が豊富になつたのは五日以後の事であつた。氏の救助は熱切な同情と綿密細心な用意とから出てゐる。かの燒跡に立退先を知らせる立札まで用

意した事に依つても想像することが出来る。僅が一杯の水もあの當時には天與の甘露の思がしたのであつた。

本籍 福島縣伊達郡梁川石城町
住所 小石川區大塚辻町九番地 一條 森 吉君

●篤志家が多くて幸福な町

瀧野川町長榎本初五郎君は、

「全町を擧げて克く活動し、之と云ふ遺憾な點もなかつた。が、其の中にも澁澤子爵を初め多くの篤志家があつて、何れも罹災者のために深甚なる同情を寄せ、單なる形式に流れず、本町否、人類の爲めに盡瘁されたことは本町の最も誇とする所であり、篤志の方々に対して深く感謝してゐる次第です。」

と、前置きをして次の如く語つた。

九月二日の夜は已に十七八萬の避難者が比較的安全な飛山公園を控へた此の瀧野川町に流れ込んでゐた。東京方面の火災は尙ほ鎮まらぬ。身を安きに置かんとして逃れ来る群集は一隊又一隊、續々

として其の盡くるところを知らない。事態の不安は刻々に其の度を加へるばかりであつた。

町長は助役と共に澁澤子爵を其の邸に見舞つた。流石に經濟界の覇者である。

「最も緊急なる問題は食糧の提供である。直ちに米を購入しなければならぬ。」

と、形勢を洞察した子爵は、先づ町長等に注意を與へられた。今度の震災に因つて蒙つた子爵の損害は決して鮮少なものはなかつた。それにも拘らず郷里埼玉縣から米の買入れを直ちに開始せられた子爵自身の信用を以てせられたのである。子爵の購入せられた米は前後凡そ三四千俵に上る。之れをすべて一升五十錢を以つて賣り下げた一升五十錢の價は決して安くはない。けれども平生と大いに趣を異にしてゐるのだ。鐵橋破損のために汽車は川口驛までしか荷を運ばない。川口驛から瀧野川までは荷馬車やトラックで持つて來なければならぬ。時には一臺數十圓を拂つて浦和まで取りに行つた事もある。一升の價は五十錢位の事ではない。賣つたのではあるが子爵の損害は事實莫大であつたのである。店に一升の賣る米もなく、家に食ふべき飯の無かつた際に此の米が幾萬の人々を饑餓から救つた事であつたらう。内務省の手になる配給米は十二日朝から此の町をも潤すことになつたので乃ち此のことは中止するに至つた。

子爵は特に今回だけ世を救つたのではない。常に公共の爲め率先して活動されることは世間周知の

ことである。本邸を置く番町のために平素あらゆる便宜と援助とを與へられてゐることは今更喋々を要しない。同邸は殆ど全部開放せられて當町の糧食本部を置かれた。玄關から應接室、客間に至るまでさしにも宏壯なる建物も今は味噌、醤油、米、薯、野菜、罐詰の類が山と積まれて餘す所がない。床は泥にまみれ、窓は埃によごれて目もあてられぬ。助役を初めとして吏員等が其の間に汗みどろになつて懸命に働いて居る。何の事はない。邸全部が役場に占領されて其の物置になつたやうなものである。子爵は些の不快げな顔色も見せられぬ。歸邸される毎に必ず吏員の勞を愾らはれる。どんなに遅い時でも言葉を掛けて配給の状況を聞き取られる。全然吾が事のやうに見て居られるのだ。自分の名の爲にするらしい點は微塵もないのであつた。

場所柄だけに當町に於ける鮮人騒ぎは實に凄じい有様で何時如何なる慘事を惹き起さぬとも限らない形勢であつた。町長助役等は百方其の鎮靜に力めたが殆ど何程の効もなかつた。子爵は深く此の事を憂へ四日の事であつたらう、二回も自動車を飛ばして後藤内務大臣に面會し、之を如何にすべきかと伺出られたのである。

「鮮人は決して怖るゝに足らない。けれども今は非常の際である。何處と雖も嚴重に自ら警めなければならぬ。」

内務大臣の回答を齎した子爵は各自警團に對して大義を誤らざるやう注意する所があつた。當町内に一の忌まはしき殺傷事件も見なかつたのは一に子爵の幹旋によるものと云ふべきである。

九月も半ば過ぎた頃急に寒冷を催してバラックに住む避難者たちは夜寒に少なからず脅かされた。

子爵の同情は愈々微に入り細に亘る。一夜の中には四百枚の蒲團を買入れて寄附された。收容所の冷き床に呻いて居た病者、傷者、着る物も無く慄えてゐた避難者等が厚い恵みに温められたのであつた

*

*

*

*

*

澁澤子爵と同様に其の徳を稱へなければならぬのは古河男爵である。男爵邸は震災と共に開放せられて二日の夜は已に三千名位の避難者が收容されてゐた。其の二日の晩男爵は自ら役場に來られて町長に向ひ、

「病人や怪我人の救護に就て何等かの方法が講せられたか。若し必要とならば我が邸宅を開放して提供するも差支へない。」

と申出でられた。何たる福音であらう。壯麗を極めたる男爵邸西洋館の階下全部は忽ちにして開放せられた。眞の同情に發した善行は何等求むる事をしない。男爵は徒らに名を賣らんとしたのではない。「瀧野川町救療所」と名づけて直ちに傷病者の救護を開始した。

邸宅を興へたのみならずは他にも例はあらう。何も建築の宏麗なるを誇らんとするのではない。男爵は更に進んで自ら救護の第一線に立つたのであつた。先づ藥品其の他の購入に奔走された。言ふ迄もなく當時は藥品の缺乏甚しく、其の蒐集は思ひの外に困難であつた。遠くは足尾銅山まで人を派して求めしめた。男爵の買入れた藥品はすべて二萬圓の多きに上つたのである。藥品の完備したる點に於て他の如何なる救療所にも遜色なかつた。順天堂の外科主任たりし押川公介君を初め、杉本東造、野本正直、本田ドクトル等に依頼して救護の任に當らしめ、男爵自身はシャツ一枚の輕装で、恰も小使の如く、或は患者醫員の間に立ち、或は役場との間を往復して席の温まる暇もなく縦横に奔走せられた。壯健にも見受けられぬ男爵夫人もエプロン姿甲斐々々しく、看護婦や女中の先頭に立つて患者の手當、食餌の用意、さては清潔整頓の仕事まで、雲厭ふ氣色もなく働き続けられた。男爵夫妻の目覺しき活動に感激して玄關子を勤めたのは曾て江東の土俵に其の名を得た大錦君であつた。彼は男爵邸に收容された避難者の一人であつたのである。

救療の一例を示せば他は十分に想像し得られるであらう。患部へ藥を塗るのに一回二十圓位を要する負傷者が多かつた。時には一日四十人位もこんな患者を收容手當を加へたことがある。而かも一日二回宛塗替へてやるのであつた。前後收容した患者は延べて二千人に及んでゐる。尙ほ同邸には歩兵

第三十聯隊の本部を置かれたため、階上の全部が之に提供せられてゐたのであつた。

後内務省から七百石の木材を供給せられて二十三棟のバラックを同邸内に建設することになつた。

男爵は其の費用を全部自身で負擔したにも拘らず、毫も其の名義を用ひない。而かも收容された人々に對しては親切を極めてゐる。外に出て働く人の便宜にと託兒所様の設けもした。保姆三名を雇入れ男爵夫人が肝煎しつゝ毎日多くの子供を預つてゐる。一日多きは五六十名に達すると云ふ。

x

x

x

x

古河男爵邸内の救療所へ瀕死の病人を連れ來つて之を再生への光明に導き出されたのは篤志家小峰博士であつた。博士は本年四十歳、一昨年米國から歸朝され、今年博士の榮冠を得られた斯道の大家である。現に瀧野川町會議員で王子腦病院長をしてゐる。震災前は三百人からの患者を病院に預つて居た。病院にして一度厄に遇つたならば此の多數患者の生命は忽ち危殆に陥るであらう。博士は之を憂へて二日の夜までは一步も外に出なかつた。幸と云ふべきであらう。瀧野川には火災も延びて來なかつた。大なる餘震も襲はなくなつた。内部の不安を除去された博士は奮然として外部の救済に全力を注ぐことになつた。

九月三日から約四十日の間、ゲートル姿で、肩から掛けた大きな鞆に様々の藥品や診療具を入れて

自分の病院の醫員を一二件つた博士は、到る所の罹災者收容所に現れた。病人と云はず、怪我人と云はず片つ端から手當を加へ、藥を與へて廻つた。重態の者と見れば直ぐ様古河邸の救療所へ連れて行つた。實際同町の救療所で取扱つた重患者の殆どすべては博士が拾ひ集めて來たものと云ふことが出来るのであつた。救療所に來ると押川君と協力して收容患者の手當をする。十月の半ば頃まで目まぐるしい迄に活躍奮闘せられたのであつた。

x

x

x

x

震災に關する救護状況の視察として各方面から當町に來訪する者が屢々あつた。其の都度町長は此の古河邸内の救療を紹介した。追々に上の方へも知られたものと見え、攝政宮殿下御使として桑田少將の御慰問を辱うし、有難き御言葉を賜つた。東伏見宮妃殿下には皇族御總代として古河邸に成らせられ、救療所を初め、バラック收容所に至るまで四時間にあつて親しく御慰問あらせられた。且つ衣類、御菓子等種々の御下賜まであつて齊しく其の光榮に感激した次第であつた。

榎本町長は一段と言葉に力を入れて

「世には富豪を以て何等公共の利益を圖ることなく、自己の幸福のみを念とする不徳漢であるかの如くに思ひ、彼等を以て社會の仇敵の如く視るものがない譯でもない。又不徳なる富豪のあるこ

とも事實である。然しながら我が澁澤子爵、古河男爵の如きは當に非常に於てのみならず、平素如何なる場合と雖も社會公共の爲に圖つて至らざるはない。眞に尊敬すべき富豪である。」と結んだ。篤志家の徳を稱へ、吏員、學校職員等の勞を謝し、部落團體の奉仕を喜んで餘す所がなかつたが、遂に一言自らを誇らなかつた榎本町長も亦尊敬すべき一人であると云ふべきであらう。

東京府北豐島郡澁野川町

● 月島に焼残つた一軒家

(一) 噂に高い防禦の人垣

焼拂はれた月島二號地の一角。隅田川を隔て、一號地に面する一角、其の一角に不思議にも助かつた一軒、しかも屋根に高く架けたる物干にさへ焼夷一つ受けないうで近所の不幸を氣の毒さうに見下ろしてゐる。

どうして助かつた……、實に不思議……、當家の主人稻垣末吉氏に聞いても「不思議」と答へるだけである。附近の噂によると「せめて稻垣さんのお宅だけは……」と、期せずして馳集つた防禦の人

垣に猛火も辟易して寄付けなかつたのだと傳へられて居る。どうも夫れが眞實らしい。我家は捨て、も「稻垣さんのお宅だけは……」と馳集つた美しい人の心は原因なくして生じたのでは無い。稻垣氏の人格とその人望とが然らしめたものである。稻垣氏の人望の低いことは事實である。而して其の人望は一時的の虚名ではない。其の徳望である。其の徳望の原因となるべき平素の功績は數へきれない程澤山ある。が、今は煩を避けて要點のみを列挙しておかう。

氏が大正十一年七月に東京市の第二方面委員長となつてから僅か半年も立たぬ間に公共の爲に投じた私財は貧民病者等の救済費(六百數十圓)浮浪者の給與金(日々二圓乃至十五圓)傷病者運搬用寢臺車施設費(二百二十二圓)貧民葬儀用略式儀裝車施設費(百四十五圓)等である。

尙遑つて大正六年頃から擧げると、感化院療兵院等各種の救済事業の賛助金(二萬數千圓)青年團圖書館の建設等一般公共事業の賛助金(六萬圓以上)である。苟も社會公共の爲になることと認めたる事業ならば氏の加名がもれたといふことは一回でもなかつた。以上は公共的表面的の事實であるが、更に私交的に又精神的に現はれざる裏面から盡してをる隱徳が何程あるか判らぬ。こんな事を總合して老へると、彼の防禦の人垣の噂の起るのも道理であつて、燒残つたのが當然であつたともいへるのである。

(二) 應急臨機の活動

地震の後で月島の最も心配したのは火事よりも津浪であつた。然るに幸にも津浪の難は免かれて、却つて火災の來襲を免がるゝことが出来なかつた。此の間に處せる氏の應急臨機の活動は平素の修養の致す所で有らうが、周密なる思慮と機敏なる行動とが最も秩序的に運ばれて、其の爲に島民の受けた恩恵は實に大なるものであつた。

地震の後の津浪のことは稻垣氏も眞つさきに心配した。併し、津浪に心を奪はれた島民が、ごつた返しの混亂で失火を起してはならぬと、注意は先づ火事に向つた。そこで氏は火の用心火元警戒を叫んで歩いた。

かくする間に廣場に殺倒する群集は無慮數萬に達せんとする形勢である。機敏な氏は直に炊出しの必要に氣が附いた。倉庫を開いて七十俵の米を提供し、警察の援助を受けて飢渴の難を免れしめた。今まで火の方では安全地帯と思つてゐた月島も、京橋方面から吹きつける烈風烈火の爲に二號地の食鹽倉庫に火の手が上がつた。氏は先頭に立ち島民の協力一致に訴へて防火に死力を盡したが、荒狂ふ火勢は容赦なく四方八方に燃え擴がつて島民の奮闘も今は施す術もなくなつた。島民は勿論川向ふから月島を安全地帯と目ざして渡つて來た。幾萬の避難者は、我先にと三號地目がけて活路を求めた

稻垣氏は家族や店員を逃がした後も踏止まつて活動を續けてゐた。其の中に危険は俄かに迫つて來たので氏は自家の土藏を閉鎖する暇もなく僅かに一二の重要書類をまとめたのみで逃さねばならなかつた。川岸まで行くと迷惑うた女子供が悲鳴を上げて助を呼んでゐる。それを認めた稻垣氏は早速商船學校の雲鷹丸に交渉して一隻のボートを借受け、火の雨を頭から浴びながら數百人を收容して雲鷹丸に運んで其の救助を依託し、自分は三號地へと避難したのであつた。

素人技師長

あはれ果敢なき殘骸の橋杭のみを殘せる元の濱島橋と相並んで二つの新しい假橋が、互に變災當時の功績を物語つてゐる、一は工兵橋（工兵隊が架けたから記者が勝手に附けた假名）一は稻垣橋（稻垣氏の功績の橋だから……）である。

三號地に押寄せてゐた十數萬の群集は火勢の衰へたのを見て各燒跡へと歸りを急いだ。併し三號地と二號地との連絡機關と頼める唯一の濱前橋は一日の夜早くも燒落ちてゐて幾らあせつても渡ることは出來ぬ。其の爲に起らんとせる大混亂大危難は生じた混雜と危険とは連日連夜の活動で綿の如く疲れた稻垣氏、しかも腸を傷めて出血さへ催うせる稻垣氏に暫くの休養をも許さなかつた。氏は決死の覺悟を以て活動を始めた。自ら素人技師長となり、素人技手素工夫の家族人夫十數人を指揮して架橋

工事に着手した。併し工具もなし、足場材料の準備もない此の工事、並々のことでは出來る筈はなかつたが赤誠の力は遂に一條の假橋を以て河の兩岸をつないだ。氏は先づ十數人の人夫を一時に乘せて其の耐重力を試みた後幾萬を數へる避難者に安全なる歸路を與えたのであつた。

災後の思慮畫策

二日になつて火勢は衰へた、稻垣氏は二號地へ歸つて來た。所がよもやと思つた自宅が一軒廣い燒野の中にボツリと残つてゐる。夢かとはかり驚いた。餘りの不思議に暫し茫然と立つてゐたがやがて是は全く神佛の加護に依るものであつて、天祐神助に感謝するの道は外には無い。殘る資産はいふもおろか身を粉にしても社會の爲に盡さねばならぬと堅い決心をいだいたのであつた。

收容と食料

收容問題は其の決心の出發點であつた、先づ自宅の座敷から廊下勝手の間まで全部を擧げて開放し又前の渡邊倉庫の廣場にもバラツクを急設して五百人以上の收容設備を整へた。家族人夫を毎日四方へ走らせて食料の用意も滞りなく勧めたが最も困つたのは飲料水の缺乏であつた。氏は自ら數人を督して石川島の造船所から日々幾十石の水を運ばせたが人に比例しては量が足らぬ。焦慮苦心の末に數隻の船を雇つて大川口の底に千三百三十餘貫の鉛管を延べ、築地から一號地と二號地へ直接飲料水を

引くことの設備に成功した。月島々民が水責から免れることを得たのは全くかくの如き苦策經營の賜物であつた。

風紀衛生上の注意

風紀衛生については殊に警察の力を借らねばならぬ、然るに晝夜のべつの活動で疲れに疲れた警察官には休養を取るべき屋根の下すら有ら得なかつた。氏は奥の二屋を提供してその休養所に充て食事萬端の世話まで引受けた。尙倉庫の一隅に十數坪の床を張つて假警察署の設備さへ整へた。

かくて警察と共同して風紀衛生にも十分の注意を拂つたが之について面白い話がある。六日の朝月島から區役所へ宛てゝ糞尿汲取の請求があつた。吏員は不審に思つた糞尿を汲取らんにも便所も悉く焼けてしまつた。此の際である。之は何かの間違であらうが、兎に角實地を調べて見ようと、行つて見て驚いた。土臺から柱も据ゑて、焼トタンながらも屋根まで張つた完全な共同便所が辻々に二十四ヶ所もあつた。こんな機敏な施設も稻垣氏が自宅から材料全體を提供して四五人の職工と共に晝夜兼行でやつた仕事であつたのだ。

痒い所に手の届く救済ぶり

氏の手によつて收容してゐた罹災者も八日から町會の手に移ることとなつた。其の際にも豫め郷里

から取寄せた二十俵の米と二百五十人分の夜具を夫々配給してやつた。又死亡者の爲に棺を與へる臨時焼場を設けて火葬の便を圖る、漂流死體の搬出をする、こんな事は毎日七人の人夫を四十日間も雇ひ入れたといふことである。其の外自分は失職者の口を探してやる傷病者の入院手續もしてやる中には喧嘩の調停にもたづさはるといふやうに何から何まで痒い所に手の届くやうな救済は今も尙土地の人の感謝の種に残る語草である。

東京市京橋區月島四河岸通六ノ八 稻垣末吉君

●揃ひも揃つた養父と養子

古着商店の本場として知られた柳原通の柳原橋の袂に「財團法人助葬會」といふ變つた標札を掲げた建物があつた。震災後も大急ぎでバラックを建て四臺の自動車を用意して事業を繼續してをる。事業の内容は會名だけでは一寸分りにくいが入口の廣告を見ると成る程とうなづかれる。

一、送葬無料

一、御申込ハ埋葬書入用

一、會葬者ハ八人マデ自動車ニ乗レマス

一、棺ハ一箇三圓八十錢

一、棺ハ御都合ニテ無料デ差上ゲマス

助葬會は此の廣告の示す通り一種の葬儀社である。しかし營利目的の葬儀社ではない。社會奉仕を目的とした慈善事業である。大正九年十一月の創立であつて、東龍關町十九番地で油の卸問屋を營んでゐる渡邊竹次郎君が、「人生の最終を弔ふべき大切な儀式も金の爲に四苦八苦の思ひを焦してをる」不遇者に寄せた同情の發露である。店の方は今は全く養子の末吉君(二十六)に譲つて自分は事務員一人を使つて専ら會務を取扱つてをる。創立以來君の同情によつて胸を撫でおろした人は實に二千五百餘人にも達し、震災後はすべて無料のこととて申込者の數は日に十件以上もあるといふことである。

君は又非常な精力家であつて三時間以上の睡眠をとらず、多忙な時は朝飯ぬきの午後飯となることは珍らしくない。そして其の勢力は周密なる思慮と注意によつて活躍し、其の活躍が絶えず公共慈善事業となつて表はれるのである。今回の震災の如き突差の場合にも君の精力思慮注意の三つが遺憾なく活躍してをる有様を見ることが出来る。

九月一日激震が靜まるや否や君は直ちに自動車の人となつて中央氣象臺に現はれた。そして強震の

心配はもうないことを確めた。やれ安心と胸を撫でおろすと共に第二の心配がまた君の胸を衝いてゐた。歸る自動車の中で策戦計畫は決定されたのであつた。

自動車から下りるや否や、店員三人を引牽し自ら先頭に立つて石油の空罐を打ちならし「火の用心／＼」と叫びながら近所近邊に注意を促し、更に視線を四方に配つて一寸の油断もしなかつた。併し他の方面に起つた火焰は容赦なく君の警戒線内へと押寄せて來た。機を見ることの敏き君は早くも火勢の容易ならぬことを悟つた。早速「危険／＼、逃げろ／＼、命が大事だ、一刻も躊躇するなと警告急告を連發して各自に活路を求めしめた。此のふ蔭である。此の方面に殆んど死傷者を出さなかつたことは。

かく周到なる注意と機敏なる警告を與へながら自宅の家業が油屋であるだけに一層其の警戒は嚴重にせねばならなかつた。家族を立退かせた後もなほ住みなれた家の最後を見届けるまではと、自分一人踏止まつてゐた。然るに荒狂ふ風勢火勢はいつの間にか君を重圍の中に陥し入れた。かかる際にも君の精力は決して挫けはしなかつた。君は忽ち靴のまゝ神田川へと身を躍らせて無難に向岸へ泳ぎついたのであつた。

更に震災後は附近の街路に總計千三百燭の電燈を點じて淋しき燒野が原の闇を照し、又附近にバラ

ツクの建築を奨励して早くも復興の氣分を引起すことに力めたのである。

養子末吉君は養父に劣らぬ見上げた男だ。震災の當日火災の危険が逼つて來たと見るや、自家の品物には一物も手を觸れず、營業上の貨物自動車四臺を提供して先づ隣近所の老人子供を乗せ、自ら自動車指揮して菩提寺（府下杉並村高圓寺の宗延寺）へ避難せしめた。さうして同寺並に附近に一家を借受け、毎日自動車を以て米味噌其の他の食料品を買集めて救護に力を盡したことは實に一箇月餘に涉つたのである。かゝる間に罹災地の見舞にも出かける、夜警の任務にも當るといふ始末で殆んど床にはいる暇はない。殊に初め一週間餘は靴をも脱がなかつたといふことである。

九月二日養父を尋ねんとて自宅の焼跡に向つた。途中神田明神の附近で瀕死の巡查部長を認めた。之を認めた君は疲れの身をも忘れ急ぎの用をも打捨て早速部長を自動車に救ひ上げ、大學病院の稲田内科に送り届けておいた。さうして來ると今度はお茶の水の近くで電信柱が盛んに燃えてゐた。之は危険と其の柱を倒して通行の安全を圖つて通り過ぎた。

震災後の自動車の忙がしいことはおびたゞしい。随つてガソリンの需要は激増したが供給は極めて拂底であつた。自動車を控えながら運轉が出来ないで困る人も出來た。元來君の店は卸賣專業であるが、公衆の便利を思ひ忽ち營業の方針を一變して小賣商を始めた。しかも自動車一臺につき五ガロン

以上罐入は一人一罐といふ制限の下に煩瑣極まる小賣商を始めたのである。目の廻るほど忙がしい此の際にわざ／＼煩瑣をもとめた君の苦心の程が思ひやられるではあるまいか。

神田區東龍關町十九番地

渡邊竹次郎君（五十六年）

同 末吉君（三十六年）

●十四歳の救世義勇團員一兒を救はんとして仆る

救世義勇團員（淺草分隊）小平善治君は、年漸く十四歳の可憐なる一少年である。一人の母と共に淺草に住んでゐた。九月一日の大地震の時、善治君は負傷して病院に運ばれ、其處で手當を受けた淺草小隊の小隊長は、暫らく善治君を看護してゐたが、外に氣がかりになることもあり、病院を立出たが、火の手がますます／＼擴り、其處にも居られなくなつて、隅田川に逃げたのであつた。

小隊長は他の戰友達を尋ね廻り、また本營の慰問隊に加り、多忙の中に數日を過しつゝも小平君のことが心配になり、燒跡を彼方此方と訪ね探してゐた。すると後から、「小隊長さんですか」と呼びかける者があつた。それが小平君の母であつた。一日以來の様子を聞いた所が、彼女は涙ながらに曰く

「火がだん／＼追つて來ますので、負傷した善治と私は、隅田川岸に避難しました。所が火の近づくに従つてとてもたまりかねて、他の人々と一緒に川に飛び込みました。私が死んでは怪我をしてゐる善治が可哀想だと思ひ、どうかして助る道もないかと思つてゐますと、幸ひ葛籠の蓋がありましたのでそれにつかまつてゐました。善治は水泳が出来ましたので、橋のところまで泳いでゆきました。善治はそれから病院で治療を受けましたが、夢うつゝのうちに「僕が初め足を痛めたのは、二人の子供を助けようとしてゐる間に、煉瓦が倒れて足を打たれたのです。子供達のことを構はず逃げれば自分は助かつたが、それでは子供達が可哀想だからと思つて逃げなかつたのです。その子供達の名は知つてゐるがそれをお母様にいへば、若しお母様の子供達を恨むといけないから、僕はいいなのです。」といふのはありませんか」と語つて母は涙を呑んだ。更に彼女は、「善治は時々軍歌を歌ひお祈りをしてゐましたが、病氣が重くなると、小隊長に會ひたひ會ひたひと申しました。クリスチャンの看護婦さんがゐて、大層感心しお醫者様も褒めてくださいました。善治は義勇團員としてよく働き、負傷して死んだのです。」とのことであつた。善治君は善良な少年であつた。母とたつた二人切りで暮しは貧しかつたがその中から貯金しては「平民の福音」などを買ひ求め、無名で人々に贈つたりしてゐた。近來は青年記録軍曹に任命されたり、少年ながらもよく盡してゐた。

和賀分隊長も善治君の平素の善行に感心し、表彰しようとしてゐたさうだがその事のない中に彼は負傷して此の世を去つたのだ。最も感心な人であつた。貧しい中から善治君の教育に心をこめた。自分の子を失つてからは、十二日間熱心に罹災兒童の世話をして、區役所からも褒められた。この親にしてこの兒あり、信仰の力の現はれは、まさしく世を救ふの光りであらふ。

市ヶ谷救世軍所屬 救世義勇團淺草分隊 小平 善治君 (十四年)

●慶應義塾大學醫學部の活動

大震災の突發當時慶應義塾大學病院には、三百六十名の收容患者と未だ診断を了へない外來患者が數百名もあつたので、病限職員は直ちに看護婦及雇傭人等を指揮して、先づ收容患者を總べて病院非常門外の運動場と東校舎脇の空地とに移し、外來患者の受診前の者又は投藥前の者には既納金の拂戻をなして自宅に引取らしむる等非常の混雜に陥つた。殊に收容患者には雨露を凌ぐべき設備が必要なので、偶々避難地域に建設しつゝあつた工業用貯材小屋の内部を取り片付けて之を本據として外に數ヶ所の天幕張帳舎を設けて假病室に充てて患者の救護に務めた。

病院患者の無事避難を了するや同院は直ちに救護班三班を組織して芝區愛宕町、麴町區清水谷公園及淺草公園に出動し、一般罹災傷病者の救護に着手した。是れ實に大震災突發後僅かに二時間後であつた。そして翌二日からは上野公園、東京驛前、淺草公園等に出動したが、大震災に次いで到る處に起つた大火災のため救護班も其の脅威する所となり、猛火裡に於いて頗る困難に陥つたことは一度や二度ではなかつた。之等の救護班は警視廳其の他と連絡を保つて進退したものであつた。けれども當時通信機關杜絶し警察署間の消息も全く絶えたため、日本堤署及び洲崎署等の如きは同院救護班の到達によつて漸く警視廳の罹災したことを知つたやうな譯である。この事によつても如何に同救護班の活動が敏活であつたかが察知せられる。

同院は又四谷區西信濃町に於ける本院表門内に救護所を設け別に診察部階上平面講堂及び東校舎病理細菌學教室に臨時病室を設けて傷病者の收容に務めたが、畏くも、國母陛下には九月三十日午後同院に臨御親しく收容傷病者を慰問あらせられた。

尙ほ危急に臨み大事を遺憾なく處理したことを記さねばならぬ。大震と同時に病院藥局第一研究室及び藥物學教室、細菌學教室、法醫學教室等の數個所に於いて備付けの藥壇が顛倒して、ために發煙又は發火の危険に遭遇した。けれども當該職員が直ちに常備の細砂及び泥土等を用ひて適當な消火手段を施したため、幸ひに大事に至らなかつた。市内の病院學校の主なるものが殆んど廢墟に歸した今日、獨り同醫學部が巍然として神宮外苑に其の勇姿を現はしてゐるのも決して偶然ではない。

同大學部の活動は單にそればかりではない。震災後に於ける警備についても、或は物資の蒐集についても他に例を見ることが出来ない。斯うした部分協同一致の活動が出来たのは、固より同大學部の平素の訓練宜しきに因るのであるが、一面同學部の職員及び雇傭人の全員が私事を犠牲にして公職に盡す責任觀念が極めて強いことを物語るものである。夫等部員の中には旬日を通して部内に宿泊して一回も自家を音づれなかつた者や或は災禍のために自己の居宅財産の全部又は大部を失つた者が七十餘名にも上つたのであつた。

●義 俠 な 醫 師

小俣君は生來義俠心に富み同情深く正義人道のためには、生命をも惜しまぬ程の奮闘的人物である。そればかりではない。君は觀音菩薩を信する救世教を信じてゐる。(慈悲である阿彌陀佛の御心の開けた御すがたが即ち觀世音菩薩である)。半自力半他力で自利則利他圓滿中道の實行者たらんとする

深い強い信念を持つてゐる。それは、救世教の説教は好んで話しもすれば聴きもする。

其の家庭は妻富子との間に長子博(十八)以下七人の子と代診齋藤樹六他に薬局生二人俤夫一人女中三人の大家族である。小俤君は女中俤夫に至るまでわが子同様に愛撫し、常に和氣霽々として見るものに羨やまるゝ程の家庭である。

九月一日午前十一時五十五分府會議員立候補者として政見發表についての電話をかけてゐた。此の時物凄しい一大音響が起つた。突然の強烈な地震のために薬局棚は顛倒し、薬品は散亂し、待合室の十數人の患者は狼狽する。家族は悲鳴をあげる。壁や瓦は落ちる。土煙はたつ。患者は勿論家族一同が全く混亂状態に陥つた。小俤君は瓦の落ち終るや「患者さん一刻も早く外に御逃げなさい。家族の者全部外に出ろ」と大聲をもつてはげました。醫員と患者が皆出た刹那、薬局はガタ／＼と七分通り倒潰してしまつた。沈着な小俤君は「火は消えたか」「もう誰も居らぬか」とその薬局から住居まで檢へ歩いた。

往來では「父様危い!! 先生危いです!!」と家族の者が狂氣の様に呼んだ。小俤君の大家族十六名は悉く着のみ着のままだが微傷さへ受けなくて避難し得た。夫人の注意で三人の女中たちは出る時に自分の衣類を包みながら出た。小俤君は家族の者に向つて「地震で壓死などの事があると末代まで

の恥である。物欲しさに家の中に決して這入つてはならぬと言渡した。そのために家財什器衣類は一物も持出さない。夫人が手提金庫一個と長男博が先祖の位牌を抱いてゐるばかりだ。兎角するうちに腦貧血の者裂傷打撲傷其他無數の老若男女は狂氣の如く集つて手當を乞ふ。或は子供の壓死體を抱き「蘇生さして下さい」と泣き叫ぶ。書生等は院長の命で疊二枚を路上に敷き窓から入つて往診靴と外科材料を漸く取出した。夫人長男長女悉く醫務員やら看護婦となつて應急の手當を加へた。夫人は哀れな二三の女子に金庫の中から金を手摺みにして與へた。約一時間に六七十名の手當を終つた。最早や土煙に加ふるに黒煙は濛々と四方に上り、猛火は忽ち起つて避難民が潮のやうに流れる、人心は戦々恟々たる有様となつてしまつた。既に水道も断たれ消防手は手も足も出せない。

運を天にまかせて安全地帯を求むるより外に道はない。本所一帯：火は風を呼び風は火を呼んで見る見る中に火の海となる。其凄愴悲惨なる中を南東の錦糸堀に進んだ忽ち人の波にすひ込まれた。その中にあつて本横小學校訓導夫婦をも保護しながら同勢十八人の大部隊を指揮して本所病院から電車鐵橋を渡つて府下龜戸町に避難した。其間、烈風と猛火の中を聲を勵まして、倒れば引き起し、後ればこれを押し、相呼び相應じて焼死や窒息から免れ得た。小俤君一行より五分後れたものは錦糸町一面の死屍累々といふ凄愴悲惨の有様となつてしまつた。此の一團は龜戸の醫師鈴木淺吉君宅を訪づ

れて一夜を明かした。翌二日は龜戸町柳島八番地下河原氏宅に赴き協議の上、傷病者救護所を急設した。そこで十八人の一團は女中に至るまで救護員となつた。火傷負傷其他の患者は無数に集る。これを懇切に献身的に救護し、手當を加へた。その奮闘その努力その同情ある活動に對しては、患者一同涙ながらに合掌して感謝の意を表した。

斯うして小俣院長初め一家族のものは、一日避難以來不眠不休哀れな傷病者をいたはつた。まるで戦場のやうな有様であつた。自己の衣食住總べてを焼き盡された事などは全く忘れてゐた様であつた。只長女が結婚話もそろ／＼ある様になつたので既に多少の調度もした。それを長女が「涙を流してせめてあれ丈でもあれば」と物語る。けれども夫人は「生きてさへ居れば」と娘を慰めてゐたが、やはり涙はとゞめ得なかつた。二日の午後焦熱地獄と化した本所深川は、未だ餘炎強く人々は止まる事が出来なかつた。漸く奇蹟的に川や橋の下で九死に一生を得たものが龜戸に入らうとして天神橋まで數百人押寄せて來たところが警官はこれを拒止して暴力を逞うした。このことを聞き知つた本所の佐倉宗五郎を以て自任する小俣君は烈火の如く怒り「人民保護の任に在る警官が非常識な事をするもの哉飢えに加ふるに不眠不休のために疲勞の極に達した罹災民を見殺にするのかと大いに憤慨して直ぐに天神橋まで行つた。市民の代表となつて警官に注意を與へ、之れと交渉して無事罹災民を通過させた

四日以後は市役所に區役所に寸暇もない活動をつづけた。市の救護所完成に及ぶや、龜戸町長等の意向もあるので、患者を悉く徐々に送つた。此の間小俣君一團の治療手當者約二千四百餘名に及んだ。漸やく患者と離れ、假住居を求めて龜戸三千九十三番地を借りた。されど住むに何物も持たない。それに子煩悩な小俣君も七人の子女總べてを或は親戚に、或は知己に、此處に一人彼處に二人と托した。そして君は、「手足まといの子供等が離れて自由の活動が出来る」と喜んだ。けれども側に居た夫人は萬感胸にあふれて涙にくれた。

區民や市民のために勇奮努力東奔西走席の暖まる暇もない。罹災同業者を市救護所や警視廳に推薦し、彼等の生活安定をはかり、其他警察人事相談部の如く尋ね來る者に對しては大切に同情ある指導を與へ、或は連署し、或は保護し、又は證明し、繁雜なる仕事も意に介せずよく處理してゐた。

今は假住居を吾孀請地七九三に移し、末子武男(六歳)一人を呼び戻してゐるが、繁忙な公務のために活動する傍ら罹災民に對し無料診察の需に應じてゐる。

本所區横川町五十番地 醫師 小俣 政 一君 (四十五年)

●焦土に輝く希望社の活動

上野の山がまだ三萬餘人の罹災者で充たされて居た九月五日、博物館前に天幕張の粗末な事務所を設けて婦人を大部分の働き手にして救護班が出来た。辛うじて饑餓に堪え得るだけの食物は與へられ、野菜の不足はどうすることも出来なかつた。かゝる際に此の救護班では、先づ山のやうに蒸かした馬鈴薯を貨物自動車に満載して来て、腹一杯五錢の廉價で供給するのであつた。勿論金を有たぬ人々には吝しきすいくらでも旋して居た。強い者が弱い者を、疲れぬ人が疲れた人を、有るものが無いものに、互に美しく扶け合つた人情美の現はれも災後三日とは續かなかつた。飢が充たされると所有慾が頭を擡げる。乞食氣分に加へて、掠奪氣分さへ現はれ始めた。このごろの傾向に多大の悲痛と憂憤に戦いた後藤靜香君は、其の主幹する希望社の全力を傾注して、單なる物的救護のみでなく、豫ねての主張及び國家的倫理運動を起すべき絶好の機會として、「帝都の復興は新日本内面生活の新建設であらねばならぬ」と奮ひ立つた。そしてすべてを此の大方針の下に縦横無盡の活動を開始したのである。

希望社は女性中心の社會教育機關であつて、多年修養團の幹事長として全國の青年に信頼の厚い後藤君が、大正七年以來心血を注いで苦心經營して居るところのものである。西大久保の希望社建築物は其の本營であり、月刊の冊子「希望」と「のぞみ」とは全國十六萬の女性を中心とする教化指導の教便物であつた。曠古の大災に臨んで百人に近き社員と共に、最も機敏にして、且つ適切有効な活動を實現したのも平素の用意と此の背景とを以て後藤君の信仰熱火の如きものがあつたからであらう。従つて其の凡べての事業には外に見られぬ異色があつた。今其の大要を摘記すれば左の如くである。

希望社の解放

希望社は事務所であり、講堂であり、女性の宿泊所である。四層の洋式建築には立派な施設がある。後藤君は先づ淀橋警察署に出頭して、罹災者の爲めに其の全部を解放提提せんことを申出た。自家門戸の解放が凡べての金品の供給に先立つべきものであることを事實に現はしたのであつた。

安らかなる憩ひの場所

新大久保富久町との路傍に澤山の椅子を並べて憩ひの場所を設けた。九月二日からである。若い婦人社員が心を傾けて悲惨な避難者を勞つた。飲料水と麥茶とビスケットと塵紙とが豊富に用意せられた。一枚の塵紙、一握のビスケットが疲れ果てた罹災者をいかに悦ばせたか。

戒嚴司令部から公報が出るたびに、其の重要事項を抜萃してこれに短評を加へた一枚刷の震災時報を手の届く限りに分配した。それは騰寫器で刷つたものであつたがまだ新聞一枚出ないとき一日一萬枚以上を無料で配つたのであつた。

野菜の提供

上野山の罹災者にジャガ薯の提供を始めたのも其の一つである。徹夜で蒸かして貨物自動車で運ぶ一人五錢は當時の原價の五分の一であつた。極力無料給與を避けて僅かでも代價を拂はしめたのは罹災民を乞食にせぬ後藤君の主張の根本方針であつたのである。

上野全山の美化作業

公園の便所は災後幾萬とも知れぬ避難者の前に餘りに貧弱であつた。滿地塵埃と糞便の山である。社員は連日山の掃除に苦勞した。

九月八日には有志を駆集めて奉仕掃除隊が組織せられ、九日からは「一時間労働」の提唱に臨時掃除人夫を募つて一人十錢の勞賃と若干の救助品とを報酬として與へ始めた。無爲に活き、配給に活きる氣分の打破と美化作業の習慣とを求めたのである。一般に掃除氣分が漲り籌賣りの商人まで現はれるやうになつた。

るやうになつた。

車を挽いた着物集めの娘達

全國からの寄贈の衣服も未だ間に合はぬとき、社員の若い娘達は旗を立てた荷を挽いて山の手の家々を廻り始めた。集まつた被服類は上野の山の最も困つた人達に最も早く配られた。

國民學校

食物と衣服との次は精神の教養である。九月十一日に趣意書を廻はし十二日に國民學校が開かれた美術學校内の林間である。野天の學校、生徒は毎日二百以上にも上つた。シャツ一枚の兒、はだしの娘、地震でこわれたまゝの髪、憐れな子供ばかりが、雜記帳と鉛筆と着物に履物までも與へられて思ひもよらぬ緊張した稽古ぶりを見せた。通りかゝりのものが「もう學校が始まつたのか」と驚異と感謝の眼をみはつた。此の種の應急教育の嚆矢であつた。

蠅の購入

災後の悪疫は最も恐ろしいものゝ一つである。不潔な上野の山には蠅が群がり生じた。汚物の掃除蠅の購入、初めは十疋一錢、後には百疋を五錢で買ふ。總計三十萬疋を買上げる。區は特別の補助金二百圓を交附した。

感謝労働の提唱

全国は勿論世界の同情を聚めた罹災者には感謝の念が湧かねばならぬ。希望社は「働かずんば食ふ勿れ」働いた上にも働いて又其の上にも一つ働け」二種の標語を掲げて感謝の労働を勤め、徒食と遊惰を誠しめるにつとめた。掃除隊を午後に増加して一時間十銭を報酬とする。勿論府市の請負仕事ではない。

野外教壇の發行

一致市民の目をひく全市各方面に墨痕鮮やかなポスターが貼り出された。

◆倒れたならば起て！

◆散る花を追ふ勿れ、

◆起つても倒るゝも奮闘又奮闘、

◆お互に不滅な仕事だけしよう。

◆新生涯が始まつた。

毎日修養上の文句を記して「野外教壇」が各方面のバラツクに配られた。

上野會館の設立

警視廳の理解と後援とは會館の給與となつて六十坪の建築が公園小松宮殿下御銅像の邊りに出來たのは十月の末であつた。粗末な建築の中から次の様な事實が生れ始めた。

- 一、修養講演會
- 二、勤勞女學校
- 三、音樂會其他の慰安會
- 四、圖書の閲覽
- 五、勞務者の研修會
- 六、バラツク生活の實狀調査
- 七、勞働者の安らかな宿泊
- 八、各種印刷物の配布

兒童の課外指導

滿二ヶ月で閉鎖した國民學校の教務主任松橋やす子女史の深切な指導の下に東京の不完全な小學校教育を補ふ●災兒童の課外指導が始められた。兒童の讀物も豊富に備へられた。

深川への擴張

取残されたやうな深川方面の爲にも希望社の手は伸びた。洲崎と黒船橋際とに上野と同じ様な事業が始まる。社員は大久保からの遠路を厭はず、毎日出て来ては粗末な天幕やバラックの中で又新しい事業を開拓した。

盲人救護班の組織

東京と横濱との両市から集つた盲人の爲めに明治神宮外苑のバラック内に希望社盲人救護班が新設せられて社員二人づゝ毎日詰切つて世話をやく、按摩や揉療治の廣告から點字の讀本を配るまで不幸な盲人の世話は手落なく行はれた。

蒲團の仕立て數萬枚

どこの婦人團體もしたことであつたが希望社の配給蒲團の仕立ては特に大規模に行はれた。夫れが悉く失業婦人の救済であり教育的訓練の作業であつた。日比谷、九段、新宿御苑、深川黒船町、大久保町の奉公堂、希望社本社の六ヶ所に一千人の婦人、貨物自動車十二臺、一萬七千枚のひきうけを毎日二千枚以上仕立上げながら、其の間に體操があり、音楽があり、講話があり、そして仕事の上には著しい能率があつた。希望社一流の訓練は、このやうな場合特に際立つて光彩を添ゆる。

秋の八千草を燒野に配る

焦土に住む人々の氣は焦ちがちであつた。市民は昂奮と神経衰弱にかゝつたかの様にも見え始めた十一月、後藤君は埼玉縣下安行猛附近の小學校長に交渉して自動車救護の秋草を集め、社の音楽教師原田女史其の他の慰問音楽班の自動車を添えて、バラック村、病院諸官省に、優しい花と音楽との慰問を提供して三日をそれに費やした。うけた人達の悦びは贅するまでもあるまい。

労働者を稿ふ女性

震災直後、博物館附近には、早朝職業紹介所の手に絶らねば職を得難い多數の労働者の夥しい群があつた。終夜を露天の地上に寝て翌朝の仕事を待つ姿は眞に可憐のものであつた。後藤君の下に立つた多くの女性は心から彼等に同情して、毎日茶菓を供してこれを慰めいたはつた、其の同情は遂に多大の信頼ともなり、又希望社のうどん屋開業ともなつて夥しい缺損を含んだ一杯五錢の大盛肉うどんは毎夜寒風に慄える労働者の無上の慰安となり、果ては手荷物物の委託、郵便物の取次、血と汗とをしぼつた勞銀貯金をさえも頼まるゝ間柄ともなつた。希望社の救護班は夜は労働者の本部であり、これが遂には上野會館をも産むことになつたのである。優さし女性が、對等な人尊い人間として應對する言語と動作と其の精神とは遂に労働者をして「此の世の中にもこんな人達が居たのか」と、熱々考へ始めさせたのであつた。貯金は増した。僅か十日間に一千三百圓の多額に上つた。後藤君と守屋東女

史との寄贈の毛布はいかに彼等を悦ばせたか、臨時宿泊所の博物館のまはりも朝は立派に掃除をせねば仕事に出ぬ迄になつた。今も其の大部分が會館の中に寝起して、真面目な研修と秩序ある動作とに參觀者を驚かして居るのは決して偶然ではないのである。

出張所

希望社の手は八方に伸びたが其の足溜りは

第一出張所 上野公園内

第二出張所 明治神宮外苑

第三出張所 深川洲崎消防署側

第四出張所 深川黒船町百號バラック

第五出張所 丸の内市役所前

の五ヶ所であつた。中でも丸の内は宏壯な三菱銀行をバラックとした喧噪醜絶な労働市、支那の苦力の群を見るやうな大混亂の労働者の群に割つて入つて、バラックの小屋を修道院の道場のやうに變化して、社員は労働者の「小母さん」であつた。毎夜朗誦がきこえる。國民體操が行はれる。國語や修身の教授が始まる、朝は嚴肅な遙拜の後に靜肅に仕事に出る、「夜學をやる」「貯金をする」「舍内で酒

をのまぬ」丈けを條件として、しかも每晚滿員の盛況を見たのであつた。丸の内は十二月末、其他も夫々閉鎖して今は上野丈けが午前中は授産場、午後は勤勞女學校、夕方は學務者研修會、夜は労働者の宿泊所として緊張した氣分と輝く光明とに繼續せられて居る。

○ 災後の救護事業として希望社の活動は眞に意義あり計劃ある理想的のものであつた。其の及ぼした効果も決して尠くはなかつたが其の投じた事業費も實費二萬三千九百餘圓の巨額に上つたといふことである。其の大部分が諸官廳の補助や富豪の寄附金等でなく全國幾千萬の年少婦女の精神的感動から湧出たものであることを知るとき、覺醒せる婦人の社會に及ぼす大きな影響に就いて考へぬものはないであらう。

東京府豊多摩郡大久保町西大久保二三六番地 希望社 後 藤 靜 香君

● 四十万の避難者が殺到した北豊島郡

九月一日の午後は未だ板橋邊では帝都にどの様な變化が起りつゝあつたかを知らなかつた。

郡長佐藤久太郎君も町内を巡視したが、たゞ強震であつたと感じたのみで何等の異状をも認めなかつたから一先づ帰宅した。所が夜に入つて東京府から自動車で迎を受けた。何事かと驚いて乗車して行くとのあの大事變。

「何よりも先に食糧をたのむ」

とあつたから、すぐ引返して玄米三百俵澤庵二十樽を郡内から徴集して送つた。併しその間に王子、尾久、三河島、南千住等には市内にも劣らぬ惨害が起つてゐたのである。

二日郡長は郡書記西尾武雄君と共に自動車に打乗り被害地に視察に出た。後に調査する所に依れば本郡の損害は之を市内十五區中に加へて比較する時は第八位に當り、而かも避難者の流入四十萬を超え、郡内人口の四十八萬は一躍八十八萬に達し、食糧配給を要せぬ者は農村住民約八萬に過ぎず、一人當に二合とするも一日約四千俵を要する状態にあつたのである。

三日郡長は吏員一同を集め、

「此の未曾有の大惨事に處しては、我等救護の任にある者は感激を以つて働かねばならぬ。我等の周到なる用意と迅速なる處置に依る合理的活動はよく數十萬の尊い人命を救ふのである。三分五分の着物の着換へ、食事の時間すらも節約せねばならぬ。」

と訓示し、救護事務規定を定め分掌を明かにして自らも着のみ着のまゝで十五日間一夜も帰宅せず、諸般の事務を指揮監督し、且つ常に食糧調達的第一線に立つて活動した。

北豊島郡震災救護事務處理規定

第一條 大正十二年九月一日ノ震災救護事務處理ノ爲左ノ係ヲ置ク

總務係 主任外六名

食糧配給係 主任、副主任外八名

災害町村係 主任、副主任外八名

警備係 主任 外四名

會計係 同 外二名

第二條 各擔任事務ノ概司左ノ如シ(下略)

第三條 各係ハ左記ノ事項ヲ遵守スベシ

- 一、罹災地ノ空前ノ不幸ニ同情シ、誠實、勤勉ヲ以テ擔任ノ事務ニ從事スルコト
- 二、各係間克ク連絡ヲ保チ事務進捗上、苟モ遺漏ナキヲ期スルコト
- 三、已ムヲ得ザル事故ノ爲、缺勤早退等ヲ爲ス時ハ擔任事務ニ付テハ他ノ係員ニ克ク引繼ヲ爲スベ

四、本規定ハ救護事務ノ全部終了スル迄其ノ効力アルモノトス
 第五條 各係員ノ氏名ハ別ニ之ヲ告示ス

かうして吏員は罹災者に满腔の同情を以て活動し、且つ各町村長との連絡もよく行はれ、町村長は又配下の事務を組織的にやつたのでさしもの大救護事業も一つの怨嗟なく結了する事が出来た。

此の間に在つて郡内二十ヶ町村への通信連絡に當つた給仕諸君の活動は一方でなかつた。午後十一時十二時迄もかゝつた會議の結果を翌朝午前六時迄には之を全郡へ、其の日の午前九時頃の各町村代表者の會合を可能にした如き實例は珍らしくなかつた。

又町村吏員、名譽職等の奮闘も極度に緊張し、岩淵町稅務主任書記杉本勘之助君の如きは本所區に住し長男は瀕死の大火傷を負ひ、三男はその死體すら發見せられぬ状態にありながら依然として出勤し敢て公務を缺かさなかつた。此の如きは實に本郡の人々の活動の一端を語る美績の一つである。

●羽田町在郷軍人分會並に青年團の活動

(一) 親睦和合

分會長高津眞亮君の率ゆる六百餘名の在郷軍人會羽田分會と、理事長吉澤榮一郎君の率ゆる一千餘名の羽田町青年團とは、從來共に十五班に分れ、幹部の大部分は兩會の幹部を兼ねてゐた關係上、互に親睦會和合し、或は青年の指導に、或は人心の作興に著しい成績を擧げて來た。

(二) 物資陸揚

地盤軟柔な羽田町は九月一日震災を受けて、電柱は倒れ地割生じ堤防は缺壊し、住民は餘震を恐れ、皆沿岸の船中に避難した。

青年團在郷軍人分會は、各班に通知し、部署を定めて、九月一日の午後三時より、警戒、救護、堤防の修理等に餘念なかつた。

九月五日の午前一時三十分、東京府屬、荏原郡長等の一行を載せた一臺の自動車は、大鳥居前に着し、町長と分會長とに面會を求めた。用件は

「明朝芝浦に物資が到着するが、羽田町を除いた東京灣沿岸には陸揚の船がなく、困つてゐるから萬難を排して明朝より芝浦に船を出して、大いに奮闘しては貰へまいか。」とのことであつた。

分會長は直ちに快諾、午前二時各班長を召集、各班毎に各三、四艘宛の砂利船を準備し、在郷軍人青年團員を十四五名宛分乗せしめ、午前五時海老取川の下流に集合すべきことを命じた。

併し、船は各所に分散してゐたので、集め得たのは漸く二十八艘であつた。各船には船頭及び兩會員二十名乃至三十名を乗組せしめ、二艘の發動汽船に曳かれて芝浦に到着し、扇海丸積載の物資陸揚を手傳ひ、羽田町への配給品白米百俵、野菜二百貫、其の他を積込んで歸つた。それまでは羽田町には配給がなかつたのであるから、是れに依つて、羽田町の住民並に避難民の命脈を漸くつなぐことゝなつたのである。

兩會員は不眠不休、翌六日も芝浦に航して備後丸の陸揚に盡力し、白米三百俵、麥粉千袋を配給品として受取つて歸り、其の後は船と船頭のみを提供し、又隔日に芝浦に航して配給品を受取つたが、漸次糧食充實し、九月二十二日より、馬力三臺を以て品川、大井等より陸路運搬の道が開けたので、其のことは止んだが、羽田二千八百餘戸の住民と、幾多收容の避難民との飢餓を救つたのは、兩會員活動の力に依つたのである。

(三) 堤防修理

震災後の羽田町は土地低下し、海水干満の差は大となり、繋船場は一變した。鈴木新田、桃谷、入

船、朝日、南前耕地等の堤防は、各所に缺壊を生じ、九月末に至りては海水侵入して、殆んど戸數の三分の二は浸水家屋となり避難民は蒲田方面に去らねばならぬ有様となつた。

吉澤町長は大いに是れを憂へ、人夫を得るに困難し一戸一人宛を出さしめて、堤防の應急工事に着手せんとしたが、指揮命令徹底せずして解散し、更に改めて此の大事業を、軍人分會と青年團とに依頼したのであつた。

兩會は直ちに是も快諾し、九月二十六日より交互に出でて、半數は警戒、救護等に當り半數は干潮時を待つて砂俵をつくり、必死堤防の修理に努め、十月二日全く應急工事を完成したのである。

(四) 漂着死體の收容と漂流木材の整理

九月二十三日より十月十八日までの間には羽田沿岸には、死體と木材とが漂着して來た。木材は巨大なものばかりで、堤防を破壊し、船を破り、或は船の通路を塞ぐ等の被害甚大なるを以て、亦も兩會員は協力沿岸に出動して、木材を整理し、又水上警察署を扶けて、六拾餘名の漂着死體を收容し、三箇所に厚く合葬したのである。

(五) 謝意と追悼會

在郷軍人會羽田町青年團との功績を多とし、羽田町は金六百圓を出して、其の勞を慰めた。兩會は

協議の結果其の金を十五班に分ち、本箱と圖書とを購入して、將來讀書熱を鼓吹する計劃だといふ。十二月二日には漂着死者の爲に厚く追悼會を催した。

荏原郡羽田町羽田一六四七番地 賀米穀商 高津真亮君 (三十三年)
 帝國在郷軍人會羽田分會 代表者 分會長
 荏原郡羽田町羽田一六一九番地 米酒類商 吉澤榮一郎君 (三十年)
 羽田町青年團 代表者 理事長

●慘狀を目撃して猛然立てる一小學校長と職員

深川區靈岸小學校長椎名龍徳君は明治四十二年の青山師範學校の二部出身で、本年四月特に市から拔擢された少壯校長である。君は訓導時代から富川町の細民救済に心よりの同情を持ち、その施設研究にもなか／＼肯綮に觸れたものがあつた。殊に機を見るに敏な君の社會的活動に至つては到底同輩の追従を許さぬものがあつた。果せるかな這般の大震災火災に際し、君の個性は文字通りに展開され、所謂新進教育者としての活動を示し、到る處から激賞され、平素よりの持論をより有辯に裏書したのであつた。左に其の二三を紹介することとする。

一、率先衣類を募集し深川一圓の罹災者に配付す

君の古着募集の動機が面白い。それは丁度君が二日に焦土の學校を訪れ、あたりの寺院の災害や岩崎公園内の罹災者を巡視した時のことである。身にはシャツ一枚をまとへるもの、菰をまいてゐるもの、母の腰巻につままれてゐる子供、さてはお腰のない婦人など、憐れな光景が夫から夫へと眼にうつした。「これではいかん、折角逃げのびた尊い人命をあたに飢餓と寒さとで又々失ふことになる。」と痛く打たれたのであつた。

四日には早速集つた職員と會議を開き、「危機に頻せる罹災者を如何にして救助すべきか」について考究した。處が、結局微力な小學教員として給食問題の如きは到底資力の許す問題でない。そこで我々の勞力で而も救済の實を擧げ得る衣類の方面に手を着け様といふ事になつた。校長はこの事を市學務課にも謀つて賛助を得、愈々活動の幕は開かれた。幸にも職員の家で印刷を業としてゐたものが災害の多い小石川音羽町にあつたので、そこへ職員の大勢がのり込んで古着募集のビラ三萬枚を徹宵して刷つた。これが活動の手始めであつた。それから巢鴨宮仲町、下落合村、關口町、音羽町の四ヶ所(何れも職員の住宅)へ事務所を設け、職員も四方に分れ大々的に活動を始めた。

平素なら世人もあざ笑つたであらうに、時が時、震災後の人の心には實に美しい同情心があふれてゐた。古着は見る／＼中に山程も集められた。中には態々持つて来てくれる奥さん方もあるといつた

風で、月の終には實に一萬二千枚といふ好成绩を示したのであつた。市からはトラックが貸與され集つた衣類は片端から配給に當てられた。深川一圓の薄俸の罹災者がこの美舉にどの位感謝の涙を捧げたかは、何人も容易に想像し得る事であらう。

二、草鞋履きで蠟燭を買ひ集む

強震後の東京は全く暗黒の夜續きであつた。それも一日から三日迄は、あのろひの火が天も地も焼いて恐ろしい焰の光は四方を染めてゐた。けれどもそれからといふものは處によると月の末まで眞の闇續きとなつた。闇！闇！何事が起るだらう。雷に不逞の徒の暴舉のみではない。人間の醜い一面が臆面もなく現はれる時である。市中の蠟燭は買ひ占められ、或は自警團に徵發され、トラックの細民などには一本だつてあたる氣遣ひはなかつた。

この状況を目撃した椎名校長と近藤訓導の二人は、草鞋履きで九日の朝から隣接郡部の荒物商を涉り歩いて蠟燭を集めた。到る處の商店は何れも警戒してなか／＼賣つてくれぬ。二本三本と買ふのも實に容易な苦心でない。それを頭を下げ聲を囁らして實狀を訴へ、僅かづゝ惠まらるゝ様にして分けて貰つた。夜の十一時近く迄も歩き續けて漸く三百五十本を集めた。

二人は非常に喜んで翌日バラック民を訪れ、一二本づゝ分け與へて、辛くもあの危機を凌ぐ資とし

たのであつた。

三、深川救護班を組織して救済に力む

氣懸りの給食問題は機敏な當局の手で事なく解決され、六日にはもう六十萬石の米が軍艦で運ばれて人々の不安も拭はれた。間もなく府から市、市から區、區から町會といつた道を経て、一日一人二合宛の玄米が渡された。平素から口の奢つてゐた市民がこの玄米飯を食ふことは可成りの苦痛であつた。けれども生死の境であつたので強きも弱きも皆我慢をして食へた。處が遽かに下痢患者が續出した。深川の地は災害のひどい割合に救護の手が廻りかねた。警視廳よりの「惡疫流行注意せよ」の宣傳ビラはすつと／＼後に貼られたのであつた。靈岸小學校では現實の病人を其の儘見るに忍びず、早速櫛引衛生係を中心とした衛生班が組織され、先づ下痢止「ビスケット」を持つてバラックを訪れ、患者の一人々々に飲ませて歩いた。同時に東京日々新聞の巡回病院へ特使を派して救護を求めた。流石は社會の耳目を以て自任せる新聞社、好意を持つて特に深川救護班と命名して醫師看護婦を派遣してくれらることになつた。かくして月の八日からは深川救護班として愈々活動を開始したのであつた。

人事相談所を設け細民を救ふ

晒木綿に「靈岸小學校人事相談所」と墨痕あざやかに記した旗が焼跡にひら／＼動いてゐる。そ

こへ無智な細民が學校の先生だといふので、一層の信頼を以て或は貯金の事につき、或は死亡届の事につき、或は簡易保険又は迷兒さては傷病者の入院手續等について聞きに来るのであつた。學校では夫々親切に教へてやり或は人によつては態々病院まで伴れて行つて入院の手續きをしてやるといつた風な時宜に適した活動をしたのであつた。

深川區盤岸小學校 校長 椎名龍徳君 (卅五年)

同校職員

●役所、學校、その他諸團體の活動

役所、學校、町會、青年團、在郷軍人會等の活動、特に救護事業に關する活動は壯烈を極め、悉く之を記せば、全卷を覆ふも尙足らざるを覺ゆるであらう本書は僅かにその特殊的なる數例を揚げ得たるのみ、讀者は、幸に之によつて市の内外に於ける白熱的活動に想倒せられんことを望む。

●犬童醫師の活動

一日から同君の活動を記せば左の如くである。

一日、第一震と同時に外科材料その他を携へて、悲鳴を擧げてゐる近隣傷病者の應急手當をした。横寺町三十三番地龍門寺境内に臨時救療所を設け、一般傷病者の治療に従事した。齒科醫金子有憲、帝大生筒江功君、代々木澄君等も之が助手となつて活動し、同町青年有志等はチョコクを以て處々に療養所の所在を知らせ、大いに宣傳に努めた。かくして同所の治療は二日より十五日にまで及んだ。それから十月上旬まで自宅に於て治療を續けた。

同氏が頭初より約一ヶ月間に渡つて、應急治療をなした患者の數は延五百四十餘名にして、その内重傷者重病者は衛戍病院近衛病院へ送る等その活動は實に目覺しいものがある。尙同君が經營せる白道社の規定は次の如くである。

- 一、妊婦の診察並分娩の無料取扱
- 二、傷病者の診察並治療の無料取扱
- 三、葬式の無料取扱又は其の費用補助
- 四、其他必要なる施設

牛込區横寺町八番地 同業醫 犬童 人二君 (四十一年)

●主人に代つて傷病者を救護した醫師の妻

深川區伊勢崎町三十四番地に醫院を開いてゐた西川文夫君は、大震の當時往診に出て不在であつた家には夫人のヒサ子(三七)と代診の佐藤信三(三三)の二人がゐた。

激震による家屋の倒壊、それに伴ふ火災の被害によつて、負傷者が續出した。それ等の負傷者は相次いで醫師の門を叩いたけれども、同じやうに地震と火災に脅威された醫師たちは、たゞ自己を守るにのみ急で、他人にまで手を伸すことが出来なかつた。然るに西川夫人は徳義の心の強い人であつたから、本當に醫師の本分はかゝる場合にこそ發揮せらるべきものであるとし、自ら代診の佐藤君と共に應急手當を開始した。勿論無料である。

西川さんの親切な治療を受けた人たちは、みな喜んで歸つて行つた。それを聞き傳へると、後からくゝと氣の毒な負傷者が押しかけて來た。西川さんでは其の總てに對して懇切な治療をする。而も患者は家の中から電車通りへ溢れるほど一杯になつて終つた。そこで、スグ近くの岩崎遊園に診療所を移すことにした。そこは火に對して尙ほ比較的安全な地點であつたからである。夫人はそこで必死に

患者の救療に力めた結果、午後二時から五時までの間に七十五名の救護を全うした。患者の中で最も多かつたのは、火熱のために結膜炎を起したもので、さうした俄盲目の人たちが一列に並んで、夫人たちの救ひの手を求める。有様は見るも哀れな姿であつた。けれども、限りある藥品其他の材料は、五時頃になると全く盡きてしまつた。水道も絶えてしまつた。最早、施すべき術を失つたので、止むなく治療を中止し安全な方面を尋ねて避難する外なかつたのである。

かうして夫人たちの働いて居る間に、火の手は遠慮なしに延びてきて、僅かの家財を出したまゝ、西川君の住居は全焼して終つたのである。

本籍 東京市深川區伊勢崎町三十四番地
現住 市外千駄谷原宿
西川 ヒ サ子 (三十七年)

●八尾醫師自宅の焼跡にバラツクを設けて施療す

九月一日午後十時頃八尾醫院は猛火に包まれた。八尾君は危険なりと見るや、家族八人を引き連れて安全地帯である岩崎邸に避難した。茲には既に下谷、本郷方面から何萬と云ふ避難者が集つて、非常の混雜をしてゐた。二日は頗る不安の有様で此邸内に過した。三日午前二時頃松坂屋が燃え、更に

下谷仲町通りへ延焼した爲に、一層の危険と混雑とを來した。之れが爲に避難者中には火傷、負傷又は急性胃腸加答兒等急救治療を要する者が甚だ多く出來た。幸逃げ出す時持ち出した抱鞆があつたら、其れに依つて多數患者の注射や、一切の應急手當を施した。

八尾君は茲では不便が多いので、五日に田端道灌山に住む友人林政太郎君の家まで避難した。同君の厚意に依て、初めて氣を休め寝につくことが出來た。氏はこゝでいろ／＼と考へた結果、焼跡にバラックを立て、其所で罹災者救済の爲に働かうと決心した。此際一心に働かさへすれば、過去の悲惨な追憶などは忘れるに相違無い。其上罹災者救護事業も出來一舉兩徳であると考へた。

案は出來た。しかしどうしてバラックを立てよう。其費用は何所より出し得るか。全く當がないので一時は悲憤の涙にくれた。其時ふと思ひ付いたのは、女中濫澤ハル(三十二)の懐である。ハルは八年前から雇はれ、着實につましく働いてゐたから、若干の貯金はあるに相違無と思つて早速話して見ると、虎の子の様に大切にしておいた百圓を心持よく貸してくれた。一文無となつた八尾君の喜は一通りでなかつたけれどもよく考へると、これ丈の金子ではバラックも出來ぬ。そこで更に計畫を立て直した。

翌日本郷區長尾川幾太郎君を訪ね、テント借用の件を談して見た。丁度其時區内誠之小學校増築工

事中であつたが一寸工事中止の爲不用の物があつたので、貸すことを承諾してくれた。

大騒最中であるから人夫は無い。書生赤崎早等(二十歳)と共に荷車を以て運搬し、早速焼跡に張らんと企てた。けれども二十餘坪もある大テントであつたから、其張杭だけでも多額の金子を要する。其上大工の手間も無かつたから、止むなく更に机一脚を借用し露天で六日から無料診療所を開設した患者は來る、そして日増に多くなる。テントも十二日になつて漸く覆はられた。此間の苦心はとても想像のつかぬ程であつた。

一難去れば又一難生じた。即ち醫藥と材料の缺乏を來した。其時上野公園に、新潟醫科大學の救護班があつて、知人が來てゐることが知れた。そこで之れによつて僅ながらも材料の補給が出來たけれども甚だ不足であつた爲帝大醫科大學に行つて交渉して見た。けれども其手續が面倒の爲に中止した。そして困つてゐる所へ、天の恵か、大日本日蓮主義青年團(小石川區高田町雜司ヶ谷龜原六十番地)若人社長妹尾萬郎君が之を知る所となつた。

若人社は頗る真面目な人の集合であつて、此度の震災とともに、地方の社員と力を合せ、多くの材料を得て、本所岩崎邸内に避難してゐた罹災者に對し熱心に救護してゐた。けれども尙材料には餘裕があつたので、夫れを最も有効なる方面に使用したいと考へてゐた。其時丁度八尾三郎君が個人で無

料診療所を開設してゐる。記事が東京日日新聞に記載されたのを見るや、直に其れに共鳴して妹尾萬郎君は八尾君に非常に親切なる書面を送つて材料提供の事を申し込んだ。之れを知つた八尾君は飛び立たんばかりに喜んで、直に其厚意を謝する旨を書面に認めて送つた。すると早速材料と薬品を車に満載し若人社員に挽かして、態々八尾君の宅迄届けてくれた。

八尾君は其の贈られたる材料に依て大に力を得益々救護施療の業に猛進することが出来た。九月中に施療患者一千百四十七人の多數に登つた。十月となつて七百三十二人其以後は思召によつて治療をしてゐる。君の爲に生命を救はれ態々禮に來た者や、鄭重なる禮状を送つた者も澤山にあつた。

八尾君は只單に之等の施療事業に従事したのみでない。多忙の餘暇を以て町内睦會幹事となり、配給の事業にも力を盡し、罹災者の爲には献心的に活動したのである。

本郷區湯島天神町一丁目九十四番地 醫師 八尾三郎君 (四十六年)

● 永井醫師學校に避難して誠意診療に盡力す

大正十二年九月一日、正午俄然大地震起り續いて未曾有の大火災を起し、帝都は宛然一大修羅場と

變じ、殊に淺草本所深川の方面は慘鼻の極を盡し、慘憺たる光景は見る者をして戰慄せしめた。此大變の突發するや、本郷區南部一帯の町も終に猛火の襲ふ所となつて、見る／＼焦土と化してしまつた。之れに隣接してゐながらも、其災厄を免れた、本郷小學校は、二日の朝から學校及び其附近に避難せる者を收容し、其數實に一千六百七十有餘人となつた。

教室は勿論のこと、廊下、倉庫、小使室、入口等に至るまで、居らるゝ所は悉く占居してしまつた。夫等の避難者は、食を欠き、睡眠もせず、疲勞は其極度に達し、水道の斷水、塵埃汚物、糞便等の處置不充分なる上に、寢具の缺乏、飲食物の變調等は避難者の衛生状態を著しく不良ならしめ、茲に病者續出の傾向を示し、不安の状態は刻一刻に迫つて來た。

此時自ら罹災者であり乍ら、避難者に深き同情を寄せ、私事を抛擲し献身的努力によつて、其危険の状態を救ひ得たるは、實に本校囑託醫永井覺次郎君である。

永井覺次郎君(五十四)は本郷春木町二丁目二十七番地に住み、大正十二年四月から本郷小學校校醫を囑託せられてゐた。

九月一日午後四時頃、全家は焼失して一時附近の麟祥院に立退いたが、二日から本郷小學校に家族八人を連れて、避難することになつた。其時老體の母せい子さん八十七歳は、此災禍が如何様に發展

するやも知れなかつたから、駒込神明町の親戚に避難せしめ、残りの者は全部同校教室の一隅に陣取り、机を並べて、ベットに代用してゐた。

多数の避難者中には種々様々の病人も出来た。因て學校の衛生室を醫務室に當て、助手もなく看護婦もなく只一人で、直に診療投薬を始めた。重患者又は、手術を要する様な病者は、之れを直に大學病院若しくは池の端東京市臨時救護所に送附して、其所に適當なる治療を依頼することにした。又傳染病或は肺結核の如き、恐るべきものに特に注意して、危険を未然に防ぎ其他消毒に、健康診断にあらゆる方面に活動して、三日までは一睡もされなかつた。四日の夜は、種々なる患者が續出して一夜に七回も呼び起されたが、其度毎に直飛び起きて少しも厭はないで親切に診療してくれた。

區專任教醫、砂田、長谷川兩君も時に來診されたが永井君の努力を見て安心して歸つた。警視廳や警察の衛生官の巡視もあつたが何れも感心された。本校は區内としても最も多数の罹災者を收容せるにも係らず其衛生状態の斯くも優れて良かつたのは之れ全く永井君の努力に依つたものである。

永井君は家族が多くて、一同が學校に永く世話になるのを、遠慮して龜井戸村に家を借りて一時家族を其所へ移した。けれども、其れを顧みることも出来ず、自分は獨り學校に止まつて診療の事に誠意従事してゐた。着物も逃げ出すときに着けてゐた夏の白服一着のみ、着のみ着のまゝ、夜も脱ぐこ

となく着通して十日の夜まで過した。克く困苦缺乏に堪え、罹災者の爲に献身的努力を續けた。其内一度龜井戸に移つた。家族も其不便に不堪再び本郷眞砂町に引き移つた。其頃になつて、始めて學校避難者も、いくらか落付いて來た。永井君も漸く安心して自家に移り、以後は辨當持參でいつも早朝から日暮まで本郷小學校に通ひ續けた。友人某醫師の如きは、此際全く金にならぬ仕事は馬鹿氣である、警視廳醫となれば月二百圓の俸給は取れる。或は日に拾圓の手當は貰はれる所もある等申されたけれども永井氏は頑として其等の事に耳を傾けず、只々學校に避難してゐる者の診療の外何事も思はなかつた。斯くして家を忘れ利益に離れ、學校に罹災者の居る間、五十有餘日間一日の休養もなく、誠意罹災者診療に従事し診療の延人員は五百三十七名に及び之に學校兒童の健康診断を加ふれば殆んど二千名に達した。其功績は實に偉大なものである。

本籍地 群馬縣北甘樂郡小牧村 東京市本郷小學校囑託校醫 永井覺次郎君 (五十四年)
現住地 東京市本郷區春木町二ノ二七

● 負傷者のために家財を見棄てる

博士は京橋區南横町に病院を持つて居たが。震災當日星製藥店員某が戸板に載せられて運ばれて來

た餘震が尙ほ激しかったので屋内は危険と見て横町小學校の裏の空地に筵を敷いて手當をして居ると後からくくと患者がつめかけて来る。

初は博士一人で手當をして居たが、其の中に看護婦が加はり、遂には奥さんまで褌掛けで應援に出る有様であつた。

かうしてゐる間に火災は四方に起り、京橋區内も危険に瀕し、

「早く避難せよ、く〜。」

との聲が此處彼處から聞えて来る。しかし眼前に多數の患者を控えて居る博士はこれを見捨てるに忍びなかつた。患者中には擔はれて居る間に戸板の上で死んで来る者さへあつた。

日は暮れかゝつた。外に手當をする人がない博士は先づ子供を先に宮城前に逃げさせ、尙ほも手當を續けた。その時附近の小兒科の近藤さんが手傳つてくれた。施療した人員は五六十名に及んだ。もとより特別の用意があつたわけでないから遂に材料も盡きてしまつた。

此の時はもう逃路は只、鍛冶橋一つとなつて居た。博士は残りの家族全部と患者とを引連れて先に子供の行つてゐる宮城前に避難したが其の夜の十二時頃家は焼けて一物も残らなかつた。

二日の夕方まであの廣場に居たが、其の夜家族、看護婦に患者五人を加へた二十名の大勢で麻布宮

村町石川氏の宅に避難した。

博士は今前記原町一四四に假病院を設けてゐるが當時の激務に膝、足の關節に病を得て十月の六日頃から一ヶ月半餘も床に就いて居た。

小石川區原町一四四番地 醫學博士 坂 上 弘 藏君 (五十二年)

●醫師の活動に就いて

「醫は仁術なり」との古語にそむかず、今回の大震火災に際して市内に於ける、醫師或は醫師會の活動は實に目覺しかつた。こゝには其の一々を擧げることが出来ないのを遺憾とする。

●赤化防止團の男性的努力

赤化防止團茲には赤化防止團が如何なる團體であるか。平素如何なる行動を執つてゐるかを詮議立てるのではない。未曾有の大震災に當つて彼等が爲したる男性的の努力を紹介するに過ぎない。

赤化防止團の本部は赤坂區田町三丁目八番地にある。本部は地震の爲め半ば倒潰したが、何等之を顧みるところは無かつた。居合はせた三十名許の青年は直ちに全部出動して、或は人命救助をなし或は避難者の運搬をなし、更に炊出をなし、玄米湯の接待をなし、尙ほ進んでは附近邸宅の開放を交渉する等最も機敏に最も男らしき活動を續けたのであつた。

田町附近は地盤の脆弱であつたためか、軒を並べて殆ど總べてが倒潰した。随つて其の下敷となつた者も少くない。之に對してなされた人命救助の美しき話は到底悉くを擧げ盡すことが出来ないのである。赤化防止團員も八方に走り廻つて倒潰家屋から多數の人々を救出した。幹事の妹尾一君團員金川義雄君の如きは田町三丁目十番地待合若竹の女將吉田たま、其の娘さと、さとの長女藤子、下女原とき、其の他一名、都合五名が家屋の下敷となつてゐるのを發見して直ちに救助し、全く無事なるを得しめた。

家屋は倒潰した。餘震は斷續して止まない。火事さへも間近く起つて危険極りない。人々は山王臺を目がけて吾もくんと走つた。團員は老人や女子を或は手を引き、或は背に負ひ肩に掛けて山王へ山王へと運んだ。下敷となつた者を救出しては山王へと避難せしめた。どこの誰を背負つてやつたか。凡そ何人位を運んでやつたか。そんな事は全く分らない。附近に一人人居なくなるまで活動を續けた

までだ。二三時間は立つたらう。日枝神社に交渉して釜を借り、罹災者の爲めに炊出しをなす準備をしてゐると、此處にも火の手は延びて來たが樹木を焼いた位であつた。火は更に裏手へも廻つて行く形勢である。一刻も猶豫すべきにあらずと、避難者の悉くが議事堂建設場の方指して一時に押し出した團員一同は再び此の人々を運搬しなければならなかつた。赤坂郵便局の一團が一臺の自動車を持つてゐる。彼等は郵便局長の諒解を得て此の自動車を利用した一部の局員と彼等の一部とは協力して自動車走らせ、人々を載せては清水谷公園へと搬んだ車の廻る限り、ガソリンのある限り、彼等の精力の續く限り運びに搬んで夜の八時に及んだ。

團員は幾つかの班に分れて一つは右の如く運搬に従事した。一つは傷病者の救護に當つた。他の一班は炊出しをしたのである。山王臺でやりかけたのを清水谷公園で更にやり直したのだ。出來た飯は先づ公園に避難してゐる人々に恵まれた。一巡り公園がすむと田町から、溜池の方まで配給して歩いた。其の時既に夜半を過ぎてゐるのであつた。二日になると何處でも米を賣らない。炊出しの希望はあつたが事情止むを得ず中止しなければならなかつた。

三日は雨模様となり、午後からは可なり強い雨が降つた。焼出された上に雨に降られては全く助かない。天候を怪しと見て取つた防止團の幹部は先づ閑院宮、伏見宮兩家に交渉して、邸内の開放を

願つた。宮邸に於かせられては罹災民の窮状を察せられて出来得る限り開放せられた。四日に至つては山王裏の兩宮家にも請ふて開放と炊出しをして貰つた。村井家にも頼んだが、同家は實際危険で開放する譯にはいかなかつた。兎に角此の方面に居た避難者は彼等の盡力によつて雨露を凌ぐことが出来たのである。

地震の爲めに東京市の水道は用をなさなくなつた。其の結果は飲料水として井戸水を用ひるより外はない。不良なる飲料水を用ひた市民の衛生状態は誠に憂ふべき状態であつた。赤痢患者等が續々發生したのは事實である。赤化防止團に於ては衛生上優良なる飲料を供給したいと考へた玄米湯の接待を始めた。熬つた玄米を煮て其の湯を與へたのである。赤坂見附では五日から其の月の二十五日まで日比谷公園高柳ビルディング前では、十日から二十二日まで、毎朝五時から夜の九時に至るまで供給して怠らなかつた。非常勤務中の軍隊などは食事をして飲料がない。其の便宜を計るため特に朝の五時から供給したのだと云ふことである。

本部赤坂區田町三丁目八番地 赤化防止團

●黒龍會救護團の機宜に適した活動

黒龍會と云ふのは赤坂區中ノ町七番地の主幹内田良平氏宅に本部を置き明治三十四年大亞細亞主義を標榜して創立せられたものである。

内田良平氏の嚴父は大正十年九月八十五の高齡を以て故人となられた。福岡藩士で安政大地震の時は震關の黒田邸に在つて、具に、辛き體驗を嘗めさせられた。晩年には嗣子良平氏を初め同會關係の諸子に向つて常に「二三年中に安政の如き大地震があるに違ひない。今は昔と異なり、瓦斯とか電氣とか火熱を招び易いものを様々豊富に使つてゐる。井戸は殆んど其の影を失ひ、水道とても一朝大事に際しては必ずしも頼むに足らない。必ずや震災について大火災を招來するであらう。諸子は之に對する用意をなすべきは勿論、一度危難の帝都を見舞つた曉は糧食の準備が最も肝要である。」と訓へられた。

逝去後正に二年不幸にも此の豫言は適中したのであつた。九月一日良平氏等は庭に難を避けて互に嚴父の教訓を懐ひ浮べながら無量の感に打たれてゐた。

恰かもよし此の時主幹の弟君たる清本直實氏が本部に駆け付けて来た。清水氏は世田ヶ谷本宿に農場を經營し、傍ら附近の青年等を指導して居た。兄良平氏は嚴父の訓に基づき適宜の處置を執らんと考へて居た矢先として、弟君に對し糧食の購入方を命せられた。

清水氏は言下に之を諾し、直ちに歸宅するや、馬鈴薯を選定して其の購入に懸命の奔走を試みた。人は平生の心掛けこそ實に大切である。氏の訓陶を受けてゐた青年等は氏に協力して購入方に盡力した。幸にも世田ヶ谷にはガンソリンも豊富であつた。二日には馬鈴薯を積んだ自動車の中之町の同會本部に繰込んで来た。同所の人々は老も若きも共に力を合せて籠を築き、馬鈴薯を茹でては之に鹽を振りかける出来たものは町に持出して罹災者に給與した。附近には地震のため居宅を潰された者、餘震を恐れて逃げて来た者、大火に焼かれて難をさけた者等、幾萬の人々が飲むに水なく、食ふに飯なく困惑を極めて居たことゝて此の馬鈴薯が如何に歓迎せられたことであらう。飲料はなくとも副食物は無くとも十分に食欲を満すことが出来たのであつた。翌三日は近衛三聯隊に交渉して釜を借入れ、尙も盛に炊出した。茹でた物は自動車に積んで日比谷公園、東京驛前、二重橋前、濱離宮、増上寺遠くは上野公園、淺草公園、深川岩崎公園に到るまで罹災者を賑はして走り廻つた。清水君の手に購入された馬鈴薯のみでも前後すべて三萬貫と云ふ數を示してゐる。同會幹事の高村謹一君の如きは栃木縣

方面に買出しのため出張し、十噸を手に入れて歸京した。川越方面の購入に出かけた某氏の如きは朝鮮人と誤られて辛うじて難を免かれたことさへある。二日から十一日までに炊出した薯が都合五萬貫と聞いては其の機敏に驚かざるを得ない。

十二日から十四日まで三日間は東京驛前で粥の炊出しをして同様罹災者に馳走した。毎日一石以上の米を炊いたと云ふ。

此の頃になると當局の配給が追々安定的に進捗して来たので民間の特志的炊出しはさまで必要を感じなくなつたのである。震災の最中に或は直後に於てかくも敏捷に手配し糧食を多量に配給したのは機宜に適した行績として眞に賞揚すべきものである。

九月の半ば頃からは十數人を東西に走らせ震災に關する實地調査を行ひ「震災善後の經營に就て」なる印刷物を各方面に配布して意見のある所を述べた。

更に十月に入つては麴町區永田町二丁目八十六番地に地を相して自由宿泊所並に自由食堂を建設した。大震災を蒙つた帝都を復興するには労働者の力に俟つべきものが決して少くない。労働者に宿泊所を與へて労働能率の向上を計り、帝都復興の爲に力を添へんとするのが之を建設した主目的であるが宿無き者の救済も無論計らない譯ではない。

宿舎は三棟あり、三間に十二間のものが二棟、三間に十間のものが一棟、二百三十名を收容するに足る夜具としては毛布を貸與されるし、ストーブの設備もある中央を縦に通路が設けられてゐるので亂雑に流れぬし左右に並んで臥せるから室も經濟的に使はれてゐる。枕の上方に棚があつて荷を置くことが出来るが、特に携帶品を預る倉庫を設け、下足札の如く合札を渡して完全に保管してくれる浴場の設けもある。繼續的に宿泊するものは前日中に明日の分を約して置く。カードに宿泊する席の番號と宿泊者の氏名とを記入し、裏には何日契約と云ふやうに書いたのを渡される。一方には番號順に或はイロハ順に整理された原簿があつて、簡易に自由にすべてが運ばれるやうになつてゐる。それ故に労働者は歸る家を案じ、或は夜晩くまで宿を求めてさまよひ歩く心配はなく、安心して終日の労働に従事することが出来る。維持費として一泊毎に金十五錢を納める外、一切無料である。十一月五日から公開したが以來滿員つゞきで、受付は謝絶のための多忙を極めて居る有様である。

自由食堂は通勤者、學生、労働者の便を計つたもので、朝食は十錢、晝食と夕食とは各十五錢である。建物は凡て六棟、何れも平屋、材料は東京市から給與を受けて建設したものである。四宮寛二君が主任となつて職業の紹介をもしてやるし、赤十字病院と連絡して傷病者の療養までも親切に世話をしてゐる。

馬鈴薯や粥の炊出し、震災の調査、宿泊所及び食堂の經營、何れも黒龍會の幹部諸氏或は内田良平君を慕つて集まる諸君によつて、かくも機敏に時宜に適した活動をしたのである。此の外にも郷里福岡の學生聯盟、婦人有志より贈られた夜具類の配給も取次いでやつたとの事である。

赤坂區中ノ町七番地 黒龍會主幹 内田良平君

●柔道家の團結

有史以來の大變災は無數の死者を出した。無數の傷者を出した。と同時に幾多の衣食に困窮する人々を生じた。

高橋君は災後直ちに今井諦、加藤清丸兩氏によつて設けられた芝浦避難事務所の顧問として、熱誠なる助力者として罹災者の救護に夜を日について活動して居たが、今回の傷病者の治療は單なる醫師の手當のみでは到底善良なる効果を擧げ得ぬ事を感じ、大震火災によつて、或は其の後の激烈な復興事業に奔走し背を打ち、腕を抜き、足を折り或は腰を挫いた々人の診療法に眼を注いだ時、柔道家、

特に柔道整備師の團結して立つべき秋の來たことを悟り、都下、整備師に檄を飛ばして同志を糾合した。そして、

「社會國家の道德觀念を基礎として、強き信念の下に嚴寒、酷暑をも物ともせず、四時鍛練し來つた頑強なる身體を以て最も正しく眞に強き者として國難にあたり、柔道整備術を以て不幸なる罹災者を施療救濟し一人たりとも多く働き得る者を社會に送り、一日も早く震災地の復興を期さう。」との決心を示して活動を開始した。

左に同救護班の報告書の一節を採録する。

二、規定 (一、緒言を畧す)

- 一、本班は大正十二年九月一日以來、東京を中心として、關東地方、大震火災のため、打撲、捻挫脱臼等の罹災者に對し、整備術師として、有資格者中、連絡、了解をなし得られしものにより、本班を編成し、之れが救護に従事す。
- 一、本班員は、内務省令により、警視廳、其他の府縣に於て、柔道整備術試験に合格せしものにして、本班の意志に賛成し、本班員の推薦に依るものを以て組織す。
- 一、本班本部を當分の間、「小石川區表町八十六番地、久敬社道場内」に置く。

- 一、本班は本班の餘力を生ずるに従ひ、必要なる場所に支部を設置す。
- 一、本部及支部は藥品其他必需品を警視廳より供給を仰ぎ、罹災患者に對し、班員に依り無料治療をなし、其他に要する費用は班員の負擔とす。
- 一、本班の活動を圓滑ならしむるため、

代表者 一名 顧問 若干名
 主任者 若干名 事務員 若干名
 を置く。

- 一、本班は本部及ぶ支部に於て、所定の日割、及び時間割を作り、班員に配當して各々受持當番の班務に従事す。

三、現在班員及役員

本班代表者

大日本武徳會教士
 講道館柔道五段
 警察講習所、外國語學校柔道師範

高橋 數良 小石川區大塚町七〇番地

本班顧問

警視廳整復試驗委員醫師

高木三五郎

芝區愛宕下町

本班顧問

講道館柔道四段美術學校柔道師範

井上縫太郎

本郷區湯島同朋町七

班員

川上 榮藏	宮本 半藏	津田繁三郎	荒井 留吉	關根 源内	上野 正幸
奥澤 正光	關貞 次郎	長尾 景一	石山 源助	藤田 政信	高橋金五郎
渥美 爲亮	關 常三郎	安中寅三郎	岡本 善藏	平野 辰三	田島鐵次郎
吉田 榮雄	黒須 春次	田中鶴次郎	永井 尙知	小西 良助	須藤宗次郎

四、本班援助者

藤生安太郎君 久敬社(不笠原長生子社長)監督者(小石川區表町八六)講道館四段、外國語學校卒業
 森永製菓會社々員、として、震災後多用なる繁務の中、特に本班の爲め代表者を、扶け久敬社道
 場を、本班本部として開放し、本班の活動今日あらしめしは、實に同氏の援助の力と云ふべきなり
 別當 好平君 中央新聞記者
 田村 太郎君 同

中村 靈首君 同

代表者及び班務を、内外に援助され本班の活動遺憾なかりしを得しは、實に以上諸君の御盡力の賜物と云ふべきなり。

稻垣 重造君 外國語學校卒業、講道館三段

本班編成以來、本部に於ける頻繁なる、代表者の忙務を扶け、一方に於ては治療助手として、一日も缺席せしことなく、實に本班の活動に澁滞なきを得しは本班員の及ばざる所にして本班主動者と云はざるべからず、

この班が救護を開始したのは、九月二十七日で閉鎖したのは十一月十五日である。此の五十日間に於て本部及び各支部で取扱つた人員は合せて二百八十一名、一日平均三二、六名、延べ人數一千六百三十一名に及んで居る。

班員が罹災者に同情し、誠心誠意治療に従事した爲め、受療者も遺憾なく人情美を發揮した。甲の治療の間には乙の患者が繃帯を巻く、輕傷者を勞はる。その中の砲兵工廠の一職工の如きは、比較的輕傷のため勇氣を奮ひ晝間は工廠に勤め、夜間遅く本部で治療を受くるが常であつたが、

「私一人のために、皆様方に夜遅くまで御苦勞かけて誠に申譯ありません。どうか私に出来ること

でありますから、此の室の後片附と掃除をさせて下さい。」とまで申出た。

高橋君は本班を閉鎖した後の所感として、共力一致の効果の偉大であり、平素、團體的訓練の必要な事を力説し、氏が嘗て立教大學に於て電燈の下で外人の一人と日本人とがバスケットボールをして居たこのことを語つた。

試合中、バット電氣が消えた。

試合は中止、此の時日本人側には雜談が起つた。外人側はひつそりして咳する者すらない。

其の中に點火した蠟燭が運ばれた。外人の一人が點火した蠟燭を上下左右に振るかと思ふと合唱の聲が起つた。遊戯場は一變して音楽堂と化した。落付いた快い感じが場に満ちた。その時日本人側は黙つて聽入る様子であつた。電燈が點じた後に見ると蠟燭を打振つたのは白髪の老人であつた。

今回の震災に當つて、日本人に此の外人の如き訓練がしてあつたなら、あの大火も、も少し小難で喰ひ止め得たであらう。又あのやうな多數の死者も出さずに済んだであらうと悵然として語るのであつた。

東京市小石川区表町八十六番地久教 代表者 大日本武徳會教士 高橋 數 良君 (三十九年)
社道協柔道 整復術師臨時救護班 講道館柔道五段

編輯後記

全巻を分けて、救命、防火、責任、愛情、救護の五篇としたが、救命の中にも防火あり、防火の中にも救命あり、責任、愛情の如き美德は殆んど全巻を載せてあるので、その分類は非常に困難を感じた。従つて便宜上たゞその著しい點を取つて各篇に屬せしめたのである。

次に編輯上最も遺憾に堪へなかつたのは調査員が苦心蒐集した資料は、悉く珠玉の文字であるにもかゝらず紙數の制限から約、その三分の一を割愛するのやむなきに到つたのである。之が採否に當つては、

- 一、廣く世人を感奮せしむるもの。
- 二、永く後世の参考となるもの。

との二點に着眼したが、成可く事件の種類が多からんことと善行者の各階級に亘らんことを求めた爲め、悉くは之によることが出来なかつた。

左に割愛した事件の題目と善行者の氏名とを擧げて巻を終へることとする。

大火と戦ひつゝ二家族の人命を救ふ

本所長岡町四四

高橋安五郎君

ゆれ布團か龜三郎の働き相手

本所吉岡町七

淺岡龜三郎君

新宿御苑の垣を破つて避災民を救ふ

四谷旭町五六

山田清君

火中に隣人を救つた酒屋の主人

人を救ひ火を防ぐ兄と弟

人のために家財を河中に葬つてまでも

近頃の末吉が下敷の數人を救助す

男まさりのあさ子さん

老人が老人夫婦と近頃の男を救ふ

宮様の御消息を驚した森田君

隣り合のなさけ

他人を救つて丸裸體

本所元町の舊家高橋氏の健闘數萬を無事に避難せしむ

竹二郎さん二人の女の救ふ

三人を救つた男少年

倒潰家屋から五人を救ひ出す

他人の二兒を救はんとして身を殺した學生

七六四

赤坂田町四ノ二

本所中之郷横川町三六

京橋南小田原一ノ九

本所柳島梅森町一二

本所長岡町四四

本所長岡町一二

四谷寺町二八

本所吉田町一八

本所柳島一三二

本所元町一六

本所松坂町二ノ四

牛込辨天町一二八

神田今川小路一ノ一

本所相生町五ノ二八

山田千松君

有松君兄弟

木村勝次郎君外數名

榎原末吉君

荒木あさ子

松下徳三郎君

森田石松君

久保谷猪十郎君

山本鐵俊君

高橋與助君

石崎竹二郎君

芥川壽君

中山市藏君

川田四郎君

天晴な番頭さん

雨降に悲鳴の聲

孤子を抱いて死を待つ

倒潰家屋の一家族を救つた薪炭商

妻子を忘れ家を忘れての活動

親孝行な夫婦者の孝行ぶり

可憐な少年の親切を極めた道案内

忠實なる訓導

片岡竹次郎氏の情

教育擁護者

隣人に對する美しい情

校長さんが眞から感謝してゐる大工さん

避難者を救ふためにバラックを建設した親方

自宅の荷物を移して避難者を收容す

小石川久堅町九一

神田仲猿樂町二一

小石川竹早町三五金澤方

日本橋堀江町二丁目

牛込市ヶ谷小學校

下谷三輪町一〇

豊多摩戸塚町下戸塚五九七

北豊島西巢鴨町巢鴨廣中塚五〇七

本所吉岡町一二

神田松枝町一〇

本所長岡町六八

牛込西五軒町三四

牛込市ヶ谷藥王寺町

牛込水道町二九

春日武次郎君

小川幸吉君

井上勘藏君

鈴木榮吉君

職員 小使

小野正吾夫妻

施谷勳君

金網佐市君

片岡竹次郎君

谷岡鐵藏君

五十嵐友吉君

小俣復郎君

上田喜造君

水口源次郎君

七六五

老婆を救つた勇少年
 死を免れて防火につとむ
 變電所の勇者
 地震を恐れず失火を防いだ小使
 沈着に處理した東京府商工獎勵館職員
 家を壊して
 危険を犯して藥局の火を消した人々
 氷川青年分團の努力
 校舎の焼失を未然に防いだ職員の高岡
 孤立の状態中に東伏見宮邸を護る
 危険を冒して火を消しとめた勇士
 唯一人踏み留まる
 奇篤な社會奉仕者
 纏めしなかにあつて上野の山に

神田三崎町一ノ一 今泉 兄 三君
 本郷駒込助坂町一三七 大島しん 外一名
 松葉町變電所 助手組長 松本直一郎君外四名
 東京藥學專門學校 稻見 茂 市君
 工業試験部員 須原技師 外數名
 下谷坂本警察署 横田 隼 雄君
 豊多摩淀橋町柏木七八 久田藥局附近の人々
 赤坂氷川町 瀧口金彌君外一同
 近衛 歩兵第三聯 牛込小學校職員一同
 牛込區市ヶ谷曙町一五 大野 武 城君
 本所菊川町二丁目 山口金太郎外數名
 四谷區本村町一 星野熊次郎君
 本郷區向ヶ岡彌生町三ノ一 福岡 利 三君
 中野 あ つ子

社頭の水桶

勤務第一と非審査の活躍
 猛火をくゞつて産婦を救ふ
 身を捨てて公務に盡す
 沈勇克任務を果たした軍旗歩哨
 責任觀念の權化
 猛れる牛を薙ぎ倒しつゝ
 自警團員に包圍された警官を救ふ
 淺草區内小學校の活躍した人々
 猛火に包圍さるゝを顧みず主家のために働いた番頭
 鶴巻町一帯の火災を免れしめた恩人
 百名に近き若き女性の命の綱
 命の神と教はるゝ主人
 主家に盡した番頭さんの真心

總町日枝神社

高輪警察署巡查 宮西宮司 外七名
 愛宕警察署巡查 中島寅之助君
 代々幡代々木西原九六七ノ四〇 古關藏之助君
 歩兵第一聯隊第四中隊 横井 利 八君
 陸軍士官學校第一中隊 橋田 貞 司君
 總町憲兵分隊大編上等兵近衛第四聯隊 宮澤上等兵外九名
 近衛第三聯隊 大島護重君外十六名
 春日部環君 山川猛君 宮原清君 石井誠君
 本所仲業平町一七六 未 吉 輝君
 早稲田警察署 森 下 彌 幸君
 共立女子職業學校 高橋久次郎君
 牛込御天町一 杉浦彌太郎君
 本所相生町五ノ二〇 久保力三郎君

宿主の荷物を護る青年鮮人

お得意様の品物だけ全部出した染屋の女主人

得意先の品物だけ無事保管した洗濯屋

情深い先生

新宿御苑内に託見所を經營せし人

民間消防隊の組織ある活動

美はしき隣人の愛

死者の爲めに火葬の費用を募つた女

深き信念の下に隣家の急を救ふ

少年を假埋葬するまで

剛健な青年の大活躍克く一家を救ふ

孤兒を引取る

迷子の世話

自動車とガソリンの提供

七六八

慎申 辰君

堀川 シン子

荒川 秀士君

山本 三二君

高橋 直武君

惣町睦會員一同

濱田 金太郎君

新居 キヨ子

上原 健三君

溜貝 ユキ子

大塚 敬二君

佐藤 長次郎君

小林 鶴吉君

村松 道太郎君

深川 富川町二二角屋方

大井町 鯉洲一三〇堀井方

本郷 湯島三組町八一

本所 本横小學校

元陸軍少將

四谷惣町

本所 菊川町二ノ五七

牛込 四五軒町五三

牛込 水町三一

京橋 明石町三五天主公會内

本所 横川町二一

小石川 初音町三ノ一二

小石川 雜司ヶ谷一〇

小石川 大和町八

一家總動員で避難者に豆腐を配給した豆腐屋

奇篤な産婆さん 小石川 四九町一三 笈川 喜久子

なぐり飛ばして人を救ふ

感心な米屋さん 小石川 區宮下町七〇 内藤 政吉君

吾妻橋畔の勇士

邸内に百三十餘名の避難民を一ヶ月餘世話した子爵

富豪克く巨額を役じて救護に努む

同 酒井 忠良君 阪谷 芳郎君 増田 義一君

町會第一我家第二

鮮人三名を自宅に收容して歸國せしむ

鮮人八名の危急を救ふ

青年團の模範的活動

老母を負ふて大森まで

六十七の老妻を救つた相場調導

小石川 竹早町四八

小石川 林町一六

淺草 區田町二ノ一六

小石川 指ヶ谷町二三

淺草 區磯若町

雜司ヶ谷 二〇三

小石川 水道町二

小石川 水道町三五

深川 區石島町二一〇

池袋 木村二四七

金富 小學校卒業生

小石川 小日向台町

深川 冬木町一一

芝 愛宕小學校調導

鹽田 屋

矢野 あい子

三國 彌之助君

山口 甲子二君

島本 龍太郎君

吉川 元光子爵

三井 高修君

三井 源右衛門君

澤木 正太郎君

貝塚 一郎君

鎌田 文雄君

青年團員一同

羽山 とよ子

相場 恒次君

七六九